

# アジアの人々の協働から学ぶ

XXVII



第27回国際ワークキャンプ報告(インドネシア)

A REPORT OF INTERNATIONAL WORK CAMP (INDONESIA)

2013

桃山学院大学



IWC



Indonesia Work Camp 29 !!!



HBD!

Aduhhh!

Jump!



LUCU!



Goood!



bebat!!!

Bagus ♪≡

ganteng!!!

kerjas!

♡

♡

♡

♡



manis!

Cantik B

Siapa?

Maka

♡

😊



Semangat ☆

ZZZ

terima kasih ♡♡♡

Juee!



# 目 次

語句説明	1
大海の一滴にすぎないけれど	松 平 功 2
4回目の国際ワークキャンプ（インドネシア）の引率を終えて	福 田 公 教 4
プリンビンサリで歩きスマホするなんて思いもしなかった	黒 田 隆 之 8
初めての引率を終えて	浅 井 玲 11
IWC27 報告書	前 田 陽 介 13
MEMBER OF IWC☆27	15
テーマ	16
調理実習	17
募金活動	18
合宿	19
2013年度 第27回国際ワークキャンプ・インドネシア日程表	20
入村式	24
プリンビンサリ村	25
プリンビンサリ村の地図	26
アスラマ	27
アスラマ地図	29
アスラマの子ども達	30
日本語プロジェクト	31
小学校訪問	32
中学校訪問	33
高校訪問	34
看護学校訪問	35
第27回IWCのワーク内容	36
交流会	37
日本食	40
衛生指導	41
バニユボ村	42
第5アスラマ	43
離村式	44
ウンタルウンタル	45

ディアナプラ大学	46
文化探訪	47
エバリュエーション	48
アガペー・フェスティバル	50
<b>参加学生のレポート</b>	
「たくさんのありがとう」	学生隊長 岸田美香 51
「感謝と成長」	学生副隊長 日野瑞季 53
「バリ島で得たもの」	学生副隊長 深田侑杜 56
「たくさんの出会いに感謝」	坂口恵理 59
「体験を経験に」	片桐由佳梨 62
「忘れられない18日間」	折目理奈 65
「感謝」	上辻一毅 68
「未来へ」	中井剛志 70
「あたたかい人たち」	中本后紀 74
「学ぶということ」	石井彩奈 77
「学び、出会いに感謝」	丸野朝陽 80
「報告書」	藤村知憲 82
「新たな発見の連続」	勝美咲 85
「インドネシアで過ごした時間」	野上玖留未 87
「充実した日々」	堀田涼介 90
「色々な思いや目標を持ちながら参加した今年のIWC27」	青山丹 93
「成長させてくれた18日間」	明智未邑 96
「考え方が変わったIWC」	吉田和貴 98
	Bagus Prakasa 101
	Ni Nyoman Rai Puspayanti 102
	Putu Rian Aristianto 103
	Ida Ayu Supraptini 104
	I Nyoman Weda Sanjaya 105
第27回国際ワークキャンプ預り金精算書	106
第28回国際ワークキャンプ参加者募集要項	107
編集後記	109

## 語句説明

### あ行

- IWC ……International Work Campの略であり、「ワークキャンプ」と略して使っていた。  
アスラマ ……バリ・プロテスタント・キリスト教会によって設立された児童養護施設で現在バリ島に7ヶ所ある。私達はプリンビンサリ村にある第2アスラマで活動した。  
石井 美和さん ……現地の看護師の方。IWC27の健康面だけでなく、精神面、通訳などもサポートしてくださった。  
イブ ……インドネシア語でお母さん。ホームステイ先の母や、アスラマで働く女性もイブと呼ぶ。  
ウィディア・アシ財団 ……バリ・プロテスタント・キリスト教会の傘下にあり、アスラマを運営する組織である。

### か行

- 交流会 ……子ども達との親睦会。  
ガムラン楽器 ……インドネシアの伝統的な民族打楽器。

### さ行

- 事前研修 ……春学期からインドネシアに出発するまでにインドネシアの語学、文化を学ぶ。班ごとの準備もした。  
スイクラマさん ……アスラマ出身。桃山学院大学に2年間留学経験あり。7ヶ所あるアスラマの統括責任者で、バリ側のワークキャンプコーディネーター。私達の通訳も担ってくれた。

### た行

- チャプレン ……大学付牧師。

### な行

- ナシゴレン ……焼き飯。  
ネコ ……コンクリートを運ぶ際に使用した一輪車。

### は行

- パティック ……インドネシアの民族衣装。  
パパ ……インドネシア語でお父さんという意味。  
ピサングレン ……バナナの天ぷら。  
プリンビンサリ村 ……私達がホームステイした村。バリ島の西部のジュンブラナ県ムラヤ群に位置する。バリに住む多くの人はヒンドゥー教であるが、プリンビンサリ村はキリスト教徒が開拓した村である。  
フォルマンさん ……ウィディア・アシ財団職員。インドネシアの学生のお兄さんの存在である。スイクラマさんのアシスタント。

### ま行

- マンディ ……日本語で「お風呂」、「水浴び」という意味である。  
ムラヤ ……ムラヤ群ムラヤ村

### や行

- 指さし本 ……絵付きのインドネシア単語帳

## 大海の一滴にすぎないけれど



IWC27 団長 大学チャプレン 松平 功

「わたし達のしていることは、大海の一滴に過ぎません。ですが、もしこれをするのをやめれば、大海は一滴分小さくなるでしょう」。有名なマザー・テレサの言葉です。マザー・テレサの語る「大海」とは、思いやりや親切による小さな働きが、一滴ずつ集まってできるような愛の「大海」を意味するのかもしれませんが。どれほど小さな愛の一滴であっても、それが集まれば大海となる。しかし、小さな一滴など意味がないと考えてしまうと、愛の海は「大海」にはなりえないのです。一人ひとりが一滴の愛を注ぐからこそ、愛の海は「大海」になりえるのです。インターナショナル・ワークキャンプ（以下IWC）は今回27回目となりますが、各年のIWCチームがそれぞれの様々な働きによって、毎年、一滴一滴と少しずつではありますが、小さな愛を注ぎ続けることができました。

その小さな愛が結晶を作っていくかのように、わたし達が訪れるプリンピンスリ村の児童養護施設は、IWC開始当初とは比べ物にならないぐらいの進歩を遂げています。4年前の施設からしか知らない小職でさえ、その発展に驚かされます。訪れる度ごとに施設に手が加えられているのです。デコボコしていた地面がきれいに舗装されていたり、斜面だった所に階段が造られていたり、荒地であった空間に浄水池が設置されていたりという具合に、何かが変わっているのです。その理由は、数年前から、アメリカ、オーストラリア、オランダ、シンガポール、ドイツなどから学生達が施設改善や子ども達との交流のために本学のIWCと同じように、プリンピンスリ村を訪れているからです。そして各国の学生達が、知らず知らずに連携するような形で色々な箇所を完成させているのです。例えば、アメリカの学生が斜面を掘り、次にオーストラリアの学生が階段を組み立て、その後ドイツの学生が手摺部分をというような継続的連携です。IWC25で行った女子寮の基礎工事も、他の国々から来た学生達の手によって建設が継続され続けて完成に至ったと聞いています。当然、それぞれの国の学生達は、他の学生達のことも、その働きも知りません。しかし、確実にその働きは結実しているのです。その事実を知った時、多くの学生たちの働きが、一滴一滴と集められて「大海」に注がれていく様を思い浮かべました。

IWC27の男子学生達に与えられた主要なワークは、女子マンディー場（トイレとお風呂の施設）の基礎工事と浄化槽用の穴掘りでした。皆が一丸となって苦しい穴掘りを行いました。作業スペースが狭いことと硬い粘土層というダブルパンチで、非常に困難なワークを経験することになりました。結局、すべてのワークを終えることのできなかつた学生達は、消化不良のような口惜しい思いを募らせていました。しかし、他の国々の学生達とのワークの連携という意味でこれを考えるなら、完成させないことが逆に喜ばしいことでもあると捉えることも可能です。自分達の知らない国々の、自分達と同じ大学生と連携してワークが完成するのです。自分達だけの努力によるものではなく、他国の学生達との共同作業ができるという所に、IWCの大きな意味のひとつを感じてもらいたいと思います。

また、女子学生達は土手の整備活動や畑仕事など、多様なワークを体験しました。特筆すべきは、カ

ンクン（空芯菜）という野菜を植えたことでしょう。カンクンは田んぼのように水のはってある泥の中に生える植物で、当たり前ですが、泥水の中に入らなければ植えることはできません。現地の職員は「泥水の中には何もいないから大丈夫だ」と太鼓判を押してくれるのですが、田植えすらしたことのない学生達にとっては、「南国の泥水の中に不気味な恐ろしい生物が生息している」と想像してしまうようです。しかし、子ども達の食糧になると聞いた学生達は、裸足になって恐る恐るではありましたが、泥水の中に入っていました。気味が悪いといって悲鳴を上げながらも必死で、泥だらけになりながらカンクン植えを完了させたのです。彼女達の母性本能的な強さと、その働きには脱帽しました。

与えられたワークだけではなく、子ども達との交流会や小・中・高および看護学校で日本語を教えるプログラムなど、また、その他多くの取り組みをIWC27の学生達は一生懸命にやり遂げて行きました。各々の学生達が深く考え、時には悩み、時には憤り、時には涙を流して皆で一緒に苦しみ、皆で一緒に耐え、そして皆で一緒に大笑いするという、とても忙しいチームでした。そして、とても魅力のあるチームでした。このIWCで培ったチームワークや様々な経験を自分達の未来につなげて、人生の色々な場面で活用してもらえればと願います。彼らの大きな成長を期待してやみません。IWC27の働きは「大海」の一滴にすぎませんが、彼らはその一滴が最も大切であることを心に刻みつけたことでしょう。最後に再びマザー・テレサの言葉で締めくくりたいと思います。

「導いてくれる人を待ってはいけません。あなたが人々を導いていくのです。もし貧しい人々が飢え死にするとしたら、それは神がその人たちを愛していないからではなく、あなたが、そして私を与えなかったからです」。

## 4回目の国際ワークキャンプ（インドネシア）の引率を終えて



社会学部社会福祉学科 福田 公教

### はじめに

はじめに第27回の国際ワークキャンプ（インドネシア）の実施に携わって下さった関係者のみなさまに御礼申し上げます。こうして、報告書への文章を書くことができたようになったのも、偏にみなさまのサポートがあつてのことと考えています。ありがとうございました。

### 事前研修について

今回は参加者の定員20名に対して倍以上の参加応募があり、参加者の選考は大変難しいものになった。本来、応募者全てを引率できれば良いのであるが、各種の条件からそれは難しい。しかし、今回参加学生の選考に自らも立ち会った経験は、引率教員としての自覚を促すものとなった。また、今回は意識的に時間を作って、事前研修に足を運んで、学生の様子や準備の進み方に気を配ったり、できる範囲でこれまでの経験を生かしたアドバイスを学生に送ったりするように努めた。それでも、限られた回数しか足を運ぶことができず、学生には顔を覚えてもらう程度にしかならなかった。引率教員として、事前の研修にどのように関わるかは私にとっての大きな課題のままである。

その事前研修であるが、その多くは松平チャプレンと三宅先生の指導に負うところが多く、大変感謝している。それというもののこのワークキャンプの成否は事前指導にあるといってもいいと思うからである。ワークキャンプの成否は、一概にいうことが難しい。それは参加者個々の心の内にあるものかもしれない。そういう意味では、参加者全員が大成功というのはむしろ現実的ではなく、そう思うものもいれば、それぞれ何らかの課題を感じて帰国の途に着いたものもいるのが実情であろう。また、このワークキャンプの面白いところは、続きがあるということである。ワークキャンプの流れは、事前研修、インドネシアに滞在して18日間、そして事後研修と続いて、解団式で一区切りということになる。しかし、これまでの参加者の様子を見てみると、ワークキャンプが終わってから、もしくは大学を卒業してから、きっとワークキャンプでの経験を生かしているであろう取り組みをしている学生が少なくない。ワークキャンプの成否は、今ここで結論を出すというよりも5年後、10年後の参加者の生活の有様から判断されるのかも知れない。参加者の皆さんには、是非ともこのワークキャンプでの経験を生かして、豊かな人生を歩んでもらいたいと思っている。

### 引率教職員について

今回は、日本からの引率者は、団長の松平チャプレン、黒田先生、職員の浅井さん、私費で参加して下さった三宅先生それから私の5名であった。インドネシアからの引率者は、スイクラマさん、フォルマン、石井さんである。合計で8名の引率によって、現地での活動が指導される。大学の教員というも

のは、普段は集団指導よりもそれぞれが独自の指導方法をとっており、そのオリジナリティの上に各人のアイデンティティがある。しかしながら、ワークキャンプでは個性が強く、他者に対して妥協をしない者同士が力を合わせて、学生の指導に当たらなければならない。これは本当に難しい。今回も参加学生から、「先生の指導方法を一本化して下さい」とか「先生方のいうことがバラバラなのでどうしたら良いのか分かりません」と意見されたことがあった。もっともな意見であるが、それに沿って、教員が個性を押し殺して、意見を統一する必要は無いと私は考えている。その前提として、引率者はこのワークキャンプに対するそれぞれの引率者の思いや方向性、最終的にこのワークキャンプが何を目指しているのかということとを共有しておくことが必要であろう。

そのためにインドネシアに滞在中は、毎晩引率者でミーティングが行われる。学生の状態やそれに合わせた学生指導の方向性、およびインドネシアに滞在中によくある急な予定変更への対応策を練るなど、なかなか引率者の夜は忙しい。しかし、今回は、学生の頑張りによって、体調を崩す学生も少なく、ミーティング中にチャプレンと黒田先生の絶妙の掛け合いにより、よく笑わせてもらった記憶が残っている。

参加学生には、年齢や背景とする専門性の異なる引率教職員の個性を踏まえた指導の受け方や波長の合わせ方を学び取ってもらうこともこのワークキャンプの醍醐味の一つだと考えて欲しい。

#### 参加学生について

個性豊かな学生が集まっていた。事前の研修では、チャプレンから厳しく指導を受けたり、学生によっては、個別面談での指導もあったように順調に準備が進む場面ばかりではなかったと聞いている。その個性豊かな、もしくはワークキャンプへのモチベーションもさまざまな学生をまとめ上げるリーダーがいた。

振り返って考えてみるとみか以外に学生のリーダーはいなかったであろうと思えるほどの立派なリーダーシップを取ってくれた。学生間の調整や教職員への報告、連絡、相談と学生リーダーは本当に多忙なわけであるが、マイペースで事を進めることができていた。また、年齢の近い大人として、引率職員の浅井さんのフォローも大きかったのではないだろうか。お疲れさまとともに今回のリーダーとしての経験に自信を持ってもらいたい。

リーダーのみかの下には、サブリーダーとしてゆうととみずきが選ばれていた。サブリーダーの役割とはどのようなものだろうか。リーダーの個性やグループメンバーの状況によって、その役割は変化するものである。そういう意味から、サブリーダーはとても重要な役割であり、とても難しい役回りを期待されている。そういう観点私が見たところ、二人の働きは当初、課題を持っていたが、ワークキャンプをすすめていく中で、とても優秀なサブリーダーぶりをみせてくれた。

通常、普段自分が生活している日本と違うインドネシアでの生活は、自分の身の回りのことをするだけでも大変な作業となる。それに加えて、毎日のワークや種々の活動が続くわけであるから大変なことこのうえないのが、学生の毎日ということになる。そのなかで、自分のことよりも周りに気を配ることができるだろうか。みずきは私に意図的に毎日全てのメンバーに声をかけていると語ってくれた。活動のはじめからそうしていたわけではないだろうが、彼女がサブリーダーとして、自然に身につけたメンバーへの気配りだったのだろう。ゆうとは、ワークが始まってから早い段階で朝のスピーチに手を挙げてくれた。彼の発言の詳細は忘れてしまったが、要するに「引率教職員に言われて動くのではなく、学生が主体的にワークに取り組もう」というような内容だったと記憶している。その時、彼にはメンバーがやるべき事の方向性が明確に見えていた。かつ、彼はそれからのワークにおいて、口だけではなく行動によって見事にリーダーシップを取るようになったのである。それから、どことなく締まった表情

の彼はサブリーダーとしてとても頼もしい働きをしてくれた。

以上のリーダー達のもと、他の学生はそれぞれの課題に向かって、毎日のワークを行うこととなった。それぞれの目的意識やその時その時の必要に合わせて、活動する学生の動きを見守るのが楽しい日々が多いワークキャンプとなったと思っている。私の方から時に、一方的にメッセージを伝えることがあったが、あれらの発言が果たして効果的であったのだろうか。確かめることはできないが、私の意見を聞いてくれた学生さんには感謝している。みんな、ありがとう。

## ワークについて

今回のワークの中心は、男子学生は女子用のマンディー場の穴掘り、女子学生は農作業となった。私はワーク開始後少ししてから、男子学生のワークと一緒にいった。もともと腰痛持ちの私は他の引率者からあまりワークに力を入れすぎないように言われているのであるが、取り組むこととした。思い返すと、そこにはいくつかの理由があった。まず、学生と一緒にワークに取り組むことでその大変さの度合いを理解したいということである。次に、一緒にワークに取り組む中で、ワークキャンプの意味を考えてみたいということである。最後に、ワーク自体、危険な作業であったので、身近なところで学生に危険が及ばないように見守りたいということである。

実際に活動してみると、狭い空間を有効に活用して、作業を進めるのは思った以上に大変であった。その状況に加えて、スコップ・クワ・ツルハシなど、現地の作業用具を使いこなせるようになるまで、一定の時間がかかるし、作業中に穴の中に排水が流れ込んでくるなど、予想していなかった事態にも対応しなければならず、思ったように作業がはかどらない。作業を見ていて分かることと、実際に作業をしてみても分かることには一定の開きがあるのを実感した。

そういったなかで、このワークの意味とは何であろうか。このインドネシアのワークキャンプでは、一貫してテーマを「アジアの人との協働から学ぶ」としている。我々のワークの意味をいくつかの視点から考えてみた。

まず、アスラマの子どもへの影響である。子どもは我々のワークを傍目に見ながら生活をしたり、一緒に作業を手伝ったりする中で、何らかの困難を抱えて、アスラマで生活する自分たちのために汗を流してくれる人がいるということから、何かを感じてくれているのではないだろうか。単に遊び相手になったり、日常生活の世話をするというだけでなく、彼らの今後の生活の質の向上に資する活動を行うことは、きっと彼らをエンパワメント（力づける）している。

次に、インドネシアの現地で生活している人々への影響である。ひたすらクワで土を掘り、それを他の場所に移す作業をしながら、ふと思うのが、日本だったら…ということである。重機を使えばあっという間に終わるような作業を行う中で、そういった考え方が上から目線の支援であり、協働とはほど遠い態度になるということである。彼の地で彼の地のやり方で作業を進めるそのことに大きな意味があると言わねばならない。

最後に参加者にとってである。一つの作業をみんなでやると当然そこには、進め方などで意見の相違が出てくる。それまでの経験やワークへの思いなどは人それぞれであることが如実に出るのがワークへの取り組み姿勢ではないだろうか。そのような異なるメンバーが力を合わせて、一つの課題に取り組むプロセスで学ぶことがある。他のメンバーに時には怒り、時には許し、あらゆる場面で一人で作業をするよりもみんなで一緒に活動することの難しさと喜びを体験することになる。

以上のようなワークに取り組むことは、ワークキャンプの本来の意味を見つめることにもなるのである。というのもバリ島でも端に位置する場所での我々の活動は、色んな人の目に付くようである。そういう意味では、色んな所から声をかけられて、つつい付き合いで出かけることもある。そこにはそこ

でバリならではの文化や生活習慣を学ぶ機会になるわけであるが、そういった活動が増えすぎると本来のワークキャンプの目的を忘れがちになってしまうものである。これからのワークキャンプでもワークを大事にして行って欲しいと願っている。

#### ティダ・アパ・アパの意味するところ

バリでの活動中によく聞く慣用句に「ティダ・アパ・アパ」がある。その意味するところは、奥深いものがあり、簡単に日本語に翻訳することができない。よく使われるのは、何か事が上手くいかなかったり、予定通りに物事が運ばない時に使われる。「細かいことを気にするな」「くよくよするな」、何か失敗した時に「しょうがないよ」というような使用方法であろうか。我々日本人に対しては、「そんなに深刻に考え込むなよ」というような意味合いもありそうである。

この慣用表現とどう付き合うかは、日本人がバリの文化とどう付き合うかという所とも関係している。バリの人からのワークキャンプへの期待の一つに、日本の文化から何かを学びたいということがある。それは我々にとってもバリの文化から何かを学びたいということがあるわけだが、このような場合、普段日本で生活している時にはあまり感じない、自分の日本人らしさを実感することになる。勤勉でまじめ、何かをする時にしっかりと準備するこのような姿勢は、日本人にとってありふれた価値観である。私達がバリで活動する時、このような視点を失ってはならないと私は考えている。事に当たって、適当な準備でも構わない。だって「ティダ・アパ・アパ」の鳥なのだからということではないのである。日本人にとって、十分準備してもなおかつ、予定通りに行かない時、うまく事が進まなかった時に「ティダ・アパ・アパ」の本来の意味を理解する機会を得るのであろうと考えている。

#### さいごに

学生の成長を促すワークキャンプの引率をしてきた中で、私自身が驚くほど成長する機会を与えてもらったと思っている。まだまだ至らぬ引率教員ではあるが、これからも日本の子どものことにとどまらず、世界の子どもの福祉を考えられる教員となれるよう努力していきたい。この国際ワークキャンプ（インドネシア）が我が国とインドネシアの交流の種として、続くことを祈念して終わりの言葉としたい。

## プリンビンサリで歩きスマホするなんて思いもしなかった



社会学部社会福祉学科 黒田隆之

最初に、今回のIWC27の引率者として参加させていただけたことに感謝しております。また、IWCをサポートしてくださっているすべての皆様に感謝いたします。本当にありがとうございます。IWC27は、団長もおっしゃっているように、最終的には非常に上手くいったと思います。私の報告は、一引率者としての思いの断片です。

### 1. コミュニケーション

これまでもいろいろな引率を経験してきた私にとって、IWCに参加する学生たちには、チームワークよく積極的に行動し、自分の持つ時間も能力もすべてIWCに全力投球するというような、好印象があった。それは、過去にIWCに参加した私の身近にいた学生から受けた印象である。しかし、今回、その印象は、かなり早い段階でゆらぎ、どちらかというとやる気がない学生ばかりが、選抜されてきたのではないかと、心配になった。あちこちから聴く情報を整理すると、準備のための集まりに来ない学生、話し合いが上手くできない学生、一生懸命頑張れない学生、根拠のない自信だけがある学生、面倒くさそうにやってくる学生…。人と関わることが苦手なのか、自信がないのか、そもそも関わりたくないのか、何か理由はあるとは思うのだが…。

学生主体のIWCとはいえ、このままほっとくわけにもいかないということで、団長と私の二人が、準備段階で、何度か学生と個別に面談を行った。はっきり言って嫌な役回りである。学生との関わりにおいて、自分の立ち位置を学生と同じところにおいて、学生と協働しながらコンフリクト（衝突）なく一緒にやるという方法は、引率教員としては、比較的やりやすいというか、できればそうしたい方法である。しかし、そういうわけにもいかない状況では、そして大学教育の一環としてのIWCということを考えると、指導的な立場から学生に関わらざるを得ないのは当然である。

個別に面談を受けた学生の中には、私の専門である社会福祉的な面談技法と団長のラディカルな面談技法が、混ざり合うようで混ざり合わない面談を苦痛に感じた人もいるかもしれない。私たち引率教員は、学生のことが嫌いなわけがない、どちらかというが好きだ。だから一緒に行こうとしている。私たちからすれば学生のためを思ってやっている指導だけれど、学生の中には、面談の内容に、納得できないこともたくさんあっただろう。理解しないまま腹を立てて帰った学生もいると思う。私個人としては、面談した学生一人ひとりの参加意欲やIWCへの意気込みと、学生のコミュニケーション力や性格がとてもよく分かって、やってよかったと思った。そして、何も問題が発生していない状況でも個別に面談をすることは必要なことのように思えた。ただ、私は（団長もそうだと思うが）、この面談にかなり疲れた。出発前に、エネルギーの半分以上は使ってしまったように思う。

## 2. プリンビンサリで歩きスマホ

ということもあり、インドネシアに着いてからは、俄然、元気が出てきたように見受けられる三宅先生と福田先生、そして浅井さんに（私の気持ち的に勝手に）バトンタッチして、私は、エネルギー切れにならないために省エネモードに切り替わった。もちろん団長は、全体の調整やら学生への対応やら大忙しなので、私は、団長の気持ちを和らげるお話し相手として、時に軽口話を、時にシリアスな話をし、引率教職員が関係よく円滑に業務をこなせるようにしていたつもりだったが、ただ単に調子のいいうるさいやつと思われていたかもしれない。学生と18日間を過ごすことよりも、教職員と18日間を一緒に過ごすことの方が、ある意味、教員である私にとっては大きなチャレンジであった。

さて、いつも学生を引率していて楽しみなのは、学生同士に教職員も含めた集団としてのグループダイナミクスを、観察することである。もちろん私もその参加者でもある。ここでは、その詳細を報告しないが、お互いの関わりの中で一人一人が日々変化し、失敗や嫌なことも経験しつつ、それを乗り越えようと成長していく、うまくいった成功体験や努力が実ったときの喜びを共有できる、全員でこのワークキャンプを充実したものにしていくと大きなエネルギーが、プリンビンサリ村滞在中に生み出されてくるのが実感できた。出発前に面談したことが少しでも役に立ったかなと、自分を慰めたりもしたが、プリンビンサリを離れる直前に、引率教員からの関わりで学生に大きな戸惑いを与えたことは、非常に中途半端なかたちになってしまい、私はとても反省している。申し訳ない。

さて、私の滞在中の重要な任務の一つは、大学のFacebookに投稿する写真と記事を毎日チャペル事務室にメールで送るという仕事であった。毎日、朝から晩まで100枚くらい写真を撮って、その中から良い写真を10枚程度選んで、一日の内容を記事にする。最初の頃は深夜までその作業をしていたが、慣れてくると、活動の写真をiPhoneで撮って、すぐにその場でいい写真を選んで、記事を書くというようになった。気がつけば、プリンビンサリ村で歩きスマホしている私。日本とっしょだなどと、ちょっと笑ってしまった。ちなみにSIMロックフリーの携帯電話を持っていれば、現地でインドネシアの通信会社TELKOMSEL等のプリペイドSIMを購入して、3G回線で、通話もインターネットにも接続することができる。テザリングも可能。私たちが行ったすべてのところで通信が可能であった。アスラマやプリンビンサリ村内はもちろん、厳しい生活環境で暮らしているバニュボ村でもインターネットに接続でき、Google Mapで地理的状况を確認しながら、説明を聞くようなこともできた。電波の特性を考えれば当たり前なのだが、携帯の電波はあるのに、十分な水や食料がないという状況に、複雑な気持ちになった。

それと、おそらく今年からなのだと思うが、なんとプリンビンサリのアスラマ内にインターネットに接続するためのWi-Fiルーターが設置され、施設訪問者がインターネットを利用できるようになっている。今回、学生たちも引率教職員もその恩恵にあずかり、利用させてもらっていた。昨年までは、現地のメンバー以外の人たちとは連絡が取れない状況の中、ワークキャンプが実施されていたと思うが、今年からは、休憩時間には、メールもLINEもTwitterもFacebookもできる。日本の家族や友達ともすぐに連絡が取れる。この状況が学生たちの活動にどのような影響を与えているのか、良い面も悪い面もあるだろうから、検討しなければならないと思う。それとあわせて、このインターネットにつながる環境があるということを活用して、新しい支援の方法を考えることができるのではないかと思う。ぜひ学生に考えてもらいたい。

## 3. 誰もが参加できるIWCに

インドネシアでのワークキャンプは、現地での生活環境が日本と大きく異なるために、現状ではすべての学生が参加できる状況にあるとは言えない。体調不良や作業中のケガが、深刻な状況につながってしまうことも考えると、それは仕方がないことのように思う。しかし、今回、様々な状況にある学生が、

このIWCに大きな興味を持ってくれているということが理解できた。IWCが教育の一環として単位化されていることから考えて、現地でワークキャンプに参加するという方法以外にも、アスラマ内にもWi-Fiの電波が飛んでいるこの時代だからこそ可能な、すべての学生がこのIWCに関わることができる方法や仕組みを検討する準備を始めてもいいのではないかと思う。

#### 4. 自分が変わることで世界が変わる

学生たちは、自分がインドネシアの子どもたちのために何かしたいと思って、IWCに参加したと思う。実際には、自分が何かの役にたったという充実感は、得られていないかもしれない。しかし、自分自身の内面の変化は大きかったのではないだろうか。インドネシアに行く前の自分と今の自分を比べてみてほしい。きっと大きく成長しているだろう。

人との関わりは相互作用である。自分が他者に働きかけるとその反応により自分も変化する。それを繰り返すことでお互いの変容していく。そう考えると、自分が変わることで、世界を変えることは、つながっている。私自身も、今回のワークキャンプで、出会ったすべての人たちとの関わりから、たくさんの影響を受けた。こんなに刺激的な毎日を過ごしたのは久しぶりだ。学生たちにとっても、人生を変える経験ができたワークキャンプだったに違いない。今後の学生たちの活躍に期待する。

## 初めての引率を終えて



研究情報部 図書館事務課 浅井 玲

はじめに、24人全員がワークキャンプを終え無事に帰国できたこと、そして現地でお世話になった方々、快く送り出してくださった図書館事務課の皆様、関係するすべての方に心から感謝いたします。

今回で27回目となるインドネシア国際ワークキャンプ。私が生まれた1986年に始まった“同い年”のプログラムに、入職5年目にして突然ではありましたが、有難くも引率のお話をいただきました。私は本学の学生たちが大好きで、引率することが決まったときには「IWCの学生は、参加前と参加後で大きな変化がある」と聞いていたのと、過年度のIWCに参加した卒業生から「IWCでの経験は、私の人生を変えてくれた。絶対に行った方がいい」とのコメントをもらい、是非その変化を見てみたい！という嬉しさばかりでした。ところが、「授業が全部受けられない分、独学でも頑張ろう！」と、気合十分で始めたインドネシア語も、恥ずかしながら、出発までに覚えられたのは簡単な挨拶と自己紹介だけでした。行けば何とかなるだろうという持ち前の楽天的な考えも、出発日が近付くにつれ「学生たちは語学だけでなく、炎天下での募金活動や事前準備を必死に頑張っていたのに…」という焦りと、やはりインドネシア語が話せないことで消え去ってしまい、「こんな状態で行っていいのか」と、だんだん不安になっていきました。しかし、松平チャブレンから現地スタッフは英語が話せること、お世話になるスイクラマさんは本学に二年間留学していたので日本語が堪能であることを聞き、言葉の心配だけは軽くなりました。アスラマの子どもたちの中にも英語が話せる子が居て、石井美和さんと彼らには、インドネシア語しか話せない子どもたちや村の方々とのコミュニケーションの際に、とても助けられました。

アスラマの子どもたちは生命力があふれていて、毎日を全力で生きている！という感じが伝わってきました。それぞれの実家では十分に食べられないかもしれない食事を、おいしそうに食べ、元気に学校へ行く。帰ってくると学生たちと全力で遊び、みんなを笑顔にしてくれました。学生も子どもたちに負けないくらい素直で、純粹で、たくさん元気をもらいました。

到着してしばらくは、引率という立場上あまり子どもたちとの交流は無いと思っていましたし、ほかの先生方よりも学生に年齢が近い分、学生との距離や接し方など初めは戸惑いもありました。そんな中、出発までに話す機会が無かった学生もよく話しかけてくれ、ホームステイ先での話やインドネシア学生たちとの話をしてくれるようになったのが嬉しかったです。子どもたちもすぐに名前を覚えて、見つけると満面の笑みで手を振ってくれるので、なんだか妹弟が増えたようで毎日が楽しくなりました。実は、アスラマでの最初の2日間は、毎朝4時半には起きて5時前から賑やかになる子どもたちに悩まされていました。たった1時間でも、目覚ましより早く子どもたちの騒ぐ声に起こされてしまうのが辛かったです。それも慣れてくると、「今日もみんな元気だなあ。また一日が始まるんだな」と、早朝に起こされることも幸せだと感じるようになりました。

4日目に、子どもたちの出身村のひとつであるバニユボ村を訪れましたが、過年度の報告書や事前研

修で想像していたよりも劣悪な環境に言葉を失いました。「ここがキッチンです」と案内されたのは、本当にここで調理しているのかと目を疑うような古びた小屋でした。マンディ場として案内されたところは、囲いも低く、わずかに溜まっている水の底には茶色や緑の苔が生えていました。このような劣悪な環境で、なぜ彼らは笑顔でいられるのか。日本での生活がいかに恵まれているかを考えると胸が苦しくなり、アスラマの子どもたちの笑顔や時折見せる寂しそうな顔が浮かんだのを覚えています。

住人の方のお話を聞いているとき、壁に掛かっている写真や絵が目に入りました。その中でも真ん中に飾ってあるのが、アスラマで暮らしている子の写真でした。パニユポ村から戻ってからは、食事や子どもたちの顔を見る度に「衣食住に不自由な生活と、家族と一緒に暮らせること、どちらが幸せなのだろう」と考えてしまいました。

お世話になったプリンビンサリ村の人々は、いつも笑顔で心が温かく、大きな愛をもった魅力的な人ばかりで、学生たちのことを「娘・息子」と可愛がってください、私達教職員にも非常に親切にしてくださいました。アスラマでお世話になったイブの中には、英語をあまり話さない人も居ましたが、言葉が通じなくても毎日いろいろ話しかけて私のことまで娘のように可愛がってください、帰る際には泣きながら「Sampai jumpa! (また会いましょう)」と、骨が折れそうなくらい強く抱きしめてくれました。

バリの人々と話しているとき、よく耳にするのが「Tidak apa apa (大丈夫、大丈夫)」という言葉です。大抵のことはそれで済んでしまうので、本当に大丈夫なのかと不安になることも。適当な言葉に聞こえますが、彼らと過ごしているうちに、焦らず苛つかず目の前のことにしっかりと向き合い、毎日を丁寧に生きているのだと思うようになりました。

インドネシアでの18日間を通して、学生たちが壁にぶつかり、前に進もうともがき、涙を流し、そして日々成長していく様子を間近で見たことで、私自身もたくさんのお話を教わりました。事前研修が始まった頃は少なかった学生同士の会話も、ワーク中や食事中など、寝ている時とお祈りの時以外は喋っているほどになり、本当に家族のようです。

今回のIWCで、自分の無力さを痛感し反省する点も多々ありました。私には、もう一度IWCの引率をするチャンスは無いかもしれませんが、これから行こうか迷っている学生には、是非参加することをおすすめします。

## IWC27 報告書



社会学研究科 前田陽介

私は、この第27回国際ワークキャンプ・インドネシア（以下、IWC）に初めて参加させていただきました。私のゼミの指導教員である福田先生は数回に渡ってIWCの引率教員を務めておられます。毎年夏にIWCから帰ってくる度に「陽介、インドネシアはええで一。子ども家庭福祉に関わるんやったら一回は行くべきや」と何度も誘っていただきましたが、なかなか行けるタイミングがありませんでした。今年の夏は修士論文の執筆や就職活動がある中ではありましたが、学生最後の夏ということで無理矢理にでも参加しようと思いました。

このようにぜひ参加したいと思ったのも、IWCは自分の専門分野でもある子ども家庭福祉領域や、就職先でもある児童養護施設に深く関わっているという理由があります。IWCに参加することで多くのことを経験し、学ぶことができました。

日本の児童養護施設（以下、日本の施設）とインドネシアの児童養護施設（以下、アスラマ）では文化的・宗教的な背景に違いがあり、単純に比較することが難しいですが、その中でも違いというものを何点か挙げてみたいと思います。

まず、入所理由が異なります。日本の施設に入所してくる子どもの原因の多くは「虐待」です。そしてアスラマに入所してくる子どもの原因の多くは「貧困」です。家庭では子どもを育てるだけの経済力がないのでアスラマに入所することになるのです。

このように入所理由に違いがありますが、子ども達が受ける愛情にも違いが生まれます。虐待が理由で入所することになった子どもは、親や保護者から十分な愛情を受けずに日本の施設に来ることが多いのです。一方、貧困が原因で入所することになった子どもは、長期休暇などを利用して家庭に帰ることをしているそうです。ここで親との関係をしっかり構築し、愛情を受けながらアスラマで暮らすことができるのです。

アスラマで生活させていただいた感覚で言うと、子ども達は集団行動・集団生活を行なっているにも関わらず、非常に落ち着いて生活しているように感じました。これはアスラマで生活しながらも帰る場所や、待っている家族の存在がいることが関係しているのではないかと感じました。

次に、運営資金のやり繰りが異なります。日本の施設の多くは社会福祉法人と国からのお金で運営をしています。アスラマでは国からお金が出ません。その為、様々な国からの寄付で運営をやり繰りしています。アスラマでは、広告でアスラマのパンフレットに子どもの写真を載せて宣伝したり、世界に発信するような行動を起こすことで寄付が集まる形を作り上げています。このように、パンフレットに子どもの写真を載せること、寄付を大々的に広告することなどは、日本ではあまり考えられないことです。文化的・宗教的に異なる考え方を持っている国の方針のあり方に驚きました。

さらに私が驚いたことは、このようにして集まったお金をアスラマでは、子どもの「教育費」のために一番使っているということでした。先述したように、アスラマの入所理由の多くは「貧困」です。子

ども達が十分な教育を受けられることが「貧困の連鎖」を断ち切ることにつながるのだと、アスラマのスタッフの方がおっしゃっていました。

「貧困の連鎖」が起こるのは親の貧困のために子どもが教育を受けられない、そしてその子どもも貧困に陥るといふ悪循環があります。この「貧困の連鎖」とはどこの国にも存在する普遍的な現象です。

アスラマでは、寄付の中から子どもたちの大学進学ための奨学金の基金を作り、子ども達が将来に夢を持って生きていけるような仕組みを作っていました。日本の施設では、大学進学のために施設側ができることは本当に限られていて、特に大学進学資金の問題は子どもたちの将来を描く上で大きな障壁となります。

アスラマで行われている子どもへの教育機会の提供の形が日本の施設にも何らかの影響を与え、今以上に日本の施設の子ども達が将来に夢を持って施設を退所していくことを願います。私が日本の施設の現場で働くときに、今回の経験を糧にしていこうと思います。

以上のように、私がインドネシアで学んだこと、知ったことを書きましたが、今IWCに行こうかどうかを迷っている方に一言言わせてください。IWCの良さは行ってみなけりゃ分からないということです。私以外にも色々な方が報告書を書いています。ぜひ、一度読んでみてください。

最後になりましたが、今回のIWC27には引率教職員でもなく、面接やテストを突破して参加した学生でもない大学院生というポジションで参加させていただくことになりました。このような形で参加したことにより、扱いを困らせてしまったであろう引率教職員の方々やキリスト教センターの職員の方々、参加学生の皆さんにお詫び申し上げますとともに、参加させていただけたことを心から感謝申し上げます。

## MEMBER OF IWC☆27

A班	坂口 恵理（えり）/A班リーダー 野上 玖留未（くるみ） 藤村 知憲（とーそん） 青山 丹（あきら） Bagus Prakasa（バグース） Ni Nyoman Rai Puspayanti（ライ）	低燃費。常に省エネ運転です。 たまに毒はくIWCのアイドルくるみ 子供たちから大人気イケメンとーそん しっかり者の頼れる末っ子キャラオあっきー いつも陽気だけど優男。バイクだけにブンブン。 アニメ大好きお姉さんキャラ
B班	丸野 朝陽（じゃす）/B班リーダー 折目 理奈（りな） 深田 侑杜（ゆうと） 石井 彩葉（なっぺ） 明智 未邑（みゆ） Putu Rian Aristianto（リアン）	ド天然。IWC後半になってキャラ大爆発。みんなの人気者 子ども大好き!!セクシーボイスのお姉さん 意外に頭いい、意外に頼れる、意外にヲタク（笑） 二重パッチリ☆頼れるしっかり者ちゃん 実は1回生、貫録ありありKISIWADAっ子（一年目） 笑顔全快! funny boy☆
C班	片桐 由佳梨（ばせり） 岸田 美香（みか） 中井 剛志（つよし） 中本 后紀（みき） 吉田 和貴（かずきB） Ida Ayu Supraptini（アユ）	自称影が薄いのでばせり…気配り上手なお姉さん ちょっと抜けてる我等の隊長!夢は世界平和! 俺の笑顔で皆をHAPPYに!曲がったことは大嫌い 涙もろく心優しいC班の良心!たまにブラック（笑） 常にモテモテ（インドネシアonly）ガントタンボーイ バリダンスが魅力的! Cantik Girl
D班	上辻 一毅（かずきA） 日野 瑞季（みずき） 勝 美咲（みさき） 堀田 涼介（ポッター） I Nyoman Weda Sanjaya（ウエダ）	天然。ふさ辻。 1日1マガナムゴールド。 あなたの笑顔は100万ルピア。 1日4マンティは当たり前。 ちょっとルーズだけど優しいWeda apa apa
引率教員&スタッフ	松平 功（チャブレン） 三宅 亨（三宅先生） 福田 公教（福田先生） 黒田 隆之（黒田先生） 浅井 玲（浅井さん） 前田 陽介（陽介さん） 石井 美和（美和さん） Nengah Swikrama（スイクラマさん） Forman Supradinata（フォルマンさん）	愛と赦しの力に溢れた我等の団長! 誰よりもインドネシアの事を考えてる優しい先生 みんなのパパ。常に冷静で周りが見える適切なアドバイザー 好き嫌い王子（笑）影で支える裏番長 ちょっぴりドジっ子、でもでも頼れるお姉さん 皆の良き兄貴!広い視野に、響く言葉が素敵です お世話になった我等がナース☆ 笑顔がキラリ☆好きな言葉は「やるしかない」 お茶目で可愛いクールなお兄さん!

## テーマ

今年で27回目となったIWC (International Work Camp)。IWCは、「アジアの人々の協働から学ぶ」というテーマで行われており、今年も揃いのTシャツを作り、IWC27全てのメンバーがこれを着てボランティア活動をした。IWC27のテーマは、「Semoga semua orang mempersatukan hati」日本語で、「心をひとつに」という意味である。私達IWC27はこのテーマを合言葉に、日本・インドネシア両国の学生、引率教職員がひとつとなって活動に励んだ。



IWC27のテーマ「Semoga semua orang mempersatukan hati」を掲げたTシャツ

## 調理実習

6月1日(土)

場所：キリスト教センター集会室

開始時間：10時

<材料>

カレー粉

豚肉 1300g

じゃがいも 10個

玉ねぎ 10個

にんじん 4本

\*お米は1合ずつ持参

<反省>

- 初めての作業で要領よく作業できなかった。
- 炒める順序をじゃがいもではなく、玉ねぎから炒めるべきだった。
- 切るサイズは事前に説明していたので、丁度よかった。



## 募金活動

- 活動目的 女子トイレの修繕費として寄付するため
- 活動期間 7月1日～7月24日（延べ11日間）
- 活動場所 桃山学院大学チャペル前
- 活動時間 昼休み 12：30～13：20
- 活動人数 19人

私達は、7月の初めからテスト期間までの月水金、募金活動を行った。おそらくほとんどの生徒が初めての募金活動だった。授業などの関係で毎回全員そろってではできなかったが、毎回来たメンバーで一生懸命行った。

募金してくれたのは一人一回ではない。何回かしてくれた人もいれば、毎回してくれた人もいる。その結果、目標金額は7万円だったが、その約、ほぼ倍である133,000円も集めることができた。おそらく過去最高金額であろう。

みなさんが募金してくださったおかげで、募金してくださった方の分も頑張ろうと思うことができ、たくさんの暖かい気持ちを感じることができました。  
たくさんのご協力、本当にありがとうございました。

日付	金額
7/1	16,375円
7/3	6,915円
7/5	15,042円
7/8	11,291円
7/10	5,280円
7/12	7,139円
7/15	雨天中止
7/17	4,052円
7/19	7,210円
7/22	5,070円
7/24	54,626円
合計金額	133,000円



## 合宿

- 日時 8月6日～7日
- 場所 桃山学院大学 合宿棟

### (一日目)

- 12:00 キリスト教センター集合  
二日間の流れを説明
- 13:00 A、B、C、D班に分かれて、日本語の授業の準備、練習
- 15:00 交流会の歌、ダンスの練習
- 17:30 カレー作り
- 20:00 合宿棟へ移動  
お風呂
- 21:30 交流班、日本食班、労働班、日本語班、記録班、衛生班に分かれてそれぞれ作業
- 24:00 就寝



### (二日目)

- 8:00 ミーティング
- 8:30 キリスト教センターへ移動、交流会の練習
- 12:00 各自昼ご飯
- 13:00 日本語の授業の準備、交流会の練習
- 16:30 解散



### •反省点

日本語の授業の流れを全員が把握しておらず、もう一度流れを話し合った。  
あいうえお表などの準備に追われ、実際に一通り授業をする、という時間があまりなかった。

### •良かったところ

事前に材料を買っておき、一度行った調理実習で流れをつかんでいたのも、カレー作りはスムーズに作ることができた。

歌の練習は最初よりも声を出して明るく歌うことができた。

## 2013年度 第27回国際ワークキャンプ・インドネシア日程表

月日	曜日	時 間	日 程	備 考
8/18	日	8時30分 8時30分 9時 11時 16時45分 17時05分 18時 19時 22時	関空 4F中央コンコースに集合（服装ユニホーム） 点呼 搭乗手続き（関西国際空港） GA883便にて出国 （所要時間6：45 時差－1時間） デンバサル空港到着 入国手続き ホテルチェックイン・部屋割り 夕食、インドネシア学生と合同オリエンテーション 就寝	荷物を持って集合 パスポート、旅行保険証等を忘れないように  入国手続き後バスで移動 グループ分け  プリサロンホテル スミニヤック
8/19	月	7時 7時15分 8時 10時 12時30分 13時30分 17時 18時 19時30分	朝の集い 朝食 日本・インドネシア学生プリンピンサリ出発 引率スタッフは日本領事館、バリ日本人会訪問等 プリンピンサリ到着、昼食 ミーティング ホームステイ先へ 夕食 帰宅 就寝	ホテルチェックアウト  表敬（団長、その他引率者）、買物、両替等 アスラマ内見学ツアー、スタッフ紹介 アスラマの子どもが各自案内 この日のミーティングはありません ホームステイ先家族と交流 お土産を渡したり…  プリンピンサリ
8/20	火	7時 7時15分 8時 9時 12時30分 13時30分 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 入村式準備 入村式（ワークの服装で） 昼食 ミーティング 夕食 ミーティング 帰宅 就寝	入村式のお手伝いをしましょう  ワーク開会式でもあります  プリンピンサリ
8/21	水	7時 7時15分 8時 12時 15時 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 ムラヤ公立高校訪問（服装ユニホーム） 昼食・休憩 ワーク 夕食 ミーティング 帰宅、就寝	日本語プロジェクト2年・3年の計4クラス  スタッフは、パニョボ村社会牧師訪問、下見  プリンピンサリ

8/22	木	7時 7時15分 8時 12時 15時 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 ワーク 昼食・休憩 子どもたちの出身村訪問（ユニホーム） 夕食 ミーティング 帰宅、就寝	要マスク        プリンビンサリ
8/23	金	7時 7時15分 8時 12時 13時 18時 19時 21時30分	朝の集い 朝食 看護学校訪問 昼食・休憩 ミーティング 夕食 交流会 学生と子どもたち 帰宅、就寝	交流会準備       プリンビンサリ
8/24	土	7時 7時15分 8時 12時 15時 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 ワーク（日本食班 日本食ショッピング） 昼食・休憩 フリータイム（子どもたちと遊ぼう） 夕食 ミーティング 帰宅・就寝	       プリンビンサリ
8/25	日	7時 7時15分 9時 12時 13時 17時 19時 20時	朝の集い 朝食 プリンビンサリ教会訪問（服装ユニフォーム） 昼食・昼休み 日本食の準備 日本食パーティー  ミーティング 帰宅、就寝	献金あり（500円ぐらい）        <u>ホームステイ先家族とアスラマの子どもたちを招いて</u>  プリンビンサリ
8/26	月	7時 7時15分 8時 12時 14時 19時 20時	朝の集い 朝食 ワーク 昼食 ワーク 小・中学校訪問のためにミーティング 帰宅 就寝	       プリンビンサリ

8/27	火	7時 7時15分 8時 12時 14時 18時 19時 21時30分	朝の集い 朝食 小・中学校訪問・交流 昼食・昼休み ワーク 夕食 フリータイム 帰宅・就寝	2グループに分かれて 2班にわかれて訪問 授業参観の後、 日本語授業やゲーム スポーツ、歌の 指導等をして過ごす。ムラヤ中学校へは トラックで移動。  プリンビンサリ
8/28	水	7時 7時15分 8時 12時 15時 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 ワーク 昼食・昼休み ワーク 夕食 エヴァリュエーション・ミーティング 帰宅 就寝	       プリンビンサリ
8/29	木	7時 7時15分 8時 12時 14時 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 ワーク 昼食・昼休み ワーク 夕食 エヴァリュエーション・ミーティング 帰宅、就寝	ワーク終了予定      プリンビンサリ
8/30	金	7時 7時15分 8時30分 12時 15時 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 エヴァリュエーション・ミーティング 昼食・昼休み エヴァリュエーション・ミーティング 夕食 エヴァリュエーション・ミーティング 帰宅、就寝	       プリンビンサリ
8/31	土	7時 7時15分 9時 12時 15時00分 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 フリータイム 昼食、昼休み フリータイム 離村式（服装ユニフォーム） 会食（バビゲリン） 就寝	荷造り 子ども達と村内散歩など ホームステイ先に滞在可 インドネシア語で謝辞 ミーティングはありません  プリンビンサリ



## 入村式

8月20日（3日目）

バリに来て3日目、プリンビンサリ村に来て二日目の朝である。8時30分から入村式の手伝いを始め、9時から入村式が始まった。入村式の始まりは、同時に私たちのワークの始まりを告げるものでもあった。女子マンディ場の隣、まだ建物も何もない土地で入村式は行われた。インドネシアの日の光が降り注ぐ中、私たちのワークの無事、成功を願いホームステイ先の方々やIWC27に関わる皆でお祈りを捧げた。最後にチャブレン、リーダーが祈りを込めた石を置き、私たちのワークが始まった。



入村式の様子

## ブリンビンサリ村

### 【村について】

私達が約2週間お世話になった村がブリンビンサリ村である。児童養護施設の第2アスラマや、お世話になったホームステイ先もこの村にある。この村はバリ・プロテスタントキリスト教会によって運営されている。街の中心に十字路があり、そのすぐ横に教会がある。村の人達は毎週日曜日に教会へ礼拝をするために集まる。私達もこの礼拝に参加し、「Stand by me」を歌った。緊張したが、今までで一番の出来だったと思う。何よりみんな笑顔で歌えた。

この村はとても治安が良く、村の街灯も昔に比べると増えたようだ。それでも放し飼いにされている犬が多いので、アスラマからホームステイ先へ帰るときよく吠えられて怖かった。村の人達はとても温かく、知っているひともしらない人も関係なく挨拶してくれた。私達も自然と挨拶するようになった。人の温かさにたくさん触れた2週間だった。

### 【ヤシの実の砂糖工場】

ブリンビンサリ村にヤシの実で砂糖を作っている工場があるということで見学に行かせてもらった。アスラマの近くにあり、15分くらいで着くと聞いていたが実際は30分以上歩き、ジャングルの奥のようなところに工場があった。作っている方のお話によると、5時間煮詰めて作るとのことだった。ここでは70円で販売しているが、都会では3倍の210円で販売されている高級砂糖だ。日本の高級なお菓子にも使われているらしい。

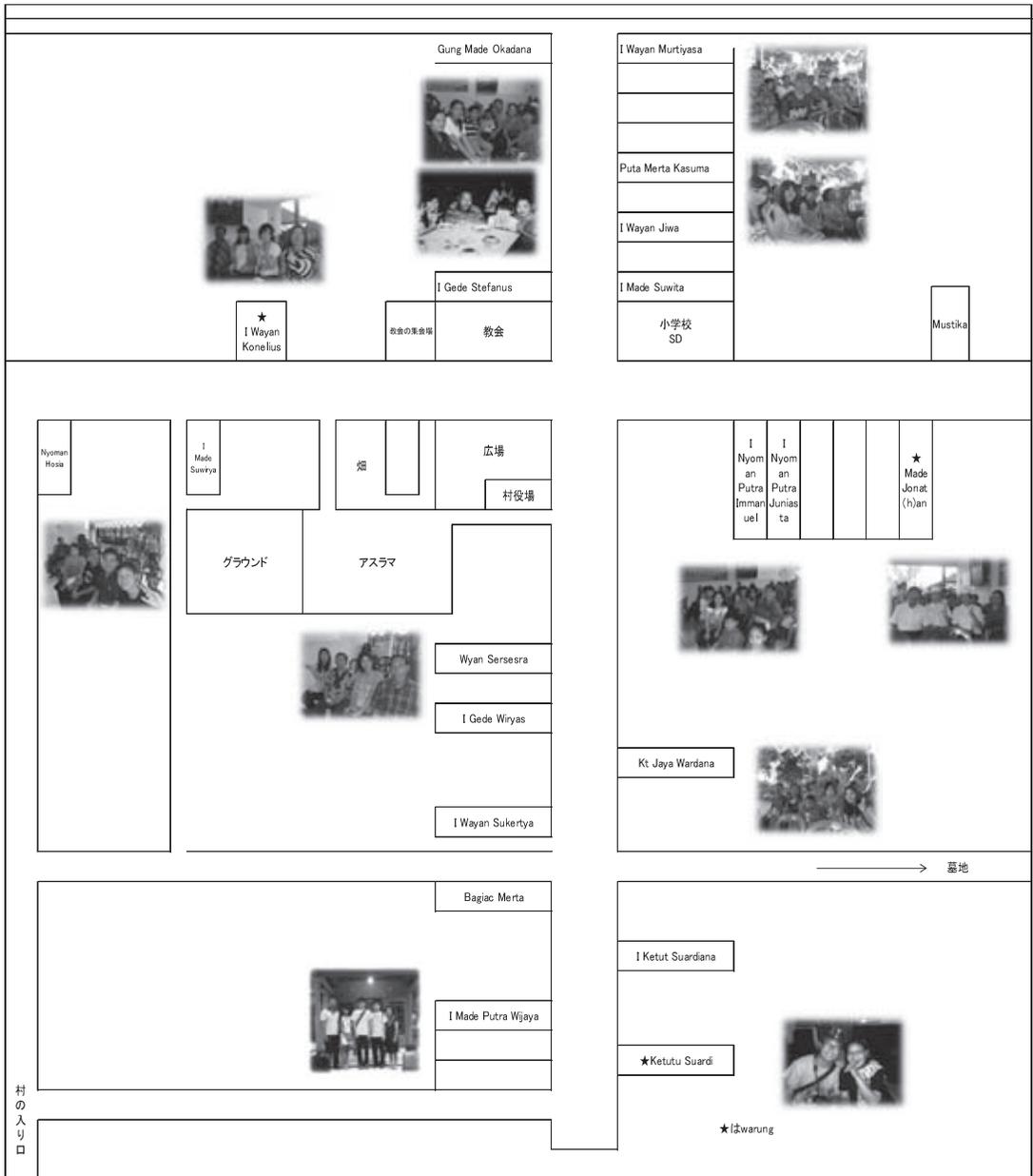
### 【三宅先生ツアー】

8月24日（土）、3時から三宅先生による「三宅オプショナルツアー in ブリンビンサリ」が開催されました。ひたすらブリンビンサリ村を歩いての観光。昔使われていたダムやお墓にも行った。キリスト教の関係で土葬らしく、少し不気味だった。お墓の名前のところには、亡くなった時の年齢も書かれていた。私達より若くして亡くなった人もいた。それから森の中をひたすらあるき、村で一番大きなお店で少し休憩をとった。水分補給をし、ラストは村の入口まで行き、ツアー終了!!!

三宅先生。暑い中ツアーを開催していただきありがとうございます。



# ブリンビンサリ村の地図



## アスラマ

### アスラマとは

アスラマ (Asrama) とは日本語で「学寮」を意味する。子ども達が貧困や虐待等が原因でやむをえず親元から離れてこの児童養護施設に共に暮らしている。

ウィディア・アシ財団がバリにある7ヶ所のアスラマを運営している。プリンビンサリ村の第2アスラマは1975年に設立され1987年から始まったIWCの活動の拠点となり続けている。主に我々IWC27が活動したのは第2アスラマである。

この第2アスラマでは、女性スタッフ (イブと呼ばれる) と男性スタッフ数名で施設内の子どもを世話をしている。子どもは約80人におり (4歳~18歳) 子どもの30%は両親がおらず、25%はシングルマザーもしくはシングルファザーであり、残り45%は経済困難による子ども達である。子どもの出身地は80%がバリ島、20%はその他の島からである。

### アスラマ内の動物や工夫

アスラマ内には牛や豚、鶏、ナマズ、ヤギ、子猿、アヒルなど色々な動物がいる。牛、豚、ナマズ、ヤギ、アヒルは外部に売られるために飼育されており、鶏には卵を産ませていた。子猿については親猿はおらず売られることはなく、観賞用に飼育されていた。その中で、牛や豚の糞尿をアスラマ内の発酵槽を利用してメタンガスを発生させアスラマ内のガスとして利用している。そして、糞尿を畑の肥料としても使われている。ナマズの飼育は食用でもあり、汚れた水を綺麗にする力があるので水のろ過としても使われている。

### アスラマ設備

第2アスラマには多くの施設や設備があり、もっとも注目すべきはアスラマの浄化装置である。この浄化装置で飲めない水を9回浄化して飲める水に作り出し子ども達に提供している。水質調査によると市販の水より綺麗でおいしいそうだ。その水の販売もしている。

そして今回IWC27はアスラマ内にある田んぼに空苾菜 (カンクン) を植えた。一つ一つ丁寧に植えたので将来大きく育ち子ども達の食べ物になると思うと心が熱くなる。



ワヤンさん家族の家



男子寮

アスラマ内にはバスケットボールコート、遊具などなどたくさんの物が置いてあり比較的充実してある。その中で、ゴミの焼却炉があり未だアスラマには日本のようなゴミを捨ててくれるゴミ収集車はなく、ゴミをアスラマの各決められた場所で燃やして焼却している。しかし、その管理が子供でダイオキシンなどの心配があり、エヴァアリエーションで改善する点の一つとして提案した。

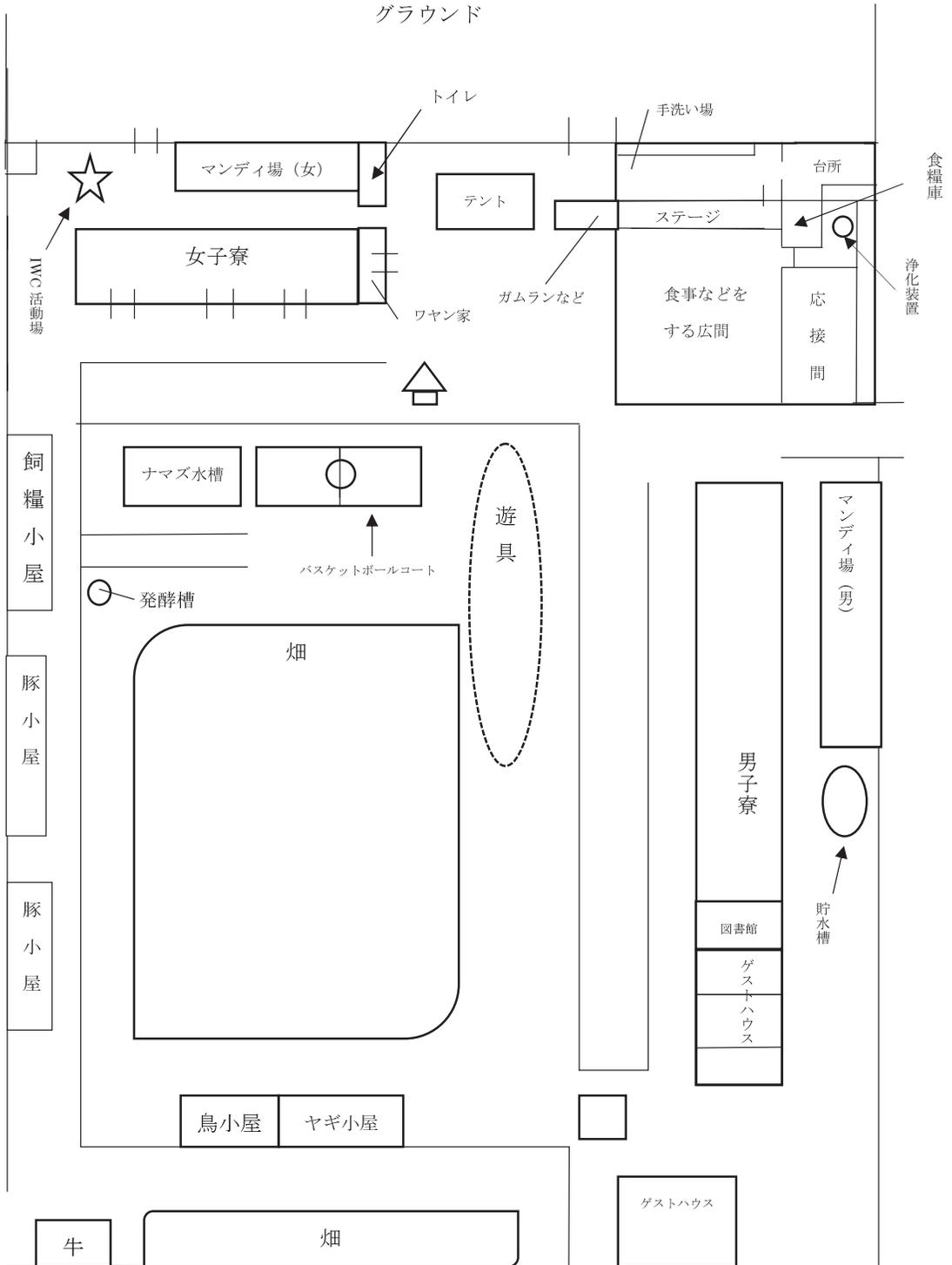


ご飯を食べたり勉強をしていた場所



遊び場

# アスラマの地図



## アスラマの子ども達

アスラマの子ども達は、いつも元気で、笑顔がとても素敵だった。子ども達は、様々な理由があって、親のもとを離れて暮らしている。子ども達は、寂しくて悲しい気持ちを持っているであろう。しかし、子ども達は、私達にそんなことを感じさせないくらい、いつも笑顔で、子ども達のたくましさや強さを感じた。また、食事の用意や掃除など、自分のことは自分で何でもしていた。大きい子ども達が、小さい子ども達の面倒をみる時もあり、とても思いやりのある子ども達ばかりだった。遊ぶ時も、勉強をする時も、何事にもまっすぐだった。また、交流会などの前になると、子ども達は、私達の見えないところで、楽器などの練習を一生懸命してくれていた。

子ども達は本当に純粋で、何事にも真剣に取り組む子ども達ばかりだった。

### ～アスラマの子ども達の1日～

- 4：30 起床
- 5：00 朝の祈り
- 5：30 朝食、掃除
- 6：30 登校
- 7：00 授業開始
- 12：00 下校
- 12：30 昼食
- 13：00 昼寝
- 15：00 起床、自由時間
- 17：00 マンディ
- 18：00 夕食
- 19：00 勉強、宿題
- 21：00 就寝



## 日本語プロジェクト

### <事前準備>

インドネシアの小学校・中学校・高校を訪問して日本語の授業を行うことになっていたのですが、日本語班はインドネシアを訪れる前に事前準備として授業内容を作成した。授業を飽きないようにするためにも、楽しくてゲーム感覚なものを取り入れた。そして、授業構成を考えて、授業に必要な教材作りをした。名札の紙、あいうえお表、ビンゴ、カルタ作り、カルタを作る時に折れたり曲がったりしないように、また、紙の端で怪我をしないようにラミネートをする工夫を施した。また、教材を作る時には他班の人にも手伝ってもらった。小学校・中学校・高校の生徒は日本語の理解度がそこまで高くないため、インドネシア語で授業を行うために、日本語で作った台本を英訳し、さらにインドネシア語に訳した。英語からインドネシア語への翻訳は、現地で合流したインドネシアの学生にしてもらった。



## 小学校訪問

8月27日（10日目）

### <小学校>

小学校はアスラマのすぐ近くにあり、歩いていける距離である。生徒の9割がアスラマの子ども達で、1クラス20人くらいだった。

私達は、5年生、6年生のクラスでそれぞれ日本語授業を行った。



### <反省と感想>

思春期のためか、高校生や看護学生と比べて、落ち着いている生徒が多かった。しかし、高校、看護学校と同じように、自己紹介やあいうえお表の発声練習は元気よく言ってくれたし、カルタもとても盛り上がった。名札を書いてもらった時、あいうえおの書き方を間違っていたり、ビンゴゲームをした時、紙に書かれている語と同じ語がもう出ているのに丸がついてない子が何人かいたので、まずはあいうえおの書き方から教えるべきだと思った。

休憩時間は教室の外へ出てカードゲームをしたり、他のクラスの子と話したりしていて、日本の小学生と同じように見えた。

授業を終えてアスラマに帰っても、授業をしたクラスの子が私達の名前をしっかりと覚えてくれていて嬉しかった。私達の授業を機に、日本語に興味を持ってくれたら嬉しく思う。



## 中学校訪問

8月27日（10日目）

### <ムラヤ中学校>

私達はアスラマから車で20～30分ほどのところにあるムラヤ中学校を訪問した。

ムラヤ中学校は先生11人、生徒101人の中学校だ。

図書室で校長代理・教職員の先生方と対面し、学校・学生についての話をさせていただき、そのあと質問タイムを設けていただいた。ムラヤ中学校の先生・生徒達は、毎年の訪問を喜んでくれていて、生徒達は英語より日本語を勉強しているようだ。日本語の授業は全学年共に週に1回、80分で行われている。課外活動ではボーイ・ガールスカウトのようなもの、農業体験、スポーツクラブなどを行っている。

### <感想>

生徒達は、週に1回の日本語の授業を受けていることもあり、私達の予想を超えた出来で、あいうえお表の発音、名札作り、自己紹介は早く終わった。今回はゲームの時間をのばして時間を調整した。私達が用意した授業はどれも生徒達に楽しんでもらえたようで、特にフルーツバスケット、カルタゲーム、告白ゲームはとても盛り上がった。IWC27の日本語授業で定番になった「O、K ～!!」というフレーズも生徒達に大変人気だった。今回も高校訪問や看護学校での反省・改善点を生かして、最後の学校訪問の中学校でも、とても達成感のある日本語授業を行うことができた。



## 高校訪問

8月21日（4日目）

私達が訪問したムラヤ高校は、1クラス30人くらいで4つの班にわかれて授業を行った。高校生はとも日本語が上手く「あいうえお」はすらすら読めて自己紹介と自分の好きなことをいうことができた。授業自体はフルーツバスケットが盛り上がった。

### <授業内容>

あいうえお表	みんなで発音練習をした。
自己紹介	自分の名前と好きなことを1人ずつ発表した。
名札作り	自分の名前をひらがなとローマ字で書いた。
フルーツバスケット	イスを並べて、子どもと一緒にこなった。
カルタ	私たちが言った日本語を聞いて、子どもが探した。
告白ゲーム	好きな人に日本語で伝えた。

### <反省点>

- ◆あいうえお表を貼るテープが必要だったこと。
- ◆カルタゲームの参加している人としていない人の差があったこと
- ◆終了時間が正確にわかっていなかったこと。
- ◆授業終わってからの写真撮影で時間通り終わることができなくて高校生の次の授業へ悪影響を与えたこと。



## 看護学校訪問

8月26日（6日目）

### <看護学校>

私達が訪れた看護学校は建築されてまだ一年ほどしか経っていない新しい学校だった。看護学校はアスラマからバスで移動し、30分程度かかる場所にあった。校舎は新しくできたこともあり、ほかの学校よりもすごくきれいだった。しかし校舎以外は売店ぐらいしかなかったため少しさみしい感じがした。生徒は1クラス30人ほどで男子生徒がその中の5人ぐらいでクラスの大半が女子生徒だった。

### <反省点と感想>

まず看護学校で授業すると聞かされたのは現地に行ってからだった。現地に行く前から予定は変わるものだと言われていたが、こんなにも予定が変わるとは正直思ってなくて驚いた。しかし足りない用紙などの対応は落ち着いて、臨機応変に動くことができたと思う。授業自体も4日目の高校でやった授業を参考にし、すごく良い授業ができたと思う。特に高校で時間が足りずできなかった授業をすることができ、盛り上がったので達成感がすごくあった。

授業をする前、私達は授業をする相手が看護学生だったので賢くて、楽しい授業ができるかすごく不安だった。授業の初めは日本語授業をするのは2回目だったけれども、すごく緊張した。しかし授業中に看護学生がよく話しかけてくれたりし、私達も楽しく良い授業にしようという気持ちで頑張り、良い授業をすることができた。



## IWC27 ワーク内容

今年のワークは、入村式から始まり、最初のワークは男女共に女子のマンディー場の基礎工事から始まった。インドネシアでは小さな穴を掘る時に、重機などを使う習慣がなく、一つ一つが手作業であった。穴を掘るとい作業は班ごとに交替で行ったが、土が固かったり、大きな岩があったり、なかなかの重労働であったが、女子も男子も関係なくみんなで、スコップを持ち無我夢中で穴を掘っていった。

この作業が主にメインである女子と男子に分かれてワークを行った。男子は砂運びと、穴掘りを主にし、女子は草抜きと田植えなども行った。草抜きをしている最中にヘビがでたり、巨大なアリがでたり、すこし過酷な場面もあったが、何より、抜いた草を荷台にのせて遠くまで運ぶ作業が一番体力を奪われた。どのワークも必ず交替を行うことで、休憩を十分とり、体調管理をしっかり行った。そのおかげで、体調不良を訴えるものはほとんど出なかった。

また、田植えも行った。ほとんどのメンバーは田植えが初めてで、カエルや虫がたくさんいたので、最初は素足で田んぼに入ることに抵抗があったが、自分達が植えたものが、育ち、いつか子ども達の食料になるので皆で力を合わせて頑張った。大変なこともたくさんあり、赤道直下の日差しのなか、体力も奪われた。しかしみんなが全てはアスラマの子ども達のためであると考え、それをもとにワークをすると一生懸命頑張ることができた。私達が行ってきたワークが、将来子ども達の未来に良い影響を与えていることを願う。



男子のワークの様子



女子のワークの様子



## 交流会

### <子ども達>

私達は、アスラマの子ども達と親睦を深めるために交流会を行った。

子ども達は、バリの歌とダンスを披露してくれた。男の子達が楽器を演奏してくれていて、それに合わせて女の子達は、バリダンスを披露してくれた。バリの伝統的な衣装に身を包み、さらに、化粧をしていて、いつもとは雰囲気が違い、大人っぽくて素敵だった。バリダンスの途中で、踊っている子ども達が私達を誘ってくれて、子どもとペアになって踊ることができた。学生もみんなそれぞれに楽しめていた。

### <事前練習>

交流会の練習は正直に言うと最初は良くなかった。皆の集まりも良くなく、交流会はちゃんと成り立つのだろうかという不安が強かった。交流会に向けて練習することは山ほどあり、特に苦戦した事は歌の練習ではないだろうか。何曲か歌ったのだが、歌詞を見ないで英語やインドネシア語の曲を歌う事、声をしっかりと出すこと、音程を合わせること、テンポを合わせる事など、歌を歌う上では基本となる事ではあるが、大人数になるとやはり難しくなった。しかし、次第にみんなの息が合ってくると、綺麗に歌えるようになり、キーの問題で声が通りにくくなる所は一人ひとりが他の人のカバーをするように歌えるようになった。

現地での直前の練習では、インドネシア学生に歌の歌詞を伝え覚えてもらう事からはじまった。インドネシア学生達は、日本語の歌詞も頑張って覚えてくれ、一緒に歌うことができた。諸事情により交流会では見ることはなかったが、女子インドネシア学生の2人が踊ってくれたバリダンスがとても素敵であった。

問題も幾つかあったが、練習を通じて皆が仲良くなるきっかけになり、最終的には結束し、交流会に挑めたように思う。



## タイムスケジュール

1. 交流会のあいさつ（5分）
2. Hari ini（5分） 歌
3. アンパンマンたいそう（5分） 歌とダンス
4. 子ども達によるバリ舞踊（10分）
5. 未来へ（5分） 歌
6. 子ども達によるバリ舞踊（10分）
7. ドラゴンボール（5分） 劇
8. アスラマの人々による歌（5分）
9. ヘビーローテーション（5分） ダンス
10. 子ども達によるバリ舞踊（10分）
11. つけまつける（10分） ダンス
12. YOSAKOI（10分） ダンス
13. インドネシアの学生によるバリゲーム（10分）
14. 閉会のあいさつ（5分）
15. SAYONARA（5分） 歌



## <反省>

交流会で使用したCD再生機の使用の交渉や交流会での予定を事前に話合うことができたので、スムーズに交流会を進めることができたと思う。

そして、事前に絶対に交流会であるものと、時間があればするもの・しないものを決めていたので、これもスムーズに進めることのできた一つの要因ではないだろうか。

しかし、子ども達の催し物がいくつあるのか、何分くらいあるのか等細かい話をする事ができなく、いつ自分たちの出番がくるのかタイミングがつかめない部分があったので、しっかりと事前に確認する必要があると思った。

また、本番は時間が限られているが、誰もプログラムの一つひとつの時間を計っていなかったため、臨時で交流班班長が行うことになったが、これも事前に誰が時間を計るかを決めておけば、焦ることもなかったと思う。

私達は交流会で歌とダンスと劇とゲームをした。特に盛り上がったのはやはり参加形式の『つけまつける』と『YOSAKOI』だ。

『つけまつける』は会場の全スペースを使って踊る予定だったが、割り当てられた時間内には片付けられそうに無いほどのたくさんの椅子があったので、椅子を隅に寄せることで出来たスペースを使って子ども達と踊ることになった。

『YOSAKOI』は日本の学生だけで一度踊り、その後にインドネシアの学生、アスラマの子ども達と一緒に踊った。二度目は鳴子を子ども達にプレゼントした。子ども達はみんなとても楽しそうにしていた。

男子の『ドラゴンボール』は、日本語のセリフを述べた後に、インドネシアの学生がインドネシア語へ翻訳し話してくれた。恥じらいがなく、みんないきいきとしていた。お笑い要素満点で、子ども達は大笑いだった。

女子の『ヘビーローテーション』は、男の子も女の子も関係なく、手拍子をしてくれたり、一緒に踊ってくれた。踊った後には拍手喝采で私達もとても楽しかった。

ゲームについては、日本からゲームを紹介する予定だったのだが、時間の関係により省くことになった。インドネシアの学生が考案してくれたゲームはバリの子どものなら誰もが知る有名なゲームでその名前を言えば説明は一切いらなかった。その為、長い時間ゲームを楽しむことができた。

アスラマの子どものバリ舞踊や楽器の演奏は素晴らしいものだった。小さな子ども達が一生懸命に取り組む姿や、真剣に楽器を演奏する姿、いつも戯れているだけでは見られない一面が垣間見えた。



## 日本食

8月25日（7日目）

村で生活していくなかで、施設のスタッフやイブ、ホームステイ先の家族や子ども達に何か振る舞いたい、感謝の気持ちを表したいということでカレーライスを作った。

このパーティーの前日に、日本食班3名、教員1名、スィクラマさんの5人で、車で30分ほどのスーパーへ買い出しに行った。豚肉が売ってなかったので、イブたちに当日とりに行ってもらった。

（スーパーで買ったもの）

- にんじん 30本
- 玉ねぎ 50個
- 豚肉 20キロ
- ジャがいも 50個

（現地で購入した物）

- 包丁 10
- ピーラー 8
- まな板 8
- 木べら 2

※カレールー（辛口）は40皿分×7箱を日本から持っていった

<反省点>

パーティーの流れを全員が把握しておらず子ども達やイブ達を待たせてしまったり、スタッフ達を困惑させてしまった。

<良かった点>

事前研修で二回カレーを作ったので段取りよく作業ができた。

材料を切り始めてから1時間ほどで煮込むところまで完成した。



材料を切っている様子



カレーライスをよそっている様子

## 衛生指導

ゴミのポイ捨てについて、ゴミをゴミ箱に捨てなければどうなるのかということをテーマとし、紙芝居をした。あらかじめ日本で物語とイラストを描いて、インドネシアの学生に絵を見てもらいながら翻訳をお願いした。初めは、翻訳されたインドネシア語を日本の学生だけで読む予定だった。しかし物語を理解してもらうことを最優先し、インドネシアの学生全6人と日本の学生からあきらとみさきの計8人で配役を決めた。



本番の様子。二日に分けて上映した。

インドネシアの学生みんなの演技力は笑いを誘うほど最高だった。

ナレーターのAyuは紙芝居が終わった後、『ゴミをポイ捨てするとどうなりますか?』、『これからはゴミはゴミ箱に捨てる人?』などとアドリブで煽ってくれた。

紙芝居の後は、子ども達がゴミを見つけてゴミ箱に捨てるという行動を自慢気に見せてくれるようになった。紙芝居の効果だと思う。

## バニユポ村

バニユポ村はバリ島での生活で最も衝撃を受けた場所であった。アスラマで生活をしている子ども達の中にはバニユポ村出身の子どもがいる。アスラマで生活している子ども達がアスラマに来る理由は様々だが、バニユポ村出身の子ども達はバニユポ村での生活が厳しく、両親が金銭面で育てることができないためアスラマにやって来たのだ。

バニユポ村には川がない。正確には干上がってしまっている。水道施設も良く完備されていないため、深刻な水不足である。週に2回2時間、他の村から水の供給があるのだが、各家庭ドラム缶2杯分程度の量であるそうだ。バニユポ村の各家庭ではブドウを栽培しており、鳥や牛、黒豚などの家畜も飼っている。その家畜やブドウに水をやり、飲み水、料理などに水をつかっている。水が足りなくなるので、マンディ（お風呂）の時は雨水を溜めて使っている。その雨水も、緑色に変色していて、とても健康に良いとは思えなかった。

そんな水が足りない中なぜ家畜やブドウを育てるのだろうか。答えはもちろん売るためだ。厳しい生活の中少しでも生活を良くする為に、荒地地でも育つブドウを育て、高く売れる黒豚を育てる。それらを育てる事で生活がよくなるが、より切り詰めて生活をしなければいけないになってしまう。この循環を変えることができれば、きっとアスラマで生活をしているバニユポ村の子ども達も、親元で暮らせるようになる。

日本で暮らす今でも、バニユポ村のことを忘れていない。



## 第5アスラマ

第5アスラマは、ムラヤの中学校の近くにある。プリンビンサリの小学校を卒業した多くの小学生は卒業後、第5アスラマに来る。子ども達は中学生や高校生や数名の大学生がいる。全ての中学生は第5アスラマの近くにあるムラヤの中学校に行く。高校生はデンバサルやヌガラ的高校へ行く。

子ども達は学校以外に演奏や農家などを行っている。服飾室やコンピューター、図書室などがあり子どもが使えるように設備されていた。また、第5アスラマはとてもきれいで衛生面もしっかりしていた。



## 離村式

8月31日（14日目）

私達がプリンビンサリ村を出る前日の夕方、アスラマで離村式が行われた。私達はそれぞれのホストファミリーが用意してくれた衣装などを着用し、ホストファミリーと一緒に座った。家族ごとに前にでて、手紙をホストファミリーに渡し、感謝の言葉を伝えた。最後の夜なんだと痛感させられた。

最後の夕食には、様々な料理や豚の丸焼きを用意してくれた。豚の丸焼きはバビグリンといい、バリの伝統的な料理である。何日か前にアスラマで飼われていた豚がトラックに乗せられていたのを見た生徒もいて食べることに感謝することを再確認できたと思う。夕食はホストファミリーと食べた。これがホストファミリーとの最後の食事となった。

その後、この日のために、練習してくれていたバリダンスや楽器の演奏を子ども達が披露してくれた。一緒にダンスを踊ったりし、私達も楽しむ事ができた。

ホストファミリー、子ども達、イブ達、そしてプリンビンサリ村との別れが本当に辛かった。また、私達のために様々な用意をしてくれたプリンビンサリ村の人には心から感謝している。あっという間に離村式は幕を閉じ、ホームステイ先でプリンビンサリでの最後の夜を過ごした。



## ウンタル・ウンタル

9月1日（15日目）

### <第4アスラマ>

この施設は1981年に創立され、バリ・プロテスタント・キリスト教会のウィディア・アシ財団が運営しているウンタル・ウンタルにある第4アスラマである。この第4アスラマの子どもは全員女の子で男の子はいない。ここには中、高、大、専門学校の生徒が暮らしている。この施設では食事や寝泊りの他に、勉強や刺繍などをするスペースがあり、子ども達はフリータイムに勉強や刺繍をよくしている。この施設は私達が行った第2、5アスラマより街中にあり、敷地は狭かったが設備はしっかりしていた。特に水道から出る水の量や水道自体が使いやすくすごく清潔であった。子ども達が寝るところは約6畳の部屋に2段ベッドが2つと共通で使うタンス1つが置かれていて、たいてい1部屋4人で寝ている。

### <交流会&感想>

私達はこのアスラマに訪れた時交流会を行った。第4アスラマの子ども達はバリの伝統的なダンス、PSYの「GANGNAM STYLE」、そしてAKB48の「ヘビーローテーション」のダンスを披露してくれた。私達は日本語のかるた、「よさこい」、AKB48の「ヘビーローテーション」のダンスなどをした。「ヘビーローテーション」はみんなで一緒に踊ったりして楽しい時間を過ごすことができた。交流会の後は時間が余ったので施設の紹介などをしてもらった。みんな優しく紹介してくれた。このアスラマに滞在した時間はほんの少ししかなくもっと長い時間滞在したいと思った。そして別れの時子ども達みんな外に出て私達を送り出してくれてすごくうれしかった。



## 大学訪問

9月3日（17日目）

私達はインドネシアの学生が通っているディアナプラ大学を訪問させてもらった。  
また、先生方から大学についてのお話を聞き、その後質問をし、最後に大学内を見学した。

～ディアナプラ大学～

- ボランティアなどの国際プログラムが存在する。
- 桃山学院大学へ交換留学生としていくのは今年が初めて。
- 人気がある学部は経済学部。
- 学費は半額や全額などの免除制度がある。
- 毎年アメリカやブラジルなどへ交換留学生が行っている。
- 桃山の学生もディアナプラ大学に交換留学生として入ることができる。

～大学の目標～

様々な国と交換留学が可能になったことや国際プログラムがあるので、多くの国から交換留学生を受け入れていき、海外の文化を学びながら取り入れていきたいと考えている。



大学内を見学



大学前での記念撮影

## 文化探訪

9月2日（16日目）

目的：インドネシアの文化を知るため。

### ○バロンダンス

バロンダンスは、バリの伝統芸能である。ガムランというバリ独特の楽器を演奏しながら行われる。善なるものを象徴する聖獣「バロン」と邪悪なものを象徴する魔女「ランダ」の勝利なき戦いを描いている。バリでは、良い魂と悪い魂がいつも同時に存在していると信じられている。



### ○ウブド

バリの民芸品などを売っている店がたくさん連なる観光名所である。たくさんの観光客で賑わっていた。ここでは各班で昼食を済まし、買い物をした。買い物時に店員と値引きの交渉をするなど日本ではなかなかできない体験をした。



### ○マタハリ百貨店

インドネシアのショッピングモールである。ここでは、お土産を買い、晩御飯をとるなど各班で自由に行動した。

## エバリュエーション

### <概要>

- 日時、場所 2013年9月1日（15日目）
- 参加者 バリ・プロテスタント教会関係者の方  
スィクラマ氏を含めたアスラマ関係者の方々  
教職員・日本の学生・インドネシアの学生
- 形式 日本の学生1名 英語であいさつ  
日本の学生A～C班から代表者3名、インドネシアの学生の班から代表者1名  
英語で提案  
→バリ・プロテスタント教会の方が応答

### <A班>

- 薬の管理について  
期限切れの薬があった。期限の管理を徹底しなければ危険。
- 排水設備について  
子ども用、ゲスト用のマンディ場を清潔にする。
- 食器洗い用スポンジについて  
現在食器を洗い終わって、洗剤水をためた缶にスポンジを入れ放置している。これでは洗剤水に雑菌が発生し、洗った食器にも雑菌を広げることになる。使ったあとはスポンジ自体も洗って、乾燥させた方が良い。
- 子ども達の歯磨きについて  
子ども達が歯磨きをするのは夕食後だが、就寝前のお祈りの後にイブ達はお菓子を配っている。そしてそのまま歯磨きをせずに子ども達は就寝する。このお菓子を配のをやめるか、イブ達が歯磨きをするよう呼びかけるか対策をとる方が良い。

### <回答>

薬の管理についてはイブ達への指導を強化する。排水設備については検討する。食器洗い用スポンジは提案されるまで気が付かなかったが、提案の通りに改善する。歯磨きのこと、お菓子のこともイブに指導する。

### <B班>

- 火元の管理について  
消灯後、誰でも自由に台所に入れるようになってきているのは危険。鍵を設置した方が良い。調理中、イブの全員が火から目を離すタイミングを作らないようにする。
- 食品品質管理について  
野菜だけ、炭水化物だけなど食事の栄養バランスが偏っている印象を受けた。食品品質管理のスタッフを雇ってはどうか。
- 駐車場について  
車が施設敷地内へ入ってくるが、入ってくる車も生活する子ども達も死角が多い。危険なので、グラウンドを駐車場として使用してはどうか。

<回答>

火元の管理はイブへ注意喚起する。食品品質管理、栄養バランスについては、現在、指導中。駐車場について、グラウンドはアスラマの敷地ではなく、村の所有地なので、駐車場として利用することはできないかもしれない。だから、より利用者も、子ども達も注意し合っていく。

<C班>

• ボールの管理について

ボールの片付け場所が規定されていないので、どこにボールがあるかわからない。ボールの片付け場所を設置する。

• 図書館について

図書館の床のタイルが欠けていたので、修理をする。地べたに座る子どももいるのでカーベットのひく。現在、利用者がいないと施錠されている。使いたい時にはイブへ申し出なければならない。図書をもっと充実させ、図書館を自主学習の空間として常時開放するのはどうか。

<回答>

ボールは倉庫で管理しているが、より強化する。

図書館のカーベットのついては実現しがたいが、タイルの欠けは修理する。所蔵の本のバリエーションや数については、既に計画中で、来年、多くの図書を所有できるように考えている。

## アガペー・フェスティバル

9月3日（17日目）

アガペーとは、キリスト教の神の教えの一つである「愛」についてのことである。私達が思っている恋人や配偶者を「愛する」こととはまた違う意味を持ち、すべての人々を分け隔てなく「愛する」という無条件の愛のことをいう。

このアガペーフェスティバルは、果物を盛り付けたグボガンという塔のようなものを、様々な色の花で彩られた十字架の形をしたテーブルの真ん中に置き、私達はそのテーブルを囲むように座り、行われた。

参加するまでは、内容があまり分からず不安だらけだったが、儀式を進めていって、果物や紅茶を交換し合う、という行いをしていくうちに、打ち解けていった。私達が日本で体験することができない貴重な体験となった。



## 参加学生のレポート

### たくさんのありがとう

学生隊長 国際教養学部 岸田 美香（みか）



#### <はじめに>

IWCのことは1回生の頃から知っていた。いつか参加したいとは思っていたが、できなかった。人見知りで、団体行動があまり得意ではないからだ。しかし、3回生になり友達に誘われた。多分、友達が誘ってくれていなければ、参加していただろう。神様が導いてくれたとしか思えない。

#### <27<sup>th</sup>始動>

私達は5月初めから活動を開始した。毎週月曜日と木曜日の5限に事前研修、7月に募金活動、8月には合宿も行った。その他にもカレー作り、昼休みや夏休みも毎日のように集まって準備を進めた。始めはぎこちなかったチームも、日を重ねるごとに仲良くなった。

#### <出発>

8月18日。いよいよ出発の日を迎えた。不安な気持ちもあったが、事前準備のことや仲間がいるって思ったら楽しい気持ちの方が大きかった。初日のホテルで、スイクラマさん、フォルマンさん、インドネシア学生と合流した。“あー始まったんだなあ。”そんな気持ちでいっぱいになった。

#### <日本語授業>

私は隊長であり、日本語班の一員だ。インドネシアの子ども達が、どこまで日本語を知っている

かわからなかったし、何をどのように教えたら良いのかもわからなく、準備はとても大変だった。インドネシア学生に通訳してもらうので、日本語と英語の台本も作った。ミーティングでは、インドネシア学生に英語で一生懸命ゲームの説明をした。

しかし、高校訪問前日のミーティングで私の班・C班は、「Cチームは本当に大丈夫なのか。インドネシア学生はゲームを理解してないよ」と、他のチームの子に言われた。Cチームのみんなショックを受けていた。しかし、チャプレンがインドネシア学生に確認したら「理解してる」と言った。どっちの言っていることが本当かわからなかったが、高校訪問を明日に控え、迷っている暇はない。自分達のしてきたことを信じるしかなかった。

次の日、高校訪問。おそらくCチーム全員不安な気持ちでいっぱいだっただろう。

高校へ向かうための車の中では、とにかく皆でテンションをあげて気持ちを高めた。

緊張でいっぱいの中、日本語授業は始まったが、結果は大成功。インドネシア学生にミーティングで私達が英語で必死に伝えたことが伝わっていたと思うと嬉しかった。

他のクラスも大成功のようだった。後日、看護学校や小、中学校も行ったが、全体を通してとても良かったと思う。日本語班としても成功したことをとても嬉しく思う。

#### <おとんとおかんとマデ>

私のホストファミリー・おとんとおかんとマデ。

おとんとおかんという呼び名は、初日におかんが自ら言った。「おとん and おかん。」まさかの日本語に私と、私と一緒にホームステイしたパセリは爆笑したが、その日から「おとん」と「おかん」と呼ぶことにした。おとんは、無口そうに見えるがよく話しかけてくれる。たまに「おかえり」

などの日本語を使うのが可愛かった。おかんは、とにかく料理が上手い。おかんの作ってくれたナシゴレンは最高だった。

そして、おとんとおかんの息子・マデ。マデは優しいお兄さんの存在で、いつも私とパセリの話し相手になってくれた。しかし、マデは謎が多い。名前を教えてくれず、「マデ」としか言ってくれなかった。年齢も教えてくれなかった。そして「明日からジャワへ行く」と、急に言われた時は、寂しくて仕方なかった。結局マデは離村式までにジャワから帰ってくるができず、約一週間しか共に過ごすことはできなかったが、マデにはたくさん思い出をもらった。

私は、おとんとおかんとマデの家でホームステイできてよかった。そして、パートナーがパセリでよかった。

#### <アスラマで>

インドネシアでの時間のほとんどをアスラマで過ごしたのではないかというくらい、私達はずっとアスラマで生活した。アスラマでの日々は本当に貴重で充実した時間だった。

まず、時間が経つにつれて仲良くなったイブ達。私はインドネシアに行く前、気合いをいれて髪を短く切った。IWCの女子で一番髪が短かっただろう。しかし、髪のおかげかイブの方からたくさん話しかけてきてくれた。インドネシアの女性は伝統的なバリダンスのために髪を伸ばしているそうで、ショートヘアーが珍しかったのだと思う。名前もすぐに覚えてもらった。

アスラマで生活しているうちにイブ達は多忙であることを知った。イブは毎朝、まだ日も出ていない外が真っ暗な時間に起き、子ども達の朝ごはんを作り、子ども達の世話をする。夜も子ども達の寝る時間を考えた時、とても遅い時間に寝ていると思う。私には到底できないと思った。

そして、たくさんのことを教えてくれた子ども達。私はインドネシア語が話せない。

片言の単語や指さし本、時々英語でコミュニケーションをとったのだが、子ども達が何を言っているのかわからなかったりすると悔しかったし、

勉強不足なことを後悔した。しかし、いつも子ども達は、そんな私の名前を呼び、話しかけてくれる。そして、最高の笑顔を私にプレゼントしてくれる。私は子ども達に、言葉だけが全てでないこと、誰かの笑顔一つで人は助けられることを教えてもらった。

#### <帰国して>

日本へ帰り改めて思う。私は無知で無力だ。何もできないのが現状である。英語もインドネシア語も話せないし、頭が良いわけでもない。日本語授業や交流会が成功したのは仲間がいたからで、おそらく一人では何もできなかっただろう。

しかし、国を越えてインドネシアで出会った人々や子ども達と笑いあえたことは事実である。笑顔で人は救うことができる。

また、人と人との思いやりが、幸せの全てであることをプリンピンサリの人々が教えてくれた。

#### <ありがとう>

私にとってIWCは、一言では言い切れないくらい大きく、とても濃かった。もし、IWCを一言で表すとすれば“ありがとう”。たくさんの人に感謝の気持ちでいっぱいだからだ。

特に引率していただいた先生方、共に過ごしたIWCの仲間への感謝は大きい。インドネシアに行く前、チームとしてうまくまとまらなかった。隊長に選んでもらったのに、一人一人のモチベーションもあげられなく、みんなに申し訳ない気持ちでいっぱいだった。インドネシアへ行っても、隊長として悩んだ時もあった。それでも不思議なことに、隊長を辞めたいと思ったことは一度もない。それはみんなに選んでもらったという責任感もあるが、いつも誰かが私のことを気にかけてくれていたからだ。反対に私は、みんなにたくさん気を使わせてしまい申し訳ないと思っている。しんどい時もあったけど、隊長をして毎日楽しかった。みんなより良い経験させてもらったことに感謝しているし、隊長であったことを誇りに思っている。

インドネシアで、先生方や陽介さんに「良いチ

ームになったね」と言われた時は、本当に嬉しかった。しかし、私は何もしていない。一人一人が自分のチームのために何をすべきか、子ども達のために何ができるか考えたからこそ、一つにまとまり、最高のIWCになったのだと思う。成功したこともあれば失敗したこともあるが、これが今後、自分を含め、みんなの今後に繋がるものであってほしい。

その他にもIWCを全面バックアップして下さっている桃山学院大学、事前研修でお世話になった先生方、いつも協力して下さいだったキリスト教センターの方々、アドバイスして下さいだった25期、26期の方々、募金して下さいだった方々、現地でお世話になったウィディア・アシ財団、アスラムのスタッフ、プリンピンサリ村、ホームステイ先の方々、共に活動して下さいだったスィクラマさん、フォルマンさん、石井美和さんなどIWCに関わった方々全員に感謝している。私達が何不自由なく活動できたのはたくさんの方々支え、協力して下さいしてくれていたからだ。本当にありがとうございました。

## Terima kasih

Mika Kishida (Mika)

Mereka yang yang telah mendukung don terlibat dalam IWC, terima kasih. Dalam IWC, untuk melihat banyak hal, saya bisa berpikir, untuk mendapatkan pengalaman berharga.

Kami telah mempersiapkan untuk pergi ke Indonesia, kegiatan dimulai dari awal Mei. Namun, itu dipelajari untuk pergi sebenarnya, adalah “tidak berdaya” sendiri. Saya tidak berbicara bahasa Inggris dan Indonesia. Saya tidak dapat melakukan apa-apa sendiri. Namun, melalui IWC, aku tertawa dan menyenangkan banyak orang. Hal ini benar. Ini adalah kepercayaan diri yang besar bagi saya. Selain itu, anak-anak, mengajarkan saya bahwa kata tersebut

tidak semua, bahwa orang yang terbantu dengan senyum satu orang. Terima kasih untuk senyum terbaik.

Dan apakah kehadiran kita sangat penting setelah beroperasi. Ini adalah nama mahasiswa Indonesia. Bagus, Rian, Weda, Rai, Ayu. Saya menghargai. Saya belajar Seperti kita berkomunikasi dengan mereka, “sikap untuk mencoba untuk menyampaikan” adalah penting. Sikap karena tidak cukup diingatkan bahwa saya tidak tumbuh. Aku meminjam banyak kekuatan untuk mereka. Ada sejumlah program yang tidak mungkin hanya dengan kekuatan mahasiswa Jepang. Saya senang bahwa selama perbedaan bahasa, menjadi IWC terbaik.

Dia mulai Bapak Nengah Swikrama yang memiliki kegiatan di 18 hari kedua juga lainnya, Bapak Forman, Ishii Miwa san, saya ingin berterima kasih kepada semua orang yang terlibat dalam IWC. Terima kasih.

## 感謝と成長

社会学部 3回生 日野 瑞季 (みずき)



### <きっかけ>

IWC25、26としてワークキャンプに参加した友人から話を聞き、写真をみせてもらううちに、自分の目でもインドネシアの生活や文化をみたいと思った。事前説明会に参加しスクリーンに映し出された子ども達や風景をみて、ますます行きたくなったしワークに携わりたいという気持ちがわいてきた。また、何かボランティア活動をしたという気持ちが重なりこのワークキャンプへ

の参加を決めた。

#### <いざ、インドネシアへ>

飛行機では酔ってしまったが、着いて降りるとそんな気持ち悪さも吹っ飛び、楽しみという気持ちしかなかった。空港はインドネシア独特のお香の香りや、日本には無い造りで感動した。バスの中からみる街の風景は、まず信号が少ない。バスは常にスピードが出た状態で走り続けるので恐怖を感じた。また、バイクはヘルメット無しで三人乗りをし、走行していた。長旅を経てホテルに着き、インドネシア学生と初対面した。私は英語もインドネシア語もほとんど話せなかったが、理解してくれようとしてくれ助かったし、もっと勉強しなければという焦りもあった。次の日、朝早く準備を終わらせインドネシア学生とホテルを探検しながらお話した事もとても楽しかった。

#### <ホームステイ先の家族>

ホームステイ先へは子ども達が案内してくれた。着いてみると想像以上にきれいだった。部屋もピンクで可愛く、住みやすいところだったので安心したし、パパ（お父さん）、イブ（お母さん）、優しいお姉さんのウィウィに歓迎され、嬉しかった。ウィウィは英語が話せたので、英語で会話したがわからないこともあり、同じホームステイ先だった理奈に通訳を手伝ってもらった。けれど話せない自分が悔しくて、事前研修の授業のときにももらったプリントや本をみたり、理奈に英語を教えてもらったりした。これは本当に助かった。パパは私達IWCのワークの手伝いに来てくれたので、毎晩その話をして一日の出来事を振り返ったり、インドネシアの本に載っていた変わったフルーツの説明をしてくれた。インドネシア語がうまく話せない私にわかりやすいように絵を描いて説明してくれたり、写真を持ってきてくれたり、寝る時間ぎりぎりまで一緒に話ができて勉強になった。またイブは、毎朝温かい紅茶とお菓子やピサンゴレン（バナナを揚げたもの）、ナシゴレンなどをつくって部屋までもってきてくれた。これが本当に美味しかった。村を離れる前夜、リビン

グでみんなとお話しているときに「あなたは日本に家族がいるけど、インドネシアでの家はここだと思って。私達のこと忘れないで。」と言われ泣いてしまった。本当に素敵な家族だった、またすぐにでも会いたい！

#### <日本語の授業>

班ごとに分かれて学校で日本語の授業を行うもので、私達の班は他の班より人数が少なかった。そこで大学院生の陽介さんに入ってもらい授業を手伝ってもらった。同じ班のインドネシア学生のウェダと話すときに、どうしても陽介さんに通訳を頼ってしまっているところがあり、話し合った結果、陽介さんが抜けることになった。それを聞いたときは「どうしよう、うまくコミュニケーションがとれるかな」と不安だったが班のみんながインドネシア語や英語、ジェスチャーを通じて話をしてくれた。ウェダが「不安がらなくても大丈夫だよ！」と言ってくれたときは嬉しかったし、もっと話したいと思った。三回の授業を通じて感じたことは、インドネシア語、英語は難しいから話すのがおっくうになりがちだが、たとえ単語でも話そうという気持ちがあれば通じることを実感した。また生徒は日本語で挨拶してくれたり、「大好きだよ」と言ってくれたり、一緒にスポーツを楽しんだり本当に濃い時間を過ごした。結果として高等学校、看護学校、中学校と三回授業を行ったがどれも楽しかった。この授業を通して、日本に興味を持ってくれたらさらに嬉しい。

#### <日本食パーティー>

プリンビンサリ村で日本食を振舞うパーティーが行われ、子ども達やイブやスタッフ、ホームステイ先の家族にカレーライスを作ることになった。事前研修で二回カレーライスを作ったので、作り方や切る順序は良かったと思う。ただ、包丁やまな板などの道具類が足りなくて困った。パーティーが始まり、カレーを作るところまでは良かったが、日本食班のリーダーとして全体の流れを把握しきれず、子ども達を待たせてしまったりイブやスタッフ、ワヤンさんなど多くの人達

を混乱させてしまい、ずっと言われていた「ほう、れん、そう」の伝達が完璧ではなかった。今回のワークキャンプで私の中で一番反省すべき点だと感じた。

#### <アスラマの子ども達>

私達がそれぞれのホームステイ先に帰ったあと、子ども達は寝る前、起きてから学校に行くまでどのように生活するのが気になった。そして第2アスラマで一泊保育ができると聞き、希望者で施設に泊まることにした。ここでは、年齢に関わらず全員一緒に勉強をする。勉強する際2人ほどのスタッフが子ども達を見守っている。そして勉強が終わった子は終わっていない子の作業を黙って見ていた。小さい子が年齢の高い子の勉強をみることで「自分もこんなことしたいな」と興味が湧くいい機会だと思った。しかし、勉強が終わってお祈りが済んだあとにお菓子が配られていた。お腹いっぱいになったら寝つきも良くなると言っていたが、虫菌になる原因だなあと感じた。歯磨きが終わったあと、一緒に寝るのが嬉しくてぴょんぴょん跳ねたり、手をひいて部屋まで案内してくれる子がいたりこちらまで嬉しくなった。ベッドに入ってから「お気に入りなの」と言って私に自分の物を見せてくれた。そのあとはいろんな話をしながら寝て、朝4時に子ども達が起こしてくれた。お祈りのとき寒いので、かけ布団を巻いている子がいたり、うとうとしている子がいたりさまざまだった。何かイブ達のお手伝いできれば、またどのように料理をしているのか気になり、イブが朝食を作るのを手伝うことにした。何十人もの量を短時間で作りあげているのを見て驚いた。朝食を作り終わったあとに「手伝ってくれてありがとう」と言われコーヒーを出してもらったときは嬉しかった。そして実際に台所にいて気づくこともあった。電球が少ないため手元が暗く、包丁を持つ際危ないということ。これは後のエバリュエーションで出された意見の一つだ。朝ごはんを食べたあと、子ども達はきれいに整列し、確認ができたなら学校へ向かう。学校に向かうとき、子ども達はバラバラに学校まで行く。この

時も一緒に学校まで手を繋いで行った。2週間ほどしか滞在することができなかったが、毎日子ども達と公園で遊んだり、シャボン玉をしたり、折り紙を折ったり…。特に印象に残っているのはマンディ（水浴び）を手伝ったとき、子ども達はすごく喜んでくれ「私も頭洗ってー！」と渋滞ができるほど。泡を立てて角を作ったり、髪がくしに絡まり、「とれないよー」と言って泣きついてくる子がいたり、水をかぶった直後に走ってきて抱きつき、ニコニコしている子がいたり楽しかった。離村式ではそんな日々を思い出し本当につらかった。

#### <まとめ>

事前研修のときからインドネシアの様々なことについて、ある程度知識を入れて行った。しかし、実際に行ってみると知識だけではなく身体で体験することが、いかに大事かが分かった。また、アスラマの子ども達やバニユポ村をみると、日本では蛇口をひねるとすぐに出る水も非常に貴重であり、当たり前のことを当たり前と思う気持ちが変わった。また、子ども達の幸せとは何か、と考えたときに私達の幸せと子ども達の幸せは違うということもわかった。私達のこれが幸せだろうという気持ちの押し付けは間違っているのだ。また、自分の精神面でも大きな変化があった。事前研修のときから団長やリーダー、IWCメンバーを始め、先生方にも私の身勝手な言動、行動で迷惑をかけた。それは自分しかみえていなくて、周りを見ていなかったから。周りをみようとして心の中で思っても結局行動に移さなくては意味がない。そのことは日本食パーティーのときにも周りに言われて気づかされた。けれど周りに言われてからでは遅いし自分でやっていかないと！と思い、少しずつだが今何をすべきか周りを見渡せるようになった。結果としてワークや行事を円滑に進めるうえで自分ではなく、周りの優先事項がみえるようになった。これは今までの私には無かったことで、生活する環境やそのときの状況によって臨機応変にしていかななくてははいけないということを知った。最後に、このワークキャンプに携わって

れた全ての人に感謝したい。また、団長、先生方、現地でのスタッフにも本当に感謝でいっぱいである。そして、インドネシアワークキャンプに参加してみたい！と思っている人はぜひ参加してほしい。自分が今まで思っていたことや感じていたことが本当に変わる。また、本を読んだり、話を聞いたり、インドネシアの文化や生活、人の温かさは実際行かないとわからないので、ぜひ行って体験してほしい！

## Terima Kasih!

Mizuki Hino (Mizuki)

Saya datang ke Indonesia pada tanggal 18 agustus 2013. Pertama kali saat datang ke Indonesia, sangat serius karena saya tidak bisa berbicara bahasa Inggris dan Indonesia.

Saya pikir saat berbicara, hal yang paling penting adalah berkomunikasi. Tapi kekhawatiran itu tidak diperlukan. Orang-orang Indonesia benar-benar berhati baik.

Saya memompa udara ke dalam beberapa bola. Lalu saya merusak pompanya. Saya meminta maaf kepada pemilik pompa dan yang lainnya.

Tapi orang-orang berkata tidak apa-apa. Mereka tidak marah dan menghibur saya. Jadi saya menyadari kalau mereka benar-benar berhati lembut.

Lalu anak-anak Asrama benar-benar lucu dan manis. Awalnya saya gelisah apakah saya bisa menjalin persahabatan dengan mereka. Saat saya di Jepang, saya tidak punya kesempatan untuk bersosialisasi dengan anak-anak.

Tapi mereka tetap tersenyum dan memanggil nama saya. Saat saya tinggal di Asrama, saya selalu memikirkan sesuatu untuk dibicarakan dengan mereka. Saya pikir mereka tidak melihat saat mereka sedang bermain pada hari itu.

Setelah mereka selesai belajar, mereka

mengajak saya ke kamar saya sambil memegang tangan saya. Saya sangat senang saat berbicara dengan mereka pada malam hari. Saya ingin tetap tinggal di sana.

Kembali ke Jepang membuat saya. Merasa Hanya Kesepian 2 minggu, 2 minggu tidak berada di kelas yang sama seperti 2 minggu menghabiskan waktu di Jepang.

Saya juga sangat menghargai keluarga Homestay. Setiap hari Bapa Homestay membantu kami bekerja bersama dengan anggota IWC. Setiap pagi Ibu Homestay membuatkan kami pisang goreng dan teh.

Tiap siang hari, Wiwik mendengarkan cerita saya. Mereka bagaikan keluarga kedua saya. Saya cinta dan sayang dengan mereka. Saya memutuskan untuk mengunjungi mereka dan berbicara lagi dengan mereka.

Saya akan bisa berbicara bahasa Indonesia sangat bagus dan hebat, begitu juga dengan Budaya Jepang. Kakekku juga berkata demikian saat dia masih bekerja dulu.

## バリ島で得たもの

経営学部 2回生 深田 侑杜 (ゆうと)



### <IWCとの出会い>

2回生になった4月、仲の良い友達に、「夏休みにバリ島に遊びに行けへんか？」と誘われ、私はふたつ返事で「行く！」と答えた。これが私とIWCとの出会いである。私は今までの人生、貧困や差別、戦争などといったものから目を背けて生きてきた。テレビでやっている貧困や紛争がテ

ーマとなったドキュメンタリーや、『火垂るの墓』などの戦争物の映画など、ありとあらゆるものを見ないように見ないようにと、生きてきた。理由は、自分がスーパーマンでないことは100も承知なのだが、そんな現実を救えない自分に腹が立ち、とても申し訳のない気持ちになって、いたたまれなくなるからである。IWCの活動が貧困などの理由で家族と離れ、施設で生活する子ども達にボランティアをする内容などとは全く知らないまま私のIWCはスタートした。

#### <バリ島へ行くにあたって>

バリ島でのボランティアは8月の18日から9月の4日までなのだが、IWCの活動はゴールデンウィーク明けから始まった。週に2回、月曜日と木曜日の5限にインドネシア語とバリ島（インドネシア）の文化についての講習があった。普段あまり学校に行かない私にはとても辛かったが、一度しか休まなかった。何故こんなことをしなくちゃならないのだろうと受講しているときは思っていたが、いざ現地へ行ってみると役に立つことがたくさんあったので、今後のIWCに参加する人はだれずにきちんと出席して欲しい。また、昼休みには毎日のように歌とダンスの練習があり、募金活動をしたりと本当に忙しかった。先にも書いたが、元々学校へあまり行かないので昼休みの活動にはあまり参加出来なかった。こんなちゃんぽらんな動機で参加し、適当な性格の私だが、サブリーダーに選ばれた。せっかくみんなに選んでもらったのに、昼休みの活動を休みがちで、チームがなかなかまとまらず本当にみんなには申し訳のないことをしたと思っている。恥ずかしがり屋で口べたなので、この場を利用してみんなに謝りたい。「ごめんなさい」。

夏休みもほぼ毎日練習があった。また、一泊二日の合宿も行った。合宿では本当に忙しく、1,2時間ほどしか寝る時間がなかった。おかげで、合宿が終わり解散した後、キリスト教センターの会議室で疲れ果てて寝てしまった。そのくらい内容の詰まったいい合宿になったと思う。いざ出発の日が近づくにつれ、チームはまとまってい

ない、ホームステイ先でやっていけるのか？私達がバリ島へ行ったところで実際に子ども達のために何が出来るのか？など、不安で不安でたまらなかった。また、それと同時に、5月からやってきたIWCの成果をようやくぶつけられるという喜びもあり、複雑な心境のまま出発当日の朝を迎えた。

#### <バリ島>

バリ島の1日目はホテルで過ごした。そこでインドネシア学生と初顔合わせをした。お互いに自己紹介をし、一緒に夕食を食べた。インドネシア語も出来なければ、英語も出来ないの、コミュニケーションをとるのがほんとに大変だったが、事前講習で習ったインドネシア語の単語と英語の単語でなんとか、会話と言って良いのかわからないほどのコミュニケーションをとった。夕食後、みんなでホテルのプールに入って遊んだ。そこでインドネシア学生と距離が縮まったと思う。プールの水は冷たいし、気温は低いしですごく寒かったが、楽しかった。

翌日、私たちはアスラマへと移動した。アスラマに着くと、子ども達がバリの民族衣装、バリの歌とダンスでお出迎えをしてくれた。なんだかよくわからない内に終わってしまい、子ども達に案内され私たちメンバーはそれぞれのホームステイ先へと向かった。ホームステイ先に着くと、事前研修の時から用意していた挨拶があったのに頭が真っ白になった。インドネシア語ではなく、英語で挨拶をしてしまった。しかし、私のホームステイ先の家族はおじいちゃん、おばあちゃんから下は小学校4年生までみんな英語が出来、温かく笑顔で迎え入れてくれた。本当の息子のように接してくれ、また、私も本当の父と母のように慕った。玄関先に椅子と机の置いてあるスペースで毎晩色々な話をした。本当に、本当にいい家族だった。

次の日から、本当の意味でのワークキャンプが始まった。IWC27では、女子マンディー場建設のために基礎工事として穴を掘るというのがワークの主な内容だった。場所が狭く、危険なため男女に別れて活動した。穴を掘る作業は本当にしん

どく、暑さとの戦いだったが、ワーク最終日に穴を掘り終わった時の達成感は今まで感じたことのないものだった。女子マンディ場が完成し、子ども達が笑顔で使っているのを想像するだけでワクワクした。今までのマンディ場は、決して衛生的に良いものと言えるようなものではないので、早く完成させてあげたかった。

日本語の授業では、看護師の専門学校や高校、中学校、小学校へ行った。日本語の授業は、日本にいる時から準備していたのだが、本当に盛り上がってくれるのかなどと心配がいっぱいあった。でも、いざ授業をしてみると日本の学生では想像もつかないほど積極的に参加してくれて、授業が終わると私達のことを取り囲んで、「写真撮ってよ!」と言ってきた。本当にかわいい子達だった。私達が学校を訪れ、授業したことで日本に少しでも興味を持ってくれる子が増えればいいなと思う。

そして、事前準備で一番時間を割いて練習したのがなんと言っても交流会だ。交流会では、私達と子ども達が交互に出し物をするという形で進行された。子ども達の出し物の中には、私達が初めてアスラマを訪れた時にしてくれた歌やダンスもあったのだが、全く違うものに見えた。いつもはギャーギャーと騒いではしゃいでいる子ども達が、しっかり踊って歌ってとしているのを観ているととても感動した。やれば出来る子達なんだと、みんなに見せて自慢したい、何とも言えない気持ちになった。

日本食パーティーではカレーを作り、アスラマの子ども達、施設で働くイブやパパ、ホームステイ先の家族、村のお偉いさんなどに振る舞った。カレー作りは本当に日本食班にすべて任せてしまって、成功とは言えない結果になってしまった。私は、このワークキャンプに対して後悔はないと胸を張って言えるのだが、一つだけ選べと言われると、このカレー作りを成功させてやる事が出来なかった点だ。もう少し手伝ってあげたら良かったかな?と思ったりするのだが、このカレー作りを通して成長してくれたメンバーもいるので、成功はさせてやれなかったが良いモノになったと

思う。

村を離れる前日の晩に、子ども達をはじめとする村の方々に離村式というものをさせていただいた。いつも、IWCのメンバーにはキツイ事ばかり言って、常に高いハードルを要求し、それを超えるとまた更に高いハードルを…というふうにやってきたので、本当にみんなこの18日間を楽しんでくれたのかな?楽しむことが出来たのかな?と、ずっと心配していた。離村式では、それぞれのメンバーとホストファミリーがホームステイごとに前へ出て行き、メンバーから手紙を渡すというのがあったのだが、何も言われてないのに自然にメンバーとホストファミリーが抱き合っているのを見ると、涙が止まらなかった。メンバーは朝早くから夜遅くまで作業やミーティングで疲れているだろうに、ホームステイ先に帰ってからはホストファミリーと会話などをして楽しんだんだなあと思うと、本当に嬉しかった。私が、ホストファミリーに家族の一員として過ごさせて貰ったように、メンバーそれぞれが、それぞれのホームステイ先でそうしていただいていたんだと思い、本当に人の温かみに触れた。IWCは私達だけのものではないんだと改めて思われた。各メンバーがみんなホストファミリーの方達に支えられ、その上でプログラムをしていたんだと。

#### <IWCの成功>

IWCが5月に発足してからずっと課題があった。IWCの成功とはなんなのか?そればかりを考えてきた。何度もリーダーのミカと話し合った。何度話し合っても、どんなに考えても結論は出なかった。インドネシアへ行ってからも考え続けた。どうやったらこのワークキャンプは成功するのだろうか?どうしてあげたらこのワークキャンプを成功させてあげることが出来るのだろうか?と。ずっとずっと考え続けた。結局、ワークキャンプが終わり、日本へ帰って来た今でも、IWC27は成功したのだろうか?と、ふと考える時がある。これは、永遠に答えが出ないものなんじゃないかと最近思うようになった。いや、もう答えは出ているのかもしれない。IWCは参加しないとわか

らない事ばかりだ。良かったと伝えることは出来るが、それ以上の言葉は見当たらない。参加した者にしかわからない気持ち。バリに行かないと見えてこないもの。ここでしか経験出来ない何かがある。視野が広がり、今まで見えていなかった世界が見えてくる。みんなそれぞれ成長の幅は違うが、一回りも、二回りも大きくなれる。そんなプログラムとなっている。是非みんなにも行って欲しい。

IWC27を支えて下さった全ての皆様、IWC27に関わって下さった全ての皆様、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。こんな私達も、バリ島へ行き、子ども達のために何かしてあげられる事はないかと、日々試行錯誤し、日に日に成長することが出来ました。おかげさまで、無事に全プログラムを全うし、予定通り帰ってくる事が出来たことを心から嬉しく思います。本当に、本当に心からお礼を言わせて下さい。ありがとうございました。

## PAGI!

Yuto Fukata (Yuto)

Apakah yang saya miliki, yang saya peroleh di Indonesia saat berpartisipasi dalam IWC27, itu adalah untuk bekerja sama. Saya tidak bisa berbicara bahasa Inggris. Tentu saja, itu tidak bisa berbicara sama sekali di Indonesia. Ketika Anda berkomunikasi dengan orang-orang dari negara lain, sekali lagi, hambatan bahasa besar. Namun, untuk bekerja sama dengan mahasiswa Indonesia, harus berkomunikasi entah bagaimana. Apakah sama lain putus asa. Saya mencoba untuk menyampaikan entah bagaimana, di sana saya mencoba untuk menemukan cara entah bagaimana. Aku senang terbaik ketika ditransmisikan.

Mandi adalah rasa sakit setiap hari. Air nya dingin pula. Suhu rendah pagi dan malam bahkan

gratis, untuk mandi di air dingin itu benar-benar menyakitkan. Itu satu-satunya keselamatan setiap hari adalah meminum kopi buatan Ibu. Dan Ibu memberi kami pisang goreng setiap kali bersama dengan kopi. Pisang goreng kopi hangat dan panas, dan juga menjadi energy setiap hari, kita menyembuhkan kelelahan hari. Jumlah orang asing bagiku bahwa tidak ada ibu dan ayah bertem, itu adalah kebaikan seperti anak kandung. Aku benar-benar senang.

Saya belajar banyak hal di Indonesia melalui IWC. Di negara asing yang budaya yang berbeda, juga memiliki kata-kata yang berbeda, saya memiliki berbagai pengalaman. Saya pikir semua program dari IWC telah berakhir, tapi tidak pernah berakhir selamanya. Saya berpikir bahwa dengan memanfaatkan mengalami berbagai diperoleh di Indonesia, pengalaman, dan ingin menghubungkan urutan yang ditentukan. Kita disambut dengan senyum, kepada Desa Blimbingsari, dan orang yang telah mendukung kegiatan kami, terima kasih banyak.

## たくさんの出会いに感謝

経営学部 4 回生 坂口 恵理 (えり)



### <きっかけ>

最初のきっかけは、友人に誘われて説明会にいったからである。わたしは小さい妹がいて、その友達も一緒に遊んだりすることが多く、元々子どもが大好きなので、インドネシアに行って、色々なことを経験したいということと、子どもと遊びたいと思い、このワークキャンプに参加しようと

考えた。

#### <日本からインドネシアへ出発>

私達は18日間、バリ島に滞在した。そのほとんどを、プリンビンサリ村で過ごし、日本とは比較することができないくらい、充実した日々を送った。IWCでインドネシアに向かう前日は、緊張や不安であまり眠ることができなかった。18日の朝、メンバーの皆と関西国際空港で合流し、約7時間かけてインドネシア、バリ島に到着した。一日目は、デンパサールのホテルに泊まり、そこで18日間一緒に過ごすことになる、インドネシアの大学生と合流した。ミーティングで自己紹介をし、食事の席でより交流を深めた。インドネシア学生は5人いて、皆英語がとても上手だった。

翌日の朝、ホテルで朝食をとった後、4時間かけてプリンビンサリ村に向かった。プリンビンサリ村は、都会のデンパサールと比較して明らかに田舎で、店などもほとんどなく、また、子どもがバイクを運転していたことにショックを受けた。他にも野良犬やにわとりがたくさんいて、日本では見ることができない光景が広がっていた。そして、アスラマに着いてバスを降りると、子ども達がバリの伝統的な楽器を演奏してくれて、歓迎してくれた。そこで初めて子ども達と対面した。子ども達は初対面にも関わらずほとんどの子が心を開いてくれているように思えた。子ども達の目はとても綺麗で、純粹でまっすぐな子ども達だという印象を受けた。そのため、最初は親と離れて暮らして育った子ども達という感じはしなかった。けれど、一緒にいて、かまってほしそうにしている子ども達の姿をみるとやはり、寂しいと感じているのだと思った。昼食後、施設の中を案内してもらった。施設はとても広かった。そこからインドネシア学生を交えた日本語授業の練習を初めて行った。私の班は、ライとバグースが一緒であった。あきらは英語が上手なのでコミュニケーションがうまくとれて、練習もスムーズに進んだ。

#### <ホームステイ先>

子ども達が、ホームステイ先に案内してくれた。私はくるみと同じホームステイ先だった。ホームステイ先の家は、想像していたものより、はるかに綺麗だったし、ご家族の方々は、私達をととても温かく受け入れて下さった。家族構成は、お父さん、お母さん、息子さん、娘さん、息子さんの奥さん、息子さんの子どもという感じであった。娘さんは、私と同じ大学生で、英語が喋れるためコミュニケーションがとれた。しかし、私の英語力が乏しいため、コミュニケーションが難しい場面も多々あったが、娘さんはいつも一生懸命に私達の話聞いてくれたので、私も頑張って伝える努力をした。息子さんのおおさんは、シャイボーイだったので、心を開いてもらえるまで一週間はかかった。この日私達は、日本から持ってきたお土産を渡した。私はディズニーランドで買ったクッキーと、子どもが遊べそうな玩具と、扇子とポスターを渡した。ポスターは部屋に飾ってくれたし、玩具は子どもさんが遊んでくれたので嬉しかった。インドネシアの事や、日本の事など、色々な話をした。日本の話題になったとき、津波の心配をしてくれた。やはり2年前にもなるが、関東大震災は遠く離れたインドネシアでも、衝撃的なニュースだったのだなという風を感じた。お互いの国の話の他にも私達自身の話など、たくさん話をした後、部屋に案内してくれた。部屋の隣は、来客用のトイレとマンディをする所だった。部屋も綺麗で、布団まで用意してくれていた。話を聞いていると、家族の方はよくホームステイを受け入れているようだった。来客リストのようなものを作っていた。村の中でも比較的裕福なご家庭なのだと思った。そして私達は再びアスラマに戻り、夕食をとった後再びホームステイ先に戻った。この日が初マンディだったが、日本と違いお湯がでず、洗面器に水をためて体を洗うのだが、気温も夜は低いのでとても寒かった。洗濯も手洗いで、洗った後、しぼるのが大変でしんどかった。

### <ワークについて>

入村式を行い、本格的にワークが始まった。メインのワークは、マンディ場を作るための基礎工事で、穴をほるといふ作業だった。インドネシアでは、簡単な工事では、重機を使うことがあまりないので、すべてスコップなど、手作業で頑張った。班に分かれて交代で穴ほりの作業をしたので、体への負担はあまりなかったが、インドネシアの日差しは、日本にも負けて劣らず厳しかった。この作業の基礎が完成すると、女子と男子に分かれてワークを行った。私達は、他にも、草むしりや田植えを行った。草むしりは、ハチや蛇がいて少し危険な作業で、一番しんどかったのがとった草を遠く離れたゴミ箱まで荷台にのせて運ぶ作業である。これはとても体力が奪われる作業だった。田植えは、ほとんどの皆が日本では経験したことがなく、初めての経験であったが、蛙や虫などが生息する水田の中に素足で入るのは少し抵抗があったが、子ども達が食べる食材になるので皆で頑張った。

### <日本語授業>

日本にいる間、日本語授業の練習を行ったのだが、インドネシアの子ども達との言葉の壁をこえることができるか不安に思っていたが、ライとバグースと、練習をしてその不安は解消した。彼女達はとても理解力が高いので、とても驚かされた。

初めての授業は、ムラヤの高校で日本語の授業を行った。初めはとても緊張していたが、始めてみるととても楽しかった。高校生の皆は私達の授業をとても楽しんでくれたからである。一番盛り上がったのは、フルーツバスケットと告白ゲームだった。授業は無事終わった。二回目の授業はインドネシアについてから予定が変更し、急遽決まったムラヤの看護学校での授業だった。前回の授業からミーティングをして、改善を行った為、とてもスムーズに授業が進んだ。高校生達は皆、日本語授業にとっても積極的に参加してくれて、とてもやりがいがあった。そしてプリンビンサリでの小学校の授業も行った。小学校の授業が一番大変だった。輪の中に入れずに泣き出してしまう子

どももいて、小学校教員は本当に大変だなと思った。けれど皆無邪気でかわいかったし、楽しい授業だった

### <バニユポ村>

バニユポ村へは、プリンビンサリからバスで一時間程かけて着き、さらに15分程かけて歩いて着いた。家というよりは、小屋のような感じで、住環境はほとんど整っていなかった。まず水道がなく、水は三時間かけて週に二回調達しているそうだ。貧困な家庭から子どもが生まれて、また貧困のサイクルが続くという話を聞いた。見たものすべてが衝撃だった。日本がとても恵まれている国であるということを感じた。

### <アスラマの子どもたち>

アスラマの子どもたちは、とても素直で、純粹だった。毎日学校から帰ってきたら、手をふってくれて、一緒に遊んでほしそうにしてくれるので、とても可愛かった。交流会では、今まで練習をしてきて、それだけに緊張したが、子ども達が楽しんで一緒に踊ってくれたのでとても楽しい夜だった。子ども達が私達たちのために一生懸命バリダンスを踊ってくれた。子ども達のダンスはとても素敵だった。本当に子ども達との日々はあっという間にすぎた。お別れのときも子ども達は私達と一緒に泣いてくれたので、とても寂しかった。またいつかアスラマに訪れて、成長した子ども達に会いたいと思う。

### <さいごに>

振り返ってみて、村での生活は、初めてのことばかりで、失敗もあったが、全てがよい経験となった。一番に感じたことは、アスラマの子ども達は、本当に純粹で、まっすぐであるということである。子ども達は、私達と遊びたがってくれて、ささいな事でも本当に喜んでくれた。これからも豊かな心を持ち続けて育ててほしいと本当に思った。親と離れて暮らしているにも関わらず、素直に育ったのは、インドネシアや外国の方々からの支援、何よりイブに大事に育てられてきたらから

だと思った。遠く離れて暮らす私達に出来ることは、支援をすることしかできないが、それでも子ども達の将来のためになるなら、このような活動を自分なりに続けていこうと決めた。そしてたくさんの方々々に自分が体験したことを聞いてほしいと思う。これからも、子ども達が、健康に、心豊かに育つことを心から願う。

## Terima kasih

Eri Sakaguchi (Eri)

Kami memiliki pengalaman yang sangat berharga di Indonesia. Kami menghabiskan 18 hari di Indonesia. Aku sangat gugup pada awalnya. Aku merasa gugup. Aku tidak bisa tidur sehari sebelumnya. Tapi setelah tiba di Indonesia, atau kecemasan menghilang. Karena karena saya bertemu anak-anak. Itu sangat menakutkan waktu untuk menghabiskan waktu dengan anak-anak. Anak-anak akan merasa sedih kadang-kadang. Dan anak-anak kemungkinan akan ingin? bermain. Anak-anak tidak menghabiskan waktu dengan orang tua. Anak-anak pasti merasa kesepian. Tapi anak-anak begitu polos. 98. Saya berpikir tentang apa yang Anda dapat lakukan untuk anak-anak. Aku tidak bisa ada selalu bersama anak-anak. Kita tidak harus kembali ke Jepang. Tapi aku ingin bersama sedikit lebih lama aku. Saya ingin memberikan efek anak-anak sedikit lebih baik. Setelah kami dan perilaku yang baik, saya akan berpikir anak-anak akan meniru. 150. Jadi, saya berusaha keras. Saat perpisahan, anak-anak menangis. Apa yang saya juga perpisahan sedih. Dan saya pikir apa yang harus saya lakukan. Saya akan mencoba untuk menyampaikan kepada banyak orang keadaan Indonesia saat ini.

## 体験を経験に

経済学部 3回生 片桐 由佳梨 (ばせり)



### <きっかけ>

IWCの存在は、桃山に入学する前から知っていた。「大学に入ったらワークキャンプに参加しよう!」そう思っていたのに、いざ大学に入るとただただ過ごしてしまい、あっという間に1年が過ぎてしまった。2回生になってずっと行きたかった東日本大震災のボランティアに参加し、人の温かさや継続の大切さなど多くのことを学んだ。長期の休みのたびに東北に行き、充実した1年になった。3回生になり就活が近づく中、今しかできないことをして昨年のような充実した1年にしたいと考えていた時、このワークキャンプを思い出し応募した。また、東北ボランティアで出会ったIWC25や26に参加した友達に「ぜひIWCに参加してほしい」と背中を押されたのも大きい。

### <バリに行くまでの準備>

バリに行くまで週2回の事前研修の他にインドネシアで行う予定の交流会や日本語の授業の準備、募金活動などでほぼ毎日集まった。私はしおり・記録班と郵送班で、みんなでしおりを作成したが、早めに準備していたわりに出来上がったのは出発のちょっと前で、とても遅かった。郵送も先生との連携がうまくいかなかったり、メンバーに伝わってなかったりと反省点が多い。日が経つにつれてメンバーと仲良くなっていったと思うが、事前準備などの行動が遅く、まとまりもなかった。私は交流会や教会で歌を歌うときの指揮を任されたが、普段人前に立つことがないので、的確な意見を言うことができず、良い方向に持っていくことができなかった。夏休みの合宿や出発前

最後の練習でも納得いかず、不安しか残らなかった。しかし、絶対良い物にしようという気持ちで日本を飛び立った。

#### <初海外>

私は今回が初めての海外だったので嬉しさ半分、不安半分だった。デンパサール空港に着いた時、バリの匂い、建物、人々、どれも新鮮だった。ホテルに行くまでのバスでも、バイクの多さや3人乗り、4人乗りが当たり前の風景に驚きを隠せなかった。バイクの人達に手を振るとみんながみんな手を振り返してくれて、温かい国だなと思った。

#### <アスラマ>

プリンピンサリへ向かう日、文化の違いや意思疎通できるかなど、不安でいっぱいだった。しかし、そんな不安も吹き飛ばくらい盛大なダンスや音楽で迎えてくれた。何人かの子がキラキラした笑顔で話しかけてくれた。何を話しかけたらいいかわからず戸惑っていた私は、その笑顔に何回も助けられた。同時にもっとインドネシア語を勉強してきたらよかったと後悔した。私と会うたびに、また遠くからでも見つけるたびに「ゆかり!!」と駆け寄ってくれるのがとても嬉しかった。遊べる時間には子ども達といっぱい遊んだ。質問されて答えられないとき、もどかしくて悩んだ。そのたび「Tidak apa apa (大丈夫!)」と言って助けてくれた。アスラマに泊まった時、同じ部屋の子ども達が学校のノートを見せてくれた。見ると、ひらがなで文章が書いてあり「日本語の勉強楽しい!日本に行ってみたい」と話してくれた。その子は中学校で私が日本語の授業をしたクラスの子だった。私達との交流を通して、少しでも日本に興味を持って日本に留学に来てくれる子がいるといいなと思った。先生に、ここの子ども達のバックグラウンドを考えなさいと言われた。子ども達の出身村であるパニユボ村を訪れたとき、同じバリの中でこれほど貧富の差がある所に驚いた。雨水で生活し、育てているブドウの収入も少なく、私は複雑な気持ちになった。自分にできることは

何なのだろうか。結局答えはなかった。とにかく目の前の子ども達を楽しませようと思った。

アスラマを去る日が近づく、「いつ日本に帰るの?」と聞かれて「もうすぐ帰るよ」と答えると、悲しい顔をして黙って抱きついてきた、こっちが泣いてしまった。そしてお手紙をもらった。少しの間しかいなかったのに、自分のためにしてくれていることがとても嬉しかった。また帰ってくると約束したので、もっとインドネシア語もバリについても勉強して帰ってきたいと思う。

#### <ホームステイの生活>

ホームステイは隊長のみかと一緒だった。子ども達の案内でホームステイ先に行くと、笑顔で迎え入れてくれた。私のお世話になった家族はパパ・イブ・そして息子のマデだった。パパとイブは少し英語が話せ、マデは流暢に英語を話せた。英語もインドネシア語もままならない私は、インドネシア語の本を使いながら英語と日本語まぜこせで話した。マデとは夜にいろんな話をした。お互いの文化の違いや家族のこと、虫(ゴキブリや蜂など)が出たときは退治してもらった。インドネシアには「ただいま」「おかえり」って言う文化はないと言われたので教えると、次の日曖昧ながらも言ってくれてとても嬉しかった。「おかえりとかただいまの文化とてもいいね。」と言われ、今まで気が付かなかった日本の良い文化に気づけた。とてもお世話になったマデに最後会えず、お別れを言えなかったことが心残りだ。パパとイブに「私達のことはおとんとおかんって呼んで!」と言われた。おとん、おかんは関西弁でお父さん、お母さんである。以前来た人たちが教えたのだろう。おとんとおかんと呼ぶことでとても距離が縮まった。毎日おいしい紅茶とお菓子を出してくれて、一緒に家でご飯を食べた日はナシゴレンを作ってくれた。本当の娘のように私とみかのことを可愛がってくれた。おとんに「次いつ来る?いつでもおいで」と言われ泣きそうになった。いつになるかわからないけど絶対帰ってきたいと思った。

ホームステイの生活は、慣れないことが多かつ

た。朝おかん達が起きるのがとても早く5時には起きると言っていた。そしてマンディである。マンディはシャワーのことで、朝と夕方に浴びる。シャワーは水なのでなかなか苦戦したが、日が経つにつれてマンディをしたくなるようになった。朝早くから活動して昼の暑い時間は休憩して、夜早く寝る習慣は健康的でとても良いと思った。

#### <インドネシア学生への感謝>

インドネシア学生には感謝してもしきれない。彼らがいなければ今回のIWCの数々の成功はなかっただろう。彼らはみんな勤勉で、日本のアイドルにも詳しく、「これは日本語でなんて言うの?」と色々質問してくれて、すぐ覚えて使ってくれるのが嬉しかった。誰が教えたのかわからないが、日本の流行語も覚えていた。交流会のダンスや歌も、何回も練習して覚え、ドラゴンボールの劇のインドネシア語訳もしてくれた。特に同じ班でインドネシア学生のアユにはとても助けられた。日本語授業のミーティングの時、伝えたいことやアユにしてほしいことなどがうまく伝わらず苦戦した。そのことを指摘されたこともあった。どうせ自分の英語は伝わらないだろうと、英語を話すことが嫌になった瞬間もあった。しかしアユが一生懸命理解してくれようと頑張ってくれたので、私達もアユの気持ちに込められるように頑張った。図やジェスチャーで説明し、簡単な単語でもいいから必死に伝えた。その結果日本語授業は自分達の思っていた以上に大成功した。アユがゲームのルールなど細かい部分までちゃんと理解してくれて、インドネシア語に訳してくれたおかげだ。この困難のおかげで私達の絆はより深まったと思っている。言葉の壁というけれど、それは自分で作ってしまったもので「伝わらず、気まづくなったらいやだな」「単語全然わからんから会話できない」とか自分で勝手に決め付けてしまったものである。自分の思っていることが伝わる喜びを知るとおのずともっと喋りたいと思い、英語やインドネシア語を勉強したくなった。積極的に話しかける勇気を学んだ。インドネシア学生みんな本当にありがとう!

#### <学びとは?>

ある日、三宅先生から「学びとは様々な経験・訓練から知識や技術を身に付けること。学校で先生から教えてもらうのは受け身。自分から問題を見つけ解決策を探すことが大事である。ワークキャンプでは教室で学べないことがたくさんある」とお話してくださった。これまで色々考えて動いてきたつもりだったが、何も考えてなかったことに気付いた。少ない時間の中で子ども達がより良い生活を送るために何が出来るだろう。自分はインドネシアの文化を本当に理解していたのだろうか。失敗から学んだことも多い。ハウレンソウ(報告・連絡・相談)の大切さ、自分の周りをもっと見ることなど。また自分達のやってきたワークはほんの一部だけかもしれないが、いつか必ず子ども達のためになる。意味のないことなんて絶対ないこと。そしてこのワークキャンプの体験を自分のものにして多くの人に伝えようと思った。

#### <最後に>

ワークキャンプにもっとはやく参加すれば良かったと思ったこともあったけれど、IWC27に参加して本当に良かったです!みんなは本当に大切な存在になりました。失敗も成功も含めて私は大成功だと思います。今回のワークキャンプに関わってくださったアスラマの皆さん、おとん、おかん、マデ、プリンピンサリ村の皆さん、三宅先生、チャブレン、福田先生、黒田先生、スィクラマさん、フォルマンさん、浅井さん、陽介さん、美和さん、キリスト教センターの事務の方々、事前研修の先生方、インドネシアの学生、日本の学生みんな、本当にありがとうございました。

## Terima kasih

Yukari Katagiri (Paseri)

### <Host family>

Saya sangat berterimakasih kepada bapak dan ibu dan keluarga. Karena saya boleh tinggal disini selama “Work camp”. Terima kasih buat kebaikan anda dan keluarga semuanya. Saya tidak akan lupa dengan keluarga ini. Saya sangat cinta dengan keluarga ini. Sampai bertemu di lain kesempatan semoga tuhan memberkati. Sekali lagi terima kasih.

### <mahasiswa indonesian>

Terima kasih banyak untuk 18 hari. Itu menyenangkan, setiap hari adalah mudah untuk berbicara kepada orang dengan serius. Aku telah membantu dalam kelas penuh dari Jepang. Kisah budaya Indonesia, kisah idola Jepang, adalah Masih berbagai cerita. Anda mungkin telah membiarkan menyenangkan pikir ketika Anda berbicara pada satu-satunya Jepang. Benar-benar saya minta maaf. Saya bekerja dengan orang-orang dan waktu itu sangat berharga. Kami juga menantikan hari saat aku bisa bertemu lagi dengan semua orang. Silahkan datang bermain ke Jepang. Aku akan Memond ke berbagai tempat di Jepang.

### <ibu>

Terima kasih banyak untuk selalu membuat nasi lezat untuk kita. Saya menghormatinya, memiliki banyak pekerjaan di mana Anda belum melihat kami selalu lembut. Aku benar-benar dirawat oleh Anda dapat bertanya kepada saya sebuah komputer pribadi. Saya juga ingin bicara tentang musik Jepang dan bicara harga Jepang. Terima kasih Ketika Anda pergi ke Asurama.

## 忘れられない18日間

国際教養学部 3 回生 折目 理奈 (りな)



### <はじめに>

私がインドネシア国際ワークキャンプに参加した理由は、2 回生の夏休みに行った東日本大震災のボランティア、秋学期に行った半年間の語学留学などの経験を経て、「もっと海外に行って視野を広げたい!」「もっと誰か人の為になる活動をしたい!」「このワークキャンプに参加してさらに自分を変えたい!」と思ったからだ。

### <日本語班としての学校訪問>

私は担当の班を決める時、迷わず日本語班を希望した。理由は、一番準備が大変そうといわれる日本語班だが、それだけ達成感も得られると思ったからだ。また、日本語を教える、授業をつくるというプロセスも学んでみたかったからだ。しかし、いざ事前準備を始めると、予想通りの難しさであった。クラスによって日本語の認知度なども毎年違うし、レベルが一概に言えないということを知って混乱したが、去年の資料を参考にして、なんとか授業を組み立てた。出発前の班ごとの練習でも、インドネシアの学生がいない、実際目の前に子どもがいないということもあって、みんなイメージをわかすのも難しく苦戦した。

完成形が分からないままインドネシアに到着し、アスラマに着いてすぐにインドネシアの学生との日本語授業ミーティングが始まった。彼らは初めて見たであろう日本語の授業の細かいことも理解してくれて、短時間で英語をインドネシア語に直すなど、一緒になって頑張ってくれた。そして、初めての学校訪問で私達は高校に行った。私達の班は2年生担当だったが、予想以上に生徒た

ちの出来が良く、時間があまるなどのプチハプニングも起きたが、事前に準備していた予備のゲームなどを急遽追加して、また、B班のインドネシアの学生のリアンの大きな助けもあって成功することができた。私たちはアスラマに滞在している間、高校に加えて中学校、看護学校に日本語を教えに行った。どの学校に行った時でも、事後ミーティングや反省点を話していたおかげで、どの授業も成功することができた。

日本語班としての思いが強すぎて、自分の班にも他の班にも行き過ぎた指示をしすぎたことは反省しているが、協力して一緒につくりあげてくれたメンバーたちに感謝する。

今回、インドネシアで日本語を教えて驚いたことが、子ども達の日本語認知度であった。バリ島は観光業が盛んで日本語を勉強する人が多いとは聞いていたが、日本語の授業頻度が高く、意欲的に日本語を学んでくれている学生が多いのがとても嬉しかったし、専門的に学ぶ学生がもっと増えてほしいなと思った。

#### <アスラマでのワーク・交流会>

インドネシアでは多くのワークをした。女子のマディ場を増築するために2メートルの穴を掘り、土台をつくる作業。重機を全く使わないので、スコップで穴を掘る、土や砂利をバケツリレーで運ぶ、セメントを流す、どの仕事もとても大変な作業だったが、新しい女子マディ場の完成を想像すると、達成感のある仕事だった。他には女子でキャッサバイモやカンクンなどの農作物を植える作業をした。日中は本当に暑かったが、労働班の指示でしっかり休憩を取ることができたので、効率よく作業が進み、楽しくワークをすることができた。

次に、私が特に印象に残っていることのひとつが交流会だ。交流会の準備は事前から、交流班指導の下、時間を費やしてたくさんやってきた。ダンスや歌はほとんど完璧だろうというくらい仕上げていくことができた。アスラマで交流会が始まると、子ども達のバリダンスや歌は本当にかわいくて素敵だった。幼い頃から伝統芸能を歌い踊れる

子ども達に感心した。そして、私達日本の学生の歌やダンスだ。どれも成功することができた。特に「ヘビーローテーション」を踊った時は、大変盛り上がり、アンコールなどで子ども達はみんな飛び跳ねて騒いでとても楽しそうに踊ってくれた。「よさこい」も真似して踊ってくれて、鳴子をプレゼントしたら喜んでもらってくれて、その後数日鳴らして遊んでいた。

交流会では、アスラマの子ども達の最高の笑顔を見ることができ、私も心の底から楽しめて、たくさん子ども達と「交流」するという本当の意味で成功することができて、最高の交流会だったと思う。

#### <大好きなホストファミリー>

私はアメリカで半年間ホームステイを経験していたこともあって、インドネシアでのホームステイもとても楽しみにしていた。不安を言うならば、インドネシア語ができないことであった。インドネシア・プリンピンサリ村に到着し、アスラマの子ども達に案内され、一緒にホームステイすることになったみずきとホームステイ先へ。ホストファミリーは私達を温かく出迎えてくれて、会った瞬間にこの人達はいい人達だと分かり、インドネシアでの生活の不安は一気に吹き飛んだ。私達のホームステイ先は、アスラマから5分ほど歩いた所で、ホストファミリーはパパ(父)、イブ(母)、ウィウィ(娘)、おばあさん、叔父さんだ。私達はラッキーだった。娘さんのウィウィは小学校の先生をしていて、英語もとても上手に話せる人だった。だから、インドネシア語をちゃんと勉強していかなかった私達は、指さし本(インドネシア語の単語帳)を使っても単語や簡単な文法しか話せないの、ウィウィに英語で話し、それをパパやイブに通訳してもらう形で話をしていった。ウィウィとは会話も盛り上がり、日本、インドネシアのことはもちろん、将来のことなど本当にいろんな話をした。反省点は、イブやパパにインドネシア語で話せず、会話の数も多くなかったことだ。それでも、パパたちは指さし本を通して、私達のつたないインドネシア語を聞いてくれた。

パパはいつも笑顔で困った時にはすぐ助けてくれる優しいお父さん。パパとはアスラマでいつもワークを一緒にしていたので、過ごす時間が長くて嬉しかった。イブはピサングレン（バナナの天ぷら）などの本当に美味しい朝ごはんを毎日紅茶と一緒に出してくれた。毎日朝起きるのが楽しみだったくらい。教会で伝統楽器を演奏するイブはかっこよかった。ウイウイは優しくてしっかり者のお姉ちゃん。いつもイブと同じくらい私達の面倒を見てくれて、会話を助けてくれた。

私は、ホストファミリーが言ってくれた「私達はインドネシアでのりなの家族だからね。」「ここ（ホームステイ先）は、りなのインドネシアの家だから、いつでも戻っておいでね。」という言葉が胸に響き、一生忘れられない言葉となった。インドネシアでの生活を楽しくすごせたのも、いつも優しい、この温かい家族が居てくれたおかげで、ホストファミリーには本当に感謝でいっぱいだ。

#### <最後に>

18日間は長いようで、本当に短く、夢のような18日間だった。私は、このインドネシア国際ワークキャンプに参加して、数えきれないほどたくさんのお話を学び、感じる事ができた。インドネシアやバリの文化や習慣はもちろん、アスラマの子ども達と生活することで、今まで深く考えたことのなかった福祉のこと。また、グループやチームの一員として活動、行動することの難しさや楽しさ。文章で書ききれないほどたくさんある。どれも、勉強になったことばかりで、もし私がこのプログラムに参加することができなかつたら、こんなにたくさんのお話を学ばずに大学を卒業して社会に出ていたのだと思うと、絶対にもったいないことをしていただろうし、後悔していたと思う。だから、私を成長させてくれたこんな素晴らしい機会をあたえてくれた周りの人々に感謝でいっぱい。私個人、全体ともに、全てが成功したわけではなく、失敗もいっぱいしたが、失敗から学んだこともいっぱいあった。インドネシアで学んだことは、ただの経験で終わらせたくなく、次の何かに繋げたいし、シェアできたらいいなと思う。

また、この経験を生かして、さらに色々なことにチャレンジしたい。

この18日間で出会った多くの人々—インドネシアの学生、ホストファミリー、アスラマのスタッフと子ども達、彼らの温かい笑顔や優しさ、そして、この出会いは一生忘れないし、一生の宝物だ。またいつか、機会をつくってみんなに会いに行きたいと思う。

そして最後に、5月から一緒に頑張ってきたIWC27のメンバー、私達を支えてくれていた先生方やキリスト教センターのスタッフの方々、募金に協力してくれた本当にたくさんのお学生のみなさん、いつも応援してくれる家族に本当に感謝でいっぱい。IWC27の一員として、インドネシア国際ワークキャンプに参加できて、本当に良かった。

## Terima kasih

Rina Orime (Rina)

Pertama-tama saya ingin mengucapkan banyak terimakasih kepada anggota Asrama dan anak-anak, mahasiswa mahasiwi Indonesia dan keluarga Homestay saya.

Untuk ibu, terimakasih banyak karena sudah memasak makanan lezat setiap hari untuk sarapan, makan siang, dan makan malam. saya suka makanan Indonesia!!

Saya juga ingin mengucapkan terimakasih kepada Host Family saya. Bapak, Ibu dan Wiwi menolong setiap hari. Bapak selalu bekerja bersama kami di Asrama, Ibu selalu memberi kami pisang goreng yang sangat enak setiap hari,... dan Wiwi membantu kami berkomunikasi dengan Bapak dan Ibu. Sebenarnya kami tidak bisa berbicara bahasa Indonesia tapi Wiwi

menerjemahkan bahasa Inggris kami ke bahasa Indonesia jadi kami bisa berkomunikasi dengan Bapak dan Ibu.

Terimakasih banyak Wiwi. Mereka memberi kami banyak cinta dan saya tidak akan pernah melupakan kata “Kami adalah keluargamu di Indonesia. Di sini adalah rumahmu di Indonesia.”

Kepada Mahasiswa mahasiswi Indonesia, terimakasih banyak. Saya pikir, kalau kalian tidak bersama dengan kami, kami tidak akan berhasil. Terimakasih untuk segalanya, saya sangat mencintai kalian.

saya tidak akan pernah melupakan 18 hari ini dan beberapa kenangan yang indah di Indonesia. adalah hal yang sangat sulit untuk memikirkan tentang beberapa masalah dan bagaimana cara bersikap di dalam sebuah grup karena ada beberapa pendapat dan cara berfikir yang berbeda-beda.

tapi pengalaman-pengalaman itu membuat saya berfikir lebih kreatif dan hal itu telah mengajari saya tentang pentingnya sebuah kordinasi di dalam grup.

Akhirnya, saya sangat mencintai Indonesia dan orang-orang yang telah saya temui di Indonesia. Terima kasih banyak.

## 感謝

経済学部 2回生 上辻 一毅 (かずきA)



### <はじめに>

まずワークキャンプに携わっていただいた全ての人々に感謝いたします。

私がこのワークキャンプに参加した理由は、つまらない大学生活を変えたい、有意義な大学生活にしたいと思ったからです。そして何か大学生のうちになんかやってないことがしたいと思ったからです。今までの大学生活の中で何もしていなかった私は、このインドネシアワークキャンプを逃したら後悔すると思い参加することを決めました。

### <事前研修>

インドネシアに行くまでに、月曜、木曜日の授業・日本食作り・募金活動・結団式・合宿・ダンスの練習など自分はたくさんの人に迷惑をかけ、不快な思いにさせてしまいました。自分ではがんばっているつもりでも、周りが見えていなかったことに反省しています。しかし先生方、キリスト教センターの方々、ワークキャンプのみんな、募金に協力してくれた人に感謝したいです。とくに募金活動は私があまり参加できなかったのでメンバーのみんなと募金してくれた人には感謝の想いでいっぱいです。

### <インドネシアへ>

関西空港に集まったメンバーは思ったより落ち着いていたと思います。各々違う想いととも飛行機にのり七時間のフライトでインドネシアのデンパサール空港に到着。そこでパリの気候を肌で感じることができました。日本より気持ちのよい

気候で独特の匂いが印象に残っています。バスに乗って移動したが窓から見える景色にびっくりしました。きれいとは言えない街並み、バイクの3人、4人乗り、ノーヘルメットと日本ではありえないところで海外にきたと改めて感じました。これがバリ島なのかとびっくりしたが市街地やホテルはきれいでした。インドネシアの人々は手を振ると振り返ってくれてとてもフレンドリー。文化の違いは人柄だけではなく料理も日本とは違っていました。思っていたより辛いこともなく、とてもおいしかったです。一番驚いた文化の違いは、お風呂でした。インドネシアはお湯につかる文化はなく、水で体を洗うマンディと呼ばれるものでした。お湯になれている私達日本人はマンディになれるまで本当にきつものがありました。

#### <アスラマ>

インドネシアではいくつかのアスラマに行かせてもらいました。ウンタル・ウンタルという、女の子達が共同生活している所や、第5アスラマ、そして私たちが滞在させてもらった第2アスラマと呼ばれる所など。自分のイメージとは違い色んなところが整っていてびっくりしたところもありました。また、これは早く改善しないとイケないと思う部分もありました。長く滞在していた第2アスラマに到着すると子ども達が歓迎してくれました。子ども達はすごくかわいかったです。笑っているのが印象的で人見知りなどしないで話しかけてくれました。私達が何かするときには手伝おうとしてくれたし、子ども達は全ての事を率先してやってくれていました。初めて会う私達をすごく歓迎してくれてとてもうれしかったです。アスラマでは裸足でサッカーをしたり、全力で鬼ごっこをしたりと本気になって遊びました。遊んでいる中で日本の子ども達と何か違うと感じました。私達では立っているだけでも痛いところでサッカーをしたり、転んでも平気だったり育った環境が違うと感じました。アスラマの子ども達は様々な家庭の事情により保護されています。しかしアスラマの子ども達は明るく元気で子ども達は家族と離れて暮らしていて、絶対に寂しいはずなのに常

に笑顔でとても楽しそうでした。子ども達との言葉の壁はあまり感じなかったです。子ども達は自分の現状をしっかりと受け止めて、生活していて日本の子どもとは比べ物にならないぐらいたくましいと思いました。食器洗いや、掃除、部屋の片付けをすべて自分でしていたし、私達よりけじめがついてしっかりしている気がしました。ここにいる子ども達はとても幸せそうでした。日本ほど豊かではありませんがとても幸せそうでした。

アスラマに滞在していた期間はホームステイさせてもらっていました。自分はホームステイが藤村と同じでした。自分も藤村も、インドネシア語が話せなかったため、インドネシア語の本とジェスチャーで伝えるしかありませんでした。ババもイブもとてもいい人で、英語もインドネシア語も片言な僕達の話をしっかり目を見て聞き理解しようとしてくれて、とてもうれしかったです。ホームステイ先には朝と夜しかないなので、寝る前の会話が一日の楽しみでした。ワークで疲れている僕達に気を使ってくれたり、毎朝早くから起きてパンケーキやコーヒーを出してくれたり私達のことを第一に考えてくれて本当に優しかったです。嫌な顔一つ見せずに笑顔でいてくれてとても元気をわけてもらっていました。別れの時はとても寂しかったけど、「インドネシアに来た時はまた来てね」と言ってくれてうれしかったし、絶対にまた会いに来たいと思いました。

#### <ワーク>

このワークキャンプで一番しんどくて、がんばったと言えるのはワークです。今年のワーク内容は新マンディ場が建てられる所の穴を掘ることでした。土は水分を多く含み最初はなかなか作業が進みませんでした。シンプルな作業の繰り返しで体力の消耗が早かったので、無理せずに休憩を多めに入れていきました。私は労働班なのでみんなの体調をうかがいながら進めていきました。最初は作業の効率の悪さから引率教職員ともめてしまう生徒もいましたが、回数を重ねるごとに効率も良くなり引率教職員の方々も手伝ってくれたので少しずつ、進んでいるのが目に見えてわかってき

ました。みんなで掘った穴は1 m50cmぐらいでした。ともしんどかったけど、みんなで一つの目標に向かってやっていたので「やめたい」と思うことは一度もなかったです。

#### <IWC27のみんなへ>

IWC27のみんなには事前研修から迷惑をかけていて、本当に後悔しています。私のインドネシアでの目標は今までに失った信頼を取り戻すことで、インドネシアでは自分なりに頑張りました。みんなと18日間過ごせてとても幸せで、貴重な時間となりました。本当に感謝しています。ありがとうございました。

#### <最後に>

このワークキャンプに参加してとてもいい経験をさせてもらいました。見る景色や体験することすべてが初体験で忘れられない18日間でした。もしこのワークキャンプに興味はあるけれど一歩踏み込めない方がいたら、ぜひ勇気をふりしぼって応募してほしいと思います。

## Terima kasih

Kazuki uetsuji (Kazuki A)

Pertama saya berterima kasih kepada semua orang yang membantu IWC pertama. Saya harus menjaga ucapan supaya Tidak meresahkan warga sekitar. Hal ini karena saya ingin menggunakan alasan itu,karena saya pikir saya akan ke Indonesia.halitu hanya dapat dilakukan di universitas. Saya tahu IWC itu ketika tahun pertama, tapi karena masalah uang saya tidak dapat mengikuti IWC ketika tahun pertama. Aku memutuskan untuk bergabung dengan teman di tahun kedua. Pengalaman IWC hanya bahwa semua kebaikan kepribadian manusia dan Indonesia pemandangan terlihat hanya pertama kali yang tidak dapat dialami di Jepang.

Masyarakat Indonesia dirawat sangat ibu dan ayah homestay orang hanya benar-benar baik. Percakapan setiap malam dan kopi setiap pagi, setiap hari adalah menyenangkan. Saya serius mendengarkan segelintir orang Indonesia. Ada banyak peristiwa dalam 18 hari dau semuanya adalah pengalaman berharga. Semua anggota fakultas terkemuka dan IWC27 adalah orang-orang terbaik yang berpartisipasi dalam IWC. Saya ingin hidup di masa depan memanfaatkan pengalaman 18 hari terakhir. terima kasih

## 未来へ

経済学部 2回生 中井 剛志 (つよし)



#### <きっかけ>

私がこのワークキャンプに参加したいと思ったきっかけは、入学してすぐの必修の授業でIWC25期の方々が作成したパワーポイントを見たことです。感動と衝撃で泣きそうになりました。でも、同時に私も現地に行って子ども達と触れ合い生活することで、実際に目で見て肌で感じ、少しでもこの子ども達のためにできることをしたい、と思い応募を決意しました。ですが、参加の申し込みは早期で、まだ入学したてで大学生活にも慣れていなかったもので、一歩踏み出すことに勇気が出ず諦めてしまいました。それから一年間ずっと後悔し続け、次こそは絶対にと決めていたので応募しました。試験には筆記と面接があり、自分なりに勉強はしたけれど出来は最悪で、面接で気持ちをぶつけるしかないと思ったので、全力で挑みました。参加が決定したときは、すごく嬉しかったです。

### <約3ヶ月の事前活動>

毎週月曜日と木曜日の5限に行われる「インドネシア語」と「インドネシア文化」の研修は、辛かったです。特にインドネシア語は英語とも全然違ってちんぷんかんぷんだったのですが、ちょっとずつわかるようになり、最終回が終わってもう研修がないと思うと、少し寂しく感じました。リーダー、サブリーダー、役割の班を決め、話し合っただけの内容を決め、少しずつ準備をして、調理実習や募金活動、しおり作り、紙芝居作りなどをしました。夏休みの練習は、合宿もあり、交流会で歌う歌の練習や、演技として披露するヨサコイの練習に追い込みをかけ、現地の学校を訪問し日本語を交えた授業をする日本語プロジェクトの練習では、本番が円滑に進むように参加者側と生徒側に分かれ、発表の練習を繰り返しました。参加学生達は、各々行きたい理由も違い、その思いも強いので、意見がぶつかり合うことも多々ありましたが、「子ども達のために…」という全体の目標を掲げたことによって、次第に一致団結していききました。

### <不安だったホームステイ>

パートナーとホームステイ先が発表されました。私のパートナーはインドネシア学生のウェダでした。子ども達に案内されてホームステイ先へおじゃましました。初日は、パパとイブは明るく接してくれたのですが、インドネシア語もろくに出来ないうえ、英語力もないのでウェダの通訳の英語も聞き取れず、会話が全く成り立ちませんでした。次第にウェダ、パパ、イブの3人での会話になってしまい、孤独と不安で泣きそうになりながらその日は早めに寝ました。次の日から、このままでは駄目だと心を切り替え、まずはウェダと仲良くなりたいと思い、私が簡単な英語しかわからないことを伝えると、とても優しいウェダは何度も何度も簡単な英語でゆっくり話してくれて、徐々に打ち解け分かり合うことができました。日が経つにつれて、英語も耳に慣れてきたのか、ジェスチャーやライティングを交えて、実家の話、恋愛の話、ワークキャンプの話など深い会話もた

くさん話すことができました。パパとイブとの会話も簡単なインドネシア語とウェダの協力により、少しずつコミュニケーションをとることができるようになったので、言語の面では特に問題はなかったです。

毎朝パパもイブも私達より早く起きてお菓子と紅茶を用意してくれ、状況に応じて簡単なインドネシア語や英語で話しかけてくれる、本当に暖かい家庭でした。また、ベッドや物干し竿などの設備も整っていて大変過ごしやすかったです。日本食パーティーでは、アスラマでカレーを作って子ども達に食べてもらうとともに、日ごろの感謝の気持ちを込めて、ホームステイの家族を招いて食べてもらいました。パパもイブも「辛い、辛い。」と言いながら全部食べてくれました。

ホームステイの中で唯一辛かったのはマンディです。インドネシアでは、夜はクーラーが要らないほど涼しいので、蛇口をひねるとお湯が出て当たり前の日本で生活してきた私達にとっては、冷たい水を浴びるマンディは、寒くて厳しいものでした。

### <子ども達と触れ合って>

ブリンビンサリ村に着くと、ガムラン楽器での賑やかな演奏や、華麗なバリダンスにより出迎えてくれました。アスラマの子ども達は、交流会などの行事が多いせいか、私達のような団体に慣れているように見えました。とても人懐っこくて、初めてで少し緊張している私にいきなり抱きついてきて、「あれして遊ぼう！これして遊ぼう！」と積極的にはなしに来てくれて、すぐに仲良くなることができました。子ども達の笑顔は何よりも輝いていて、眩しいぐらいでした。その笑顔を何枚もカメラに収めているうちに、子ども達から学んだことがあります。

辛い過去を乗り越えて、今を一生懸命笑って上を向いて生きているまっすぐな子ども達を見て、私が今まで抱えていた悩みや、気にしていたことがすごくちっぽけなことに思え、考えることは大切なことだけど、悩んだりよくよしたりうつむいていても先へは進めないし、辛いことがあって

も笑い飛ばして前向きに生きる方が明るく楽しい人生を送れるんだということを教えてくれました。自分の中では「笑顔」を大切にしていたつもりなので、子ども達にこのことを気づかされた時は、不甲斐ない気持ちでいっぱいでした。それを学んだうえで、「現在」の子ども達を少しでも笑顔にできれば…とサッカー、遊具、折り紙などで精一杯遊び、「未来」の子ども達にその笑顔が続くように、衛生面での指導を行いました。

衛生面で驚かされたことが2つあります。1つ目はマンディで、びっくりするくらいに適当でした。本当にただの水浴びで、こんなじゃ綺麗になるはずがないと思い、頭と体を洗って教えました。2つ目は歯磨きで、アスラマでは歯磨きの習慣がそれ程ないのか、食後やマンディ時に進んで歯磨きをする子ども達は少なかったので、みんなで「コソギギ」（歯磨き）を何度も繰り返して言い続けました。ですが、綺麗じゃない水で歯を磨いたり、イブが歯磨き後にお菓子を配ったりしていたので、私達は改善すべきだと判断し、エヴァリュエーションで問題を提議しました。これらのことが、子ども達にどういった影響を与えるかわからないけれど、この先の子ども達の笑顔に繋がればいいなと思っています。

#### <バニユボ村で見た貧困格差>

私達は、事前研修で「子ども達はどこからきて、どこへ帰ってゆくのか」よく考えるように言われていたのですが、その意味がよくわからないままアスラマで活動が始まりました。

3日後、子ども達の出身村の1つを訪問させてもらうということで、1人の少年を連れてバニユボ村へ行きました。ブドウ畑の奥の一軒の家が少年の家で、一目見ただけで「貧しい」ということは痛いほど伝わりましたが、マンディ場、キッチンなどの説明を受け、私は唾然としてしまいました。水曜日と土曜日の3時間のみ、村に通っているパイプから水が供給され、その水量はおよそドラム缶2杯分です。そのため、貴重な水を浴びるマンディは3日に1回しかできないのです。育てられたブドウはワインの原料となるのですが、地

主が収入の2/3を徴収するため、ほとんど利益はないとのことでした。キッチンも、ガレキだらけで、とても料理できるような見えませんでした。けれど、貧困に苦しんでいるのにもかかわらず、多子制で子どもは10人以上いると聞いた時は、理解に苦しみました。

アスラマに行くことで家族と離れて暮らすということは、やっぱり子ども達にとって寂しいだろうなと思いますが、ここでの生活に比べ、アスラマでの生活はとても良い環境なので、貧困に困っている家の子ども達が少しでも多くアスラマに行くことができるようになればいいなと思っています。

アスラマの子ども達がこんな所から来ているんだということを知る良い経験になりました。そして、またここへ帰ってくるのではなく、子ども達は、学校で勉強して、良い職業に就くことで自分たちの「帰る場所」を少しでも豊かにしていくべきであると思いました。

その後、すぐ近くの地主の家で休憩をとることになったのですが、そこでは私達が食べきれないほどのお菓子や果物、飲みきれないほどのジュースでもてなしてくれました。同時に、どうしてすぐ近くの2軒の家にこんなにも格差があるのだろうと疑問が浮かびました。それほど豊かなのであれば、ブドウの収入を2/3も徴収しなくても暮らせるだろうし、そうすれば、貧困に困っている人々も少しは楽な生活ができるようになるのに…と少し悲しい気持ちになりました。

#### <汗水流したワーク>

私は労働班だったため、ワークは特に頑張ろうと意気込んでいたのですが、想像をはるかに超えてしんどかったです。ワークは男女に分かれ、最初の作業は荒地の開拓で、幅80cm深さ60cmの溝を決められたとおりに掘るのですが、足場が悪く土も固いためかなり重労働でした。それが終わると、今回のワークで最も時間と体力を費やした、新マンディ場の基礎工事（縦約3m、横約5m）に取り掛かりました。この作業と平行して、ネコ（砂を運ぶための一輪車）を使っての砂運びやリレー

方式で石運びなどもしました。炎天下で暑い中、最も効率よくワークができるように、3チームに分けたり4チームに分けたりと試行錯誤を繰り返して、ローテーションでこまめに休憩をとるように心がけました。序盤は順調だったのですが、中盤から土の質が粘土質になったので、掘りにくく作業のスピードは落ち、体力の消耗が激しくなりました。ですが、次第に農具を上手く使うコツをつかみ、作業を進めていきました。終盤に差し掛かったところで、掘れば掘るほど水が出てきて、心が折れそうになりましたが、「子ども達のために…」と必死に歯を食いしばりました。そしてワーク最終日、時間の加減で2mには到達できず悔しかったけれど、みんなが協力し全力を出し切ったので心残りはないです。今回私達がしたのは基礎工事だったので、どのようなマンディ場が出来上がるのか楽しみです。

#### <始まり>

アスラマの子ども達や関係者、インドネシアの学生、ホームステイの家族、ワークキャンプで出会った全ての人々とのお別れは、とても辛いものでした。しかし、これは終わりではなく始まりだと思っています。今回私達がこの18日間で子ども達のためにできたことはほんの少しでした。ですが、多くのことを学ぶことができたので、それを活かして子ども達のために何かできることを、続けていければ良いなと思っています。

最後に、このワークキャンプはとても良い経験ができたので、もし興味があるけれど勇気が出ないという人は、是非一步踏み込んで応募してほしいと思います。

## Terima kasih

Tsuyoshi Nakai (Tsuyoshi)

Pada awalnya, aku cinta Indonesia.

Karena, jalanan Indonesia yang bersih, orang-orang lucu karena sangat baik.

Saya bertemu dengan orang-orang ramah di pertemuan pertama, dan saya sangat senang bagi saya malu.

Sangat terang, energik anak karena ada banyak anak-anak Asurama, itu sangat menyenangkan. Jika Anda bermain dengan mereka. Selain itu, saya terkesan jika Anda sendiri untuk kecil, karena hidup teratur.

Saya silau senyum kalian cukup bersinar. Saya berharap bahwa senyum diikuti.

Dan bahkan jika aku memecahkan piring kaca dan saya sengaja, Eve kami telah membiarkan dia tertawa dengan "Jangan peduli". Apa yang tidak makan banyak di Jepang, beras yang sangat lezat. Aku melihat kebesaran kalian dan senang untuk membantu.

Ayah dan ibu homestay saya berpikir seperti "keluarga kedua saya." Itu benar-benar baik homestay lembut seperti kalian. Selain itu, saya pikir saya ingin mengunjungi. Silahkan untuk memiliki perawatan yang sehat dan mengambil diri sendiri.

Bagus, Rai, Rian, Ayu, Weda

Aku mencintai kalian. Jangan lupa bahwa kita. Ini adalah teman berharga.

Saya diselamatkan berkali-kali kebaikan kalian. Selain itu, saya pergi untuk melihat. Terima kasih bimbingan pada waktu itu. Silahkan datang untuk bermain di Jepang tentu saja. Saya akan memperkenalkan banyak kebaikan. Kami menantikan hari ketika Anda bertemu lagi, masuk

Saya ingin mengucapkan terima kasih kepada semua orang yang telah terlibat di kamp kerja. Terima kasih semua!

## あたたかい人たち

社会学部 2 回生 中本 后紀 (みき)



### <きっかけから出発まで>

私がワークキャンプに参加したきっかけは、私の所属しているサークルの先輩方からワークキャンプについてのたくさんの話を聞かせてもらい、純粋に「行ってみたい」と思ったことが始まりだった。しかし、参加しようかしまいか悩んだ時期もあった。最後に背中を押してくれたのは、とあるフォトジャーナリストの講演会で聞かされた言葉だった。私達が住む日本よりはるかに貧しい地域で暮らしている子ども達が笑っている写真を見せながら彼（フォトジャーナリスト）は言った。「なぜこの子達の笑顔が素敵なのか。笑顔の背後にあるものを考えてほしい。」と投げかけられた。この言葉が私のワークキャンプ参加への最後の一押しだった。「行ってみたい」が、この頃から「子ども達に会ってみたい」という気持ちに変わったのである。だが、この思いは子ども達のためではなく自分の「知りたい」という欲求を満たしたかっただけで、子ども達のことを心の底から思えてなかったと夏休みの準備期間中に気づかされた。この日から無理に答えを見つけようとする思いから、子ども達と関わり合い、少しでも子ども達の生活に溶け込められたらいいなという思いに変わった。参加したいと思った時から気持ちや思いがコロコロと変わってしまったと思ったが、今思えばこの全ての気持ちや思いは、スタートである「行きたい」の延長線上にあったもので、変わったのではなく増えたのかなと思った。インドネシアに行くまでは「早く行きたい」という衝動と「インドネシアでやっていけるかな」という不安でインドネシアに着くまでは浮き足立って

た。

### <あたたかい人たち>

プリンビンサリ村にある第2アスラマに着くと、アスラマで暮らす子ども達が私達を快く迎入れてくれた。今まで小さな子どもと接する機会がなかった私は、すごく緊張していて不安だったが、そんな私を気にすることもなく子ども達は私の名前を覚え、私を見つけた時は「みき！」と名前を呼んで抱きついてきたり、手を繋いできたりと私はそれだけで幸せで笑顔になった。そして、不安もいっきに吹き飛んだ。子ども達の笑顔には大きな力があつた。ワークで疲れていた時、悩んでいた時に隣にちょこんと座ってくれるだけで癒されて、ほっとして、言葉にするのは難しいけれど心があたたかくなった。子ども達がいたからこそ乗り越えられた時があつて、子ども達の存在に大きく助けられた。私を助けてくれたのは子ども達だけではない。アスラマにいるイブ達、スタッフの方々にもたくさん助けられた。イブ達は忙しい中、私達のご飯を作ってくれて、私達がワーク中には水やお菓子を用意してくれて、イブ達なくては成り立たないワークキャンプだった。スタッフの方々も、私達が活動しやすいように環境を整えてくださった。そして、ホームステイとして私達を受け入れてくれたパパとイブも私の支えとなる大きな存在だった。家には寝に帰るくらいだったのに、帰るといつも笑顔で迎え入れてくれて、家を出る時も笑顔で見送ってくれて、いつからか自分の家にいるみたいに安心できる場所になっていた。それから、プリンビンサリ村の人たちもとても気さくな人たちで「スラムッ バギ (おはよう)」と言うと笑顔で挨拶を返して、挨拶することが楽しくなってきた。ここでの生活は誰かに助けられ、支えられた生活だった。何気なく繋がれた手もおいしいご飯も笑顔も挨拶もすべてがあたたかかった。

### <バニユボ村>

数日経った時にアスラマにいる子ども達の出身村であるバニユボ村へ訪問した。草や木が多

く、家畜である牛や鶏、豚がいて、まるでジャングルのような村だった。「ここで暮らしていけるのだろうか」と思うてしまうほど貧しい環境で暮らす家族がいた。だが、パニユボ村で暮らしている人たちを見ていると、とても元気で笑顔で「貧しい」と思えないように感じた。私が「貧しい」と思うてしまったのは、無意識に自国である日本と比べてしまったからである。この日、私は「幸せとは何だろう」と思った。衣食住が整っていたら幸せなのだろうか。私達の生活よりも貧しくて食べていくのにギリギリかもしれないけれど、私達よりはるかに幸せそうに生きている人達がそこにはいたのである。生活するのに苦勞がなければ幸せではないと感じた。私は幸せに基準や定義はないと思うが、国や地域によっては違いが出てくるはずだ。その違いは文化の違いなのだろうか。他国の文化を自国の目線で見ってしまうから「貧しい」と思うてしまうのである。文化は比べるものではないのである。偏った見方がなければ、パニユボ村の人達をもっと違う視点から見る事ができたかもしれないと思った。私はこの時、上記で述べたフォトジャーナリストの問いかけを思い出した。私なりに問いかけの答えを考えた。それは、家族や友人、仲間といった誰かと共に生きているから「笑顔」でいられるのではないだろうか。誰かがいないと人は、笑うことも泣くことも怒ることもできないのである。パニユボ村の人達には貧しくて家族や友人がいて、アスラマの子ども達には家族と暮らすことができなくても友人やイブ達がいる。講演会で見た子ども達にも家族や友人、誰かがきつといたから笑顔だったのだろうと思った。そして、何よりカメラ越しに笑いかけてくれた、フォトジャーナリストがいたから笑っていたのかもしれないと思った。誰かがそばにいる、一人ではない、これだけで幸せなのではないだろうか。「誰か」の存在を大切にしていきたいと思った。私が出した答えは安易で間違っているかもしれない。だが、この問いかけに答えはないと思うので、自分なりに考え出したこの答えを大切にしたいと思う。そして、ここで終わるのではなく考え続けたいと思う。パニユボ村では、私が疑問

に思っていたことを考える良い機会になった。

#### <一泊保育>

プリンビンサリ村での生活に少し慣れてきた頃、毎日お世話になっているアスラマでの一泊保育を希望することにした。夜は子ども達と一緒に寝て、朝になると起きるという子ども達の生活に交わらせてもらい、そして、いつもお世話をしてくれるイブ達の手伝いをした。まず、子ども達と少しの時間を過ごして感じたことは、小さい子は大きい子を見て行動しているということだ。この光景を見た時に私の行動一つ一つも見られているのではないかと思った。誰かに見られているという意識をつける良い経験になった。そして、今までの行動を振り返る良いきっかけとなった。朝、起きてからはイブ達が作ってくれる朝ごはんの手伝いをした。私達が手伝っていてもイブ達は忙しそうにほかの仕事をしていた。イブ達のこんな姿を見て感謝の気持ちを忘れてはいけないと思った。たった一泊という短い時間だったが、とても濃い時間を過ごせた。

#### <言葉>

私達はインドネシアに行く前に事前研修としてインドネシア語を少しだけ学んで行った。結果的に言うと、現地に着いても私は単語しか言えなかったり、ジェスチャーをしたりと勉強したにも関わらず全く覚えていなく悔しい思いをした。自分の気持ちを伝えたいのに伝えきれずもどかしい思いをしたが、どんな方法であれ気持ちが伝わった時は嬉しかった。特にインドネシア語が伝わった時は、笑顔がとまらないほど嬉しくて仕方がなかった。インドネシア学生には本当に迷惑をかけてしまったが、いつも耳を傾けてくれて理解しようとしてくれて嬉しかった。ホームステイでお世話になったパパとイブに手紙を書く時も手伝ってくれたり、日本語授業で行うゲームなどの説明をわかりやすくアレンジを加えてもらったりして、彼らなしでは乗り越えられなかったことがたくさんあった。困ったのは、日本語授業のためのミーティングの時だった。私はインドネシア語はもちろん

ん、英語も全く話すことができず、ただただ黙り込むことしかできなくて同じチームの人達には迷惑をかけてしまった。あの時ほど語学を勉強しなかった自分を恨んだことはなかった。この18日間で自分の気持ちを伝えることの大変さと相手に伝わった時の感動を味わうことができた。

#### <後悔>

この18日間はたくさんの後悔の繰り返しだった。その中でも一番後悔したことは、インドネシアを十分に理解していなかったことだ。インドネシア語は単語でしか話せないから子ども達が話しかけてくれても何を言っているか分からず、困った顔をするしかなく、そして、子ども達にも困った顔をさせるしかなかった。インドネシアでは左手は不浄の手と言われ左手を使ってはいけないのである。だが、私は無意識に使っていて不愉快な思いをさせてしまった。学んだ語学とインドネシアのマナーやタブーは頭の片隅にでも意識的に置いておかなければならなかったのに忘れてしまっていたのである。訪れる国のことを理解することは礼儀だと思っていたのにできていなかったのである。この後悔を次の機会に活かせるようにしたい。

#### <最後に>

私は今回、18日間という長い様でとても短い時間を過ごした。その中の13日間を子ども達と過ごすことができた。子ども達と出会ったことで、また私の知らない世界の一部を見ることができ、感じることもできた。そして、プリンビンサリ村では日本で感じることでできないあたたかさを感じることができた。また、普段から考えない様なことに対してまっすぐに見つめることのできる素晴らしい時間を過ごすことができた。

春から準備が始まり、インドネシアで活動し、あっという間に報告書を書いている。時間が過ぎるのが早く感じる今日この頃、ここまで頑張ってきたのも仲間がいたからだと思う。誰かができないことを皆でカバーし合えたからだと思う。そして、私達が活動しやすい環境を整えてくださ

った先生方やスタッフの皆さん、本当にありがとうございました。いつになるかはわからないがまたインドネシアで、プリンビンサリ村で出会ったあたたかい人たちに会いに行きたいと思う。会いたい気持ちを忘れずに次の一步を踏み出したいと思う。

今まで私に関わった全ての人に感謝します。ありがとうございました。

## Terima kasih

Miki Nakamoto (Miki)

Apa kabar? Saya baik-baik saja!

18 hari, terima kasih. Saya dapat pengalaman yang baik. Saya tegang untuk pertama kalinya di Indonesia. Tapi saya bisa bertahan berkat orang-orang yang baik.

Saya bisa menemukan dan merasakan banyak hal dalam keterlibatan anak-anak. Saya senang telah bertemu dengan anak-anak. Saya mau bertemu lagi. Dan Ibu membuat makanan enak. Terima kasih, Ibu yang telah mendukung kegiatan kami. Aya dan Ibu homestay telah melakukan kontak dengan saya dengan lembut. Saya senang sekali. Seperti benar-benar keluarga yang nyaman dan baik. Terima kasih, mahasiswa Indonesia yang telah mendukung kami sepanjang waktu. Saya tidak bisa banyak hal jika bukan karena mereka. Menyenangkan sekali dengan mereka. Saya terkesan dengan orang-orang yang hangat dari Indonesia. Saya ada dipenuhi hati yang bersyukur.

Saya menjadi tau sukacita dengan orang-orang. Orang-orang yang bertemu di Indonesia mengajarkan saya sukacita. Saya tidak bisa selalu ucapan. Tapi ucapan menyenangkan di Indonesia. Dan saya bisa menghabiskan waktu saya dengan tersenyum. Saya perhatikan tersenyum ada kekuatan besar. Jadi saya tertawa

setiap hari. Saya pikir saya mau mengucapkan terima kasih masalah tentu saja. Itu 18 hari terima kasih terus menerus.

Ada juga waktu yang sulit. Tapi saya bisa mengatasi. Karena anggota IWC27th. Terima kasih.

Saya mau pergi lagi ke Indonesia. Dan saya mau berutemu orang-orang yang saya kenal di Indonesia.

Terima kasih.

## 学ぶということ

社会学部 2回生 石井 彩奈 (なっぺ)



### <はじめに>

私がこの国際ワークキャンプ（以下IWC）に参加した理由は、海外に興味があったからである。ただ、海外に行くだけなら旅行や他の国でも良いのかもしれないが、私は海外に行って自分でも何かやれることがあるのではないかと、一度海外へ行って見て、そこでは何が求められているのかをこの目でしっかりと見ておきたいと思い、説明会へ行き、この思いを果たすことができるのは、IWCしかないと考え、参加を希望した。

### <事前研修・事前準備>

事前研修は、週2回5限目にキリスト教センターの集会室で行われ、インドネシア語やインドネシアの歴史や政治、文化などインドネシアに行くにあたって基本的なことを学んだ。そして、毎週インドネシアの言葉や文化を学んでいくたびに、新しい情報が次々に入ってきて、覚えたと思ったら今度は覚えたことが新しい情報に押しつぶされ

てなくなりそうになってしまい、「こんな状態でインドネシアに行っても大丈夫だろうか」という不安でいっぱいだった。しかし、せっかく行かせてもらえるのだから、やらねばならない、やるしかないという思いで毎回の事前研修に参加していた。

事前準備では、インドネシアで行う交流会の準備や日本語授業の準備をした。しかし、学部も違えば学年も違う学生が揃って練習や準備をすることはなかなか難しく、準備が進まないことも多々あったが、事前研修後や事前準備の時間に、お互いがお互いに足りない部分を教え合うことで、日本でのチームというものができてきたのではないと思う。

### <チーム>

IWCへの参加の合格発表がされ、初めての事前研修が終わったあと、親睦会が開かれた。

私は、友達と一緒に参加を希望したわけではなく、周りにはほとんど知らない人ばかりで、知っていてもちゃんと話したことはない人ばかりで、正直あまり仲良くなることはないだろうと思っていた。

そして、「今日からチームとしてがんばろう」という先生方の言葉に私は、チームってどんな形のものを用いるのだろう、どこまでの範囲をチームと呼べばいいのだろう、チームになるには何をしたら良いのだろうと考えた。そんな時、先生方から「報告・連絡・相談（通称ホウレンソウ）」が重要ということを知り、私はそこからチームの形ができてくるのではないかと考えた。報告や連絡、相談がなくては、日本の学生も先生方も事務の方も何をしたらいいのか、今自分たちがどの準備段階にいるのかもわからなくなってしまうのではないかと考えたからである。しかし、最初から言われ続けていたこのホウレンソウがなかなか守られず、チームとして成り立っているのだろうかと思う日もあった。さらに、日本で活動を進める中で、なかなか進めることができない焦りと苛立ちでチームが乱れているように感じる時もあった。そのたびに、話し合いの場が開かれ、なんとか日

本でのチームというものを保つことができたが、この状態でインドネシアの学生やアスラマのスタッフの方が加わっても大丈夫なのかという不安はあった。インドネシアの学生やアスラマのスタッフは私達に沢山話しかけてくれたおかげで、情報交換をすることはできたと思う。しかし、いつも私は向こうから話しかけてくれたことに答えるばかりで、自分から話しかけるということではできていないことに気づいた。そのことに気づいてからは、なるべく自分から話かることを心掛けたが、インドネシア語も英語も沢山話すことができない私は、覚えている限りのインドネシア語と英語と身振り手振りでも何とか必要最低限のことを伝えるしかできなかった。もっと、言葉を喋ることができたら、より仲間と感じながら一緒に活動ができたのではないかと思った。

#### <アスラマの子ども達>

アスラマ（児童養護施設）の子ども達は明るく元気な子が多かった。アスラマの子ども達は、様々な理由で親と離れて暮らしているのだが、それでも子ども達は私達と共に遊んだりして笑顔を見せ、アスラマで暮らしていた。

私達は、アスラマにいる子ども達の何人かの出身地であるパニユポ村という村を訪問させていただくことができた。私は、子ども達がもともと暮らしていた村がどんなのか想像もできなかったので、パニユポ村を訪れたとき、衝撃を受けた。今まで見たことのないブドウの木がたくさん植えられていることにも驚いたが、そのことよりも、生活で使う水は1週間に2日、3時間だけ運ばれてくるだけで、普段は雨水を貯めて自分達の生活や家畜を育てるために使われているということに大きな衝撃を受けた。そして、パニユポ村で暮らしている人々もアスラマにいる子ども達と同様に笑顔で暮らしていた。私は、なぜ笑顔でいられるのか分からなかったが、パニユポ村を訪れたことにより、一つの考えが思い浮かんだ。それは、私達の幸せや豊かさはお金を多く持っていることだが、パニユポ村の人々や子ども達は、お金ではなく、生活を送ることができるということ自体が幸

せなのではないだろうかということである。また、アスラマにいる子ども達はそのことに加え、毎日ご飯を食べることができ、きれいな水で体を洗うことができ、学ぶことができることが笑顔の源となっているのだろうと思った。

私は、アスラマの子ども達と一晩一緒に寝る（児童養護施設で泊まる）ことができた。私が一緒に寝させてもらう前日にも同じ部屋で他のIWCメンバーが泊まっていたので、子ども達も一緒に寝ることに対しては抵抗がないようだった。そして、私が子ども達の部屋に入ると、一緒に就寝前のお祈りをさせてもらい、インドネシア語で書かれてある聖書の文を丁寧に教えてもらいながら読ませてくれて嬉しかった。また、子ども達は寝る直前でも、学ぶことや絵を描くことや歌を歌うことに喜びを感じていて、いつかこの喜びの先に将来の夢を見つけ、その夢に向かって、いつもの笑顔で頑張ってほしいと思った。そして、これから先も日本で募金など可能な限り携われるものには携わろうと思った。

#### <ワーク>

私達は、アスラマを訪問している13日間の間に、男子はアスラマの女子マンディ場を造る作業を進め、女子はアスラマの草刈や畑や田んぼに食物を植える作業をした。作業をするときは、男女共に前半に作業を進める組と後半に作業を進める組とに分けて作業を進め、交代をしている時間を休み時間とすることにした。

女子は、比較的軽い作業を進めることができたので、体力的にも時間的にもまだ余裕がある状態だったが、男子はマンディ場を建てる前に穴を人力で掘り進めていくという重労働を何時間も何日間もしており、前半組と後半組が交代している間のわずかな休み時間の間に体力を何とか回復させることがやっとのここのように見えた。一方、女子は自分達の作業を終え、一休みしてから男子が作業を進めている場所まで土運びの手伝いをしに行くなどして、協力してワークを進めることができたと思う。また、一緒に働くことだけが協力的ではなく、同じ活動をする者として、相手を

思いやって行動を起こすことも協働という言葉の一つなのではないかと思った。そして、マンディ場は私達が訪問している間には完成はしなかったが、一緒に働くことで未完成でも一緒に何かをすることができたという喜びをワークの最終日には分かち合えることができたような気がした。

<最後に>

私は、このIWCに参加して正直毎日が不安で仕方なかったが、インドネシアに行き、初めて見るもの、初めて経験するものがたくさんあって、いい刺激をたくさんもらった気がする。私達がアスラマへ行き、子ども達の日常にお邪魔させてもらって、元気な笑顔とワークをさせてもらった。このことは、小さな事かもしれない。もしかしたら、子ども達やスタッフは私達IWC27のことは忘れてしまうかもしれないが、写真として、ワークをしたという物的なものとしては、しっかりと残り続けていくことは間違いない。私は、IWCに参加する前から机で学ぶことだけが学びではないと思っていたが、「じゃあ活動することで学べるものって何？」と聞かれたら、以前の私は答えられることはできなかったと思う。しかし、今全く同じことを聞かれたら、私は自分の目で見て、感じて、それについて考えることが学びだと答えると思う。おそらく、活動することでの学びに正解はないと思う。活動を進めていくなかでたくさんの方の反省点はあるが、良い点も悪い点もIWCに参加することができたからこそ見つけられた自分の視点なのではないかと思う。そして、このことは私一人では見つからなかったと思う。引率教職員の方々、日本の学生、インドネシアの学生、アスラマのスタッフの方々が私を成長させてくれた。

インドネシアに滞在した期間は1か月もない短い期間だったが、インドネシアの方々はインドネシア語も英語もろくにしゃべれない私達を温かく迎えてくれて、笑顔で声をかけてくれたおかげで、この18日間を元気に過ごすことができたのだと思う。

心からこのIWCで出会うことのできた人々に

感謝します。

Terima kasih

Ayana Ishii (Nappe)

Saya merasakan kehangatan dari orang-orang untuk pergi ke Indonesia.

Ketika itu sampai ke Asurama, staf anak Asurama menyambut kami.

Tidak hanya orang Asurama, menuju desa-desa, orang-orang dari keluarga juga saya untuk tersenyum kepada kami, kadang-kadang saya peduli dengan kondisi fisik kami.

Berkat kebaikan dan tersenyum, kami dapat menerima semangat, dan melakukan kegiatan sehari-hari.

Dan saya berpikir bahwa hal itu mungkin hanya untuk kegiatan sehari-hari, apa yang bisa dianggap dan itu lahir.

Entah bagaimana sampai sekarang,aku telah dikirim setiap hari, hal itu mungkin dengan berpartisipasi dalam IWC, kita mempertimbangkan makna kegiatan sehari-hari.

Mungkin, jika saya tidak berpartisipasi dalam IWC, bahkan tanpa berpikir, aku mungkin telah menjaloni hidup entah bagaimana seperti biasa.

Setiap kegiatan, hanya diisi dengan orang-orang yang pucat, mungkin tidak pernah merasakan apa-apa.

Hal-hal seperti pekerjaan kami mungkin anak kecil, mampu tapi saya pikir, tumpukan kecil dan mungkin menjadi berdampak besar pada masa depan anak-anak.

Dan saya pikir kegiatan ini yang Anda inginkan dan pergi diikuti di masa depan.

Selain itu, halini memberi saya kejutan besar untuk kehidupan yang baik sampai sekarang ini yaitu 18 hari saya untuk bekerja sama dengan

anggota, saya pikir keduanya.

Tentunya, saya berpikir bahwa itu mungkin bisa di dapatkan dari anggota ini, hal yang tidak bisa menjadi hal yang bisa membuat saya satu-satunya.

Akhirnya, terima kasih tulus kepada semua orang lain yang terlibat dengan saya dalam kegiatan ini.

Terima kasih.

## 学び、出会いに感謝

社会学部 2回生 丸野 朝陽 (じゃすみん)



私がこの国際ワークキャンプ（以下IWC）に参加しようと考えたきっかけは、いたって単純である。入学後のオリエンテーションで見たVTRに感動したから、ただそれだけだった。直感的に行きたいと感じた。大学に入学し浮足立っていた私は、「福祉学科に入ったからにはボランティアをしよう、しかも海外！」本当にこのような簡単な気持ちだった。しかし、私はチアリーディング部に入部し、他の部員に後れを取りたくない思いが強くなり、この年のIWCに参加することを断念した。

一年後、また同じ季節がやってきた。私は部活の主将になることができ、そして、私の気持ちは変わっていなかった。やはりIWCに行きたい、そう思い参加を決意した。

### <事前研修>

沢山の人がこのIWCを希望し、そして今のIWC27のメンバーが選ばれた。他のIWC希望者達の思いを背負って始まった。最初はまとまりが

なく、私自身も人見知りであり話すことができなかった。行ったことがない国、習うまで知らなかった言葉、文化、何を準備していけばいいのだろう、そこで本当にこのメンバーで大丈夫かな、そんな沢山の不安を持っていた。情報の少ない中で、私はインドネシアで何をすべきなのかを考えた。

いろいろなことを振り返り、面接の時に私が言った事、思ったことを思い出した。私は自分の性格があまり好きではない。そんな自分を変えたい、IWCを通じてインドネシアの方々に日本の事を知ってもらい、そして自分自身も成長したいと思っていた。しかし、それは自分の為でしかないという言葉で私は考え直した。そして自分の成長も大切だが、子ども達の為、インドネシアの方々の為、IWCみんなの為に何かすることを意識するようになった。研修や準備に参加できなかった時は、他の事はできるように動くようにした。

事前の段階で色々考えさせられながら、私は期待と不安を抱いてインドネシア、バリへ旅立ったのであった。

### <インドネシア学生、引率の方々>

バリに訪れた最初の日に会ったのが、インドネシア学生と共に行動して下さる引率の方々である。引率の方々には困ったことがあれば相談してみたり、何か困ったことはないかと心配していただいたり、最後まで沢山お世話になった。インドネシア学生に対して、最初は英語もインドネシア語もできない私はどのように話したらいいのか、話し出すきっかけを探していた。しかし、一度話し出せばカタコトの英語、インドネシア語でも理解してくれようと一生懸命聞いてくれる優しい学生ばかりだった。私自身もわからない言葉を辞書で調べ、ジェスチャーを使い話すことが楽しくなり、もっと話したい、言語を学びたいと思わせてくれた。しかし、私は英語が少ししか分からないので、分からない単語が出てくると会話が途切れてしまった。言葉の壁がある事を痛感した。ここで思った事は、もっと事前にインドネシア語を沢山学んでおけばよかった、という後悔だった。次

に会うときはもっと沢山話ができるように勉強をする必要がある。

#### <子ども達>

プリンピンサリ村で初めて会った子ども達は、言葉の通じない私に素敵なお笑顔で接してくれた。子ども達とも言葉の壁はあったが、子ども達はそんなことはお構いなしに私達に話しかけて、たくさんのお話を教えてくれた。言葉の壁を壊して、私をこんなにも幸せにしてくれる子ども達に私は救われた。しかし、そんなお笑顔のなかに、時折見せる悲しげな表情が私の心から今でも離れない。アスラマのある少女が私に問いかけた。「あなたには友達がいるの？あなたには家族がいるの？」そう悲しげな表情で問いかけられ私は戸惑ってしまった。私よりも遥かに幼い少女に悲しげな表情をさせ、このような問いかけをさせた彼女の過去が気になったが、聞くことができなかった。彼女とは日が経つにつれて次第に仲良くなり、いつも見かけたら声をかけてくれ、最後に「ベストフレンド」と言い合いアスラマで別れた。私が彼女に何かを与えられたかはわからないが、私は彼女に沢山与えられ考えさせられた。もし彼女の心に私が良い思い出を残しているのなら、とても私は幸せに思う。子ども達の為に何かできることを、と思い私達は日本を旅立ったが、沢山の事を学ばせてくれ、与えてくれた子ども達に感謝の気持ちでいっぱいである。この出会いを今回のIWC27だけで終わらせたくない。日本に帰ってきた今でもそう強く思う。

#### <ババ、イブ、バリの人々>

私達のホームステイ先のババとイブはインドネシア語しか通じなかった。ババもイブもとても優しくだったが、ここでも言葉の壁が立ち上がった。毎日単調な会話をしていたが、このままではいけないという思いがあり、日本から持ってきたインドネシア語の指差し本にとらめっこしながら必死に話した。毎朝イブは早くに起きて、バナナを揚げたお菓子のピサングレンと、砂糖のたっぷり入った甘いお茶のマニステを出してくれた。

夜、ミーティングで遅くなくても寝ないで待っていてくれた。言葉が通じなくてもそんなババとイブのもとでホームステイをできてよかった。

バリの人々はとても気さくで、目が合えばにっこり微笑んでくれ、すれ違えば手を振ってくれ、話しかけてくれる。日本ではそんな人に出会うことはとても少ない。そんな明るくて、優しく、少しおせっかいなバリの人々にとても惹かれた。

#### <アスラマのイブ達>

私達のアスラマでの生活を毎日支えてくれたのはイブ達であった。子ども達の世話をすることもあの人数では大変なのに、私達に毎日、朝、昼、晩と食事を作って下さった。イブ達と会話をしているうちにイブ達の毎日の生活が気になり、食事を作るお手伝い、掃除のお手伝いを積極的にすることを心がけた。忙しい中私達に食事のつくり方を教えてくれた。お泊りの日には3時に起き、イブの食事のお手伝いをしに行った。イブ達に名前を覚えてもらい、抱きしめてくれたときは本当に嬉しかった。イブ達の支えがあってこそこのIWCの成功であった。ありがとうございました。

#### <バニユポ村>

バニユポ村はこれまでのバリ島生活の中でのなかで、最も大きなカルチャーショックを受けた。私達のこれまでの生活、価値観を覆すものであった。バニユポ村の中でも各家庭の格差はあった。水の供給も少なく、雨水をため生活用水にしたり、家畜を育て売ったり、生活に必要な物事を切り詰めてバニユポ村の人々は毎日を大切に生きていた。毎日日本で何も感じず生きてきた私が恥ずかしくなった。

#### <最後に>

日本にいると分からないことが身を以て実感できた。日本は先進国であり恵まれている。蛇口をひねればきれいな水が出てくるし、お湯も出てくるし、トイレも水洗が主流である。何でも手に入り非常に便利である。だが、だからといってインドネシアが恵まれていないわけではない。日本よ

りは便利ではないかもしれないが、私はインドネシアのゆったりとした時間の流れが大好きだ。確かにお湯も水もほしいものもすぐには手に入らないが、その分もの大切さを彼らは私達より理解していた。日本での生活をもっと見直して、日々を大切に生きなくてはと感じた。日本の物事を当たり前と思わず、もっと世界を知りたい、IWCは私にそう思わせてくれた。私に成長する機会、私の人間としての幅を広げてくれた。

## terima kasih

Maruno Asahi (Jasumin)

Apa kabar? Saya Baik-baik saja.

Terima kasih atas 18 hari.

Terima kasih banyak setiap orang yang terlibat dalam IWC27.

Saya gembira sekali bertemu dengan anda sekalian.

### <homestay Bapak, Ibu>

Saya tidak mungkin untuk Indonesia. Tapi, bapak dan ibuku selalu mendengarkan cerita saya. Bapak dan ibu dapatkah Anda berbicara perlahan Saya suka bapak dan ibu. Saya senang dan menjadi lembut. Bapak dan ibu sedang menunggu kami sampai larut setiap malam. Ibu membuat pisang goreng setiap pagi. Ibu membuat pisang goreng yang paling lezat. Saya suka bapak dan ibu.

Senang melihat saya bapak dan ibuku!!!

### <anak-anak>

Saya sangat senang bahwa aku melihat senyum anak-anak. Saya senang dengan senyum anak-anak. karena Senyum hambatan bahasa hilang. Aku berada di pikiran banyak. Saya pikir banyak hal kepada anak-anak. Saya berterima kasih kepada anak-anak.

### <mahasiswa Indonesia>

Mereka juga mengajari saya banyak hal. Saya tidak bisa bicara banyak pada awalnya bahasa Indonesia. Karena mereka mengatakan kepada saya perlahan-lahan, Itu bahkan mampu memahami hanya satu sedikit. Saya suka, Percakapan dengan mereka menyenangkan. Menyesal bahwa saya tidak bisa memahami bahasa Indonesia. Aku ingin bicara lebih banyak waktu berikutnya yang saya lihat.

Banyak terima kasih Ayu, Rai, Weda, Riant, Bagus. Saya suka kalian. saya tidak pernah lupa.



## 報告書

経営学部 2回生 藤村 知憲 (とーそん)



### <はじめに>

ワークキャンプに参加しようとしたきっかけは、友人に見せてもらったパンフレットの束の中に偶然あって、単位がもらえるし行ってみようという軽い気持ちで事前説明会に行ったことでした。そこで見たプレゼンテーションが私は今でも忘れら

れないです。何が忘れられないかというと、それは写真に写る子どもの笑顔でした。それを見て私はなぜか涙を流しました。今でもなぜかわからないが、ただ素直に間近で子どもの笑顔がみたいと思ったからです。そして、もうひとつ、IWCに参加したサークルの先輩の「楽しい」という言葉に心を動かされたからです。

#### <事前準備>

ワークキャンプに行くまでに、事前研修として週2回、インドネシア語と文化など、様々なことを学んでいました。他に、アスラマで子どもと交流するときの歌や踊りなどの練習を昼休みにキリスト教センターの集会室でしていましたが、インドネシアに行く実感がわかず、何も考えないで、誰にも迷惑をかけていないと勝手に思い、無断で休んでいたことをこの場をお借りして謝りたいです。今思うと先のことが見えてなくて、今自分がすべきことをわかってないと思いました。

#### <日本語班>

成り行きで日本語班の班長になり、日本語班は授業内容を考えること、教材の作成など、インドネシアに行くまでに準備すべきことが山のようにありました。インドネシアの子どもがどれくらい日本語を理解しているのかわからないのに、授業の内容を作っていくのが大変でした。誰にでもわかるように簡単にし、かつ楽しくゲーム方式で日本語を学べるものを採用していきました。そのゲームの台本、また教材の準備の段階で班員に班長としてうまく人を使うことができませんでした。準備が終えたら今度は日本語の授業の練習をしました。そのときに、教えることの難しさを実感しました。私達が人に何かを教えることは初めてで、さらにはわかりやすく日本語を教えるにはどうしたらいいのか、どのように授業をすすめると子どもに楽しんでもらえるのか、明確な正解がないものを作っていく難しさを知りました。班ごとに試行錯誤し、各班の個性をだしながら完成させたのですが、これで本当に伝わるのかどうか不安でいっぱいでした。さらに明確な情報がなかつ

たのが不安をさらに掻き立てました。クラスの数が2つなのか3つなのか、人数が何十人なのか、最悪なことも想定して対策を練るのも大事だということ学びました。そして不安のまま現地に行き、インドネシアの学生をまじえて日本語授業の練習をして、ついに本番、緊張と不安で押しつぶされそうになったけど、授業を楽しんでもらえて、またIWCのメンバーにも楽しんでもらえて、今までしてきたことが無駄ではなかったと思い、授業がうまくできてほっとしました。ほっとしたのも束の間、急に看護学校がプログラムで入ってその準備に取り掛からなければなりません。最初は慌てましたけど、落ち着いて、冷静にして考えると配布物は何か何枚足りないのかと必要なものを理解することができて、大きな混乱にならずにすんでよかったです。もちろん施設の協力があったことで、本当にありがとうございました。日本語の授業はすべてうまくいったと私は思いました。そして何より、子どもにとって将来観光業の盛んなバリ島で日本語ができるということは、子どもの仕事の選択肢が広がることにつながるので、私達の授業が日本語に興味をもつための第一歩になればいいなと思いました。

#### <アスラマ>

アスラマで一番に思ったことが子どもの無邪気な笑顔でした。満面の笑みを浮かべる子どもはとても可愛かったです。でも、その子ども達は、貧困により子どもを育てることができない家庭の子どもや、親をなくした子どもがアスラマで生活しています。そんな背景があるにもかかわらず、どうしてそんなに笑顔なのか、夢や悩みとかはあるのか、聞いてみたかったのですが、ここで大きな壁にぶち当たりました。それは言葉の壁でした。研修で習ったインドネシア語は必要最低限であって、日常会話はもちろん、何を言っているのか理解ができませんでした。英語で話してくれる子どもいたのですが、私自身英語力が乏しく、少ししか話せないため、私自身が言いたいこと聞きたいことを伝えることができないことがもどかしかった。自分の言いたいこと、聞きたいことを伝える

ために語学力を磨くことが大事だということを実感したのはいいことのはずです。しかし変わりといえばなんですが、一つわかったこともありました。それは、音楽とスポーツは言葉の壁を越えることができるということでした。私は子どもとサッカーをしましたが、ゴールにボールを入れることはどこの国でもルールは変わらないからです。そういう一面を知ることができてよかったです。

#### <出身村訪問>

子ども達の出身村であるバニユボ村を訪問しました。アスラマで今生活している子どもの家に案内されました。そこでは私の知らない世界がひろがっていました。家の前にぶどう畑があって、その真ん中にトイレとマンディをする場所がありました。そこは屋根がなくポロポロでした。水を貯めているところを見ましたが、水がとても汚かったです。台所は木で作られた囲いの中に小さくありました。そして中はとてもうす暗かったです。さらに、村では水は1週間に2回しかこないということで、日本ではありえないことが目の前にありました。それを見たときに私の住んでいるところのありがたさや優越感を感じるとともに、なぜ貧富の差が起きるのか、その差を縮めることはできないのかと考えました。でも、解決策などはわからないままでした。子どもの出身村を訪問したことによって、教育を満足に受けられない、食事を満足にすることができない子ども達が施設に入るまでの生活を少しでも見ることができたことはよかったのですが、衝撃的すぎて何も言えなかった私がいまいました。

#### <まとめ>

インドネシアでの18日間は本当に時がすぎるのが早かった。そして感謝でいっぱいでした。イブ(女性スタッフ)はいつも朝早くから子ども達の世話だけでも忙しいのに、毎日ご飯を作ってください本当にありがとうございました。ホームステイ先の皆さんが私の下手なインドネシア語を必死に聞いてくれたこと、毎朝コーヒーを出してくれたこと、本当にありがとうございました。そして

感謝の他に多くのことをこのIWCの活動で学ぶ中で思ったことがたくさんあり、自分自身を成長させる良い時間であったし、自分の視野を広げることができたワークキャンプでした。そしてその自分がインドネシアで感じたことやできごとを誰かに伝えること、伝えて多くの人に知ってもらうことが大事だと思いました。インドネシアでの活動は無事に終わりましたが、私にとっては始まりだと思っています。

#### <最後に>

IWCのメンバー、引率教職員、美和さん、フォルマンさん、スイクラアマさん、インドネシアで出会った皆さんに感謝しています。ありがとうございました。

## Terima kasih

Tomonori Fujimura (Toson)

Saya ingin pergi ke Bali, Indonesia sekali lagi. Sangat mudah untuk hidup di Bali. Saya senang orang yang sangat baik lebih lanjut. Kami ingin mengucapkan terima kasih kepada semua orang yang diambil dari perawatan dan menghabiskan 18 hari sebagai kamp kerja di Bali Indonesia tersebut.

Terima kasih banyak untuk ibu untuk membuat nasi setiap hari hanya mengurus anak-anak, meskipun sibuk tiap tapi ibu selalu pagi selalu Hawa, Anda dapat memberikan kita dengan jus selama bekerja. Yang melakukan percakapan mendengar sangat miskin orang Indonesia saya homestay, itu ke samping dan melipat cucian, yang memberi saya seprai bersih, makanan dan kopi setiap pagi Terima kasih banyak itu memberi kami.

18 hari di Indonesia sangat cepat pada saat itu juga benar-benar. Dan penuh syukur. Ada banyak hal yang Anda pikir Anda juga belajar

di kegiatan IWC banyak hal selain apresiasi, itu adalah waktu yang baik untuk tumbuh sendiri, dan itu adalah sebuah kamp kerja mampu memperluas wawasan mereka. Dan saya berpikir bahwa itu adalah penting bahwa Anda memberitahu seseorang dan peristiwa bahwa ia telah dirasakan di Indonesia, adalah bahwa Anda harus tahu banyak orang untuk memberitahu, Saya pikir kegiatan di Indonesia telah berakhir dengan aman, tetapi, hal itu baru dimulai untuk saya.

## 新たな発見の連続

国際教養学部 2 回生 勝 美咲 (みさき)



いま、報告書を書くに当たって、このワークキャンプを通し、私が最も印象的だったことは何だろうと考える。

思い返せば、私がこのワークキャンプに参加しようと思ったのは二年前のちょうど今頃だ。桃山学院大学の入学説明会で、IWCの存在を知った。当時の私は、見たもの、聞いたもの、全てに興味がわいて、大学で何をやりたいのか、何のために大学へ行くのかという考えがなかなか絞り切れずにいた。IWCの紹介を受けた時、小学生の時から“ボランティア”という言葉に憧れを持ちながら、何も行動できずにいた事を思い出した。これしかない、と強く感じ、桃山学院大学への入学を決めた。そういうわけで、私は国際教養学部へ入学した。他にも理由はあったけれど、IWCをより有意義なものにするために第二外国語でインドネシア語を履修した。

そして念願叶って、私はIWC27期生としてワ

ークキャンプへの参加を認められた。

### <個人としての感想>

私はこれまで、海外経験がなかった。初の海外にはもちろん何も想像がつかず楽しみな気持ちでいっぱいだったが、出発日が近づくに連れ、不安も増えていった。カルチャーショックや衛生面については、過去のIWCへ参加された先輩方からよく聞いていたので、自分がそこに対応できるか心配していた。しかし、ホテルでもアスラマでも、どこで食べても料理はおいしかったし、体調を崩すこともなく毎日快調に過ごすことができた。もうひとつ嬉しかったことは、インドネシア語力が著しく成長したこと。

インドネシア語を履修しているという点から、個人的に、ワークキャンプ中にインドネシア語で一人でも多く、少しでも長く話そうという目標をたてていた。かなりはりきっていたにも関わらず、ホテルでインドネシアの学生と対面したときは緊張してしまい、事前研修で習ったことくらいしか話せなかった。しかし、ホームステイ先がインドネシアの学生のAyuと一緒に became からは、分かり合えないことばかりだったけど積極的に話すようにした。インドネシアの学生の助けもあって、日に日に語彙力がつくのを実感できた。簡単な会話であればスムーズに話せるようになったし、アスラマの子ども達や、ホームステイ先のパパとイブへの手紙は自分で書くことができた。

バリの水が合った点、履修してきたインドネシア語で現地の人々と会話できたことは本当に嬉しいことだった。

### <IWC27期生としての感想>

インドネシアへ行くまでに私達はチームとして色々な案を出し合い、話し合ってきた。たくさんの時間をかけて考えてきたつもりだったが、アスラマの現状を知らないがゆえ、習慣的な事、より現地の人に身近なことについては実践できなかつたなど反省している。

例えば、ゴミのポイ捨てについて、村にあるゴミ箱の数、子どもがポイ捨てをするのか、誰もか

れもポイ捨てをしているのか、そんな細かなところまで先輩方に聞いておきたかった。

私はなるべく、朝、ホームステイ先からアスラマまでの道のりでゴミ拾いをしながら歩くようにしていた。ある日、ポイ捨てされたゴミを拾っていると、ある中年の女の人がこちらにやってきた。挨拶をすると、ゴミ拾いを手伝ってくださいました。私が、“テリマカシー”とお礼を言うと、軽くはにかんで会釈を返された。いっしょにゴミ拾いをしていたAyuが、“このゴミはあのおばさんが捨てたものだ”と英語で教えてくれた。言われてみれば、そのおばさんは、はにかんだのではなく恥ずかしそうだった。てっきりポイ捨てをしているのは子ども達だと思っていたので、私はとても驚いた。

私達は、アスラマの子ども達に、ポイ捨てをすると街や自然が汚れていくこと、ゴミ箱にゴミを集めることでゴミがリサイクル資源として再生できることを、紙芝居を通して伝えた。しかし、ポイ捨てをしているのは子ども達だけではなく。そうなると、村全体へ、特に大人の方から呼びかけていく必要があったと思う。

反省もたくさんあるが、成功もあった。

子ども達は紙芝居を見た後、ゴミをゴミ箱に捨てることを学生に報告してくれた。毎食後の歯磨きの呼びかけも行っていたが、“スタ ゴソギギッ！（歯磨きしたよ！）”と、こちらが呼びかける前に報告をしてくれる子どもの数が日を追うごとに増えていった。

このIWCを通してやっと本当の意味で“ボランティア”とは何なのかということが理解できたと実感している。

ボランティアとは、相手のニーズや環境をよく知った上で、こちらが働きかけ続けることだと考える。あちらの方々が何を望んでいるのかわからない中、手探りで決めたことが大半ではあったが、想像以上に子ども達の変化や反応が見えたことは成功と言って良いと自信を持つことができる。

<まとめ>

18日間で、インドネシアの方の寛大な心を感じ、インドネシアの生徒やアスラマの子ども達の勉強に対する真っ直ぐで熱心な姿勢を間近で見ることができた。アスラマで子ども達と一緒に寝かせてもらった時には、いつも元気に笑顔で駆け寄ってきてくれる子ども達でも、胸の内に少なからず寂しさを感じていて、それに共感できる場面があった。

いま、私が日本でできることは、行ったからこそ見えた自分自身の反省や問題点、アスラマの改善点など、事前の知識量の不足をIWC28へ感じさせないよう伝えていくこと、そして個人でもできることを考え続けることだ。

今回の経験で、私はたくさん発見をした。この発見を経験で終わらせるのではなく、なにかに確実に繋げていきたい。そのためには、考え続け、あらゆる場面でこれからもボランティア精神を忘れずにいたいと思う。

IWC27に関わってくださった皆様、本当にありがとうございました。

## Suksma Bali

Misaki Katsu (Misaki)

Menerima kesan yang dijaga oleh semua budaya dan tradisi hidup di Bali di Pulau Bali Indonesia. Terkesan oleh karena orang Bali bisa menari tari anak-anak dari yang kecil sampai wanita dewasa, dan agama mereka adalah penting untuk. Saya pikir titik yang berbeda dari Jepang, dan tempat yang baik. Sebagai orang Jepang, saya pikir betapa mereka tahu kualitas Jepang, adalah apa yang saya akan bisa. Ia merasa bahwa harus memiliki sejarah bunga, dengan budaya Jepang yang lebih, bahwa kita juga harus meningkatkan pengetahuan.

Dan Saya mampu untuk mendapatkan melihat dari dekat sikap dan antusias langsung ke

studi anak-anak mahasiswa Asurama dan Indonesia. Saya terkesan dengan melihat mereka.

Kerja kamp 18 hari kami tidak punya waktu benar-benar. Saya pikir saya menyerahkan hasilnya kepada lebih daripada yang saya pikir. Saya menemukan masalah yang akan dipecahkan banyak Indonesia. Hal ini tidak mungkin untuk menyelesaikan semua masalah sekaligus. Karena saya harus dipindahkan ke kamp kerja peserta berikutnya, titik masalah. Dan kamp kerja berakhir, tapi saya ingin terus bekerja untuk mengingat semangat relawan di masa depan.

Saya gugup untuk berbicara dengan orang-orang Indonesia. Saya kesulitan mengalami hambatan bahasa berkali-kali. Belajar bahasa Indonesia dan Inggris tidak mencukupi saya. Saya belajar bahasa Indonesia lebih banyak. Meskipun begitu, setiap orang Indonesia yang telah berbicara kepada saya selalu tersenyum, terima kasih banyak. Saya senang sekali. Saya tidak bisa melupakan. Orang-orang Indonesia baik sekali. Karena saya harus mencintai negara Indonesia dan rakyat Indonesia lebih dari sebelum pergi ke Indonesia. Saya pikir orang yang saya temui melalui program ini, dan ingin bertemu lagi. Waktu saya pulang ke Jepang, saya sangat menyakitkan. Tapi saya tidak menungsi. Karena saya pikir saya akan bertemu lagi dan pasti bisa. Dan saya sudah rindu Bali. Saya tidak bisa lupa delapan belas hari dihabiskan di Bali. Saya ingin memanfaatkannya untuk berbagai hal lain, apa yang telah mereka pelajari melalui kamp kerja.

Bagus, Riant, Weda, Ayu, Rai, saya berterima kasih kepada Anda. Terima kasih untuk mengajar Bahasa Indonesia. Mari kita bertemu lagi !!!!

## インドネシアで過ごした時間

国際教養学部 2回生 野上 玖留未 (くるみ)



18日間は、毎日が濃くて充実していて、あっという間に終わってしまいました。海外へ行くのが初めての私は、文化も違い、話す言葉も違う国へ行くことにとっても不安を抱いていました。もちろん、ホームステイも初めての経験だったので、とにかく不安でいっぱいでした。しかし、ホームステイ先へ着くと、パパ、イブ、ホストファミリーの皆さんは笑顔で迎えてくれたので、不安はすぐに消えました。パパとイブは英語が話せなかったが、娘のクリスティアナは英語を話せたので、私は英語を使ってクリスティアナとコミュニケーションをとることが多かったのです。しかし、私はそれではいけないと思いました。このままだと、パパやイブとコミュニケーションをとることができないと思い、クリスティアナと話をするときも、なるべくインドネシア語を使って、パパやイブとも積極的にコミュニケーションをとろうと決めました。しかし、私のインドネシア語はつたなくて片言で、もはや単語だけで伝えようとしていました。そんな自分が情けなくて悔しくて、どうしようもない気持ちでいっぱいでした。そんな私の片言のインドネシア語を、上手だねって言ってくれたイブには、とても優しさを感じました。イブは、私達が帰るといつもぎゅっと抱きしめてくれて、それがとても嬉しくて、心が温かくなりました。私は、いつも伝えたいことをうまく伝えることができなくて、もどかしい気持ちでいっぱいでした。しかし、イブが抱きしめてくれたことに、言葉じゃなくても伝わる何かがあるのではないかと感じました。

ホストファミリーだけでなく、プリンピンサリ

村の方達はみんな、フレンドリーで、すれ違ったときに挨拶してくれたり、日本との違いを実感しました。私は、温かくて笑顔がいっぱいのプリンサリ村が大好きです。

私達は小、中、高校、看護学校へ行き、日本語授業を行いました。まず私は、どのようにしたら子ども達に日本語に興味をもってもらえるのか考えました。授業をして、楽しかただけでは終わらせたくないと思っていました。私達の授業で、少しでも日本語に興味をもってほしいと思っていました。そして実際に授業をしてみて、伝えることや、教えることの難しさを改めて感じました。また、この授業だけに限らず、事前の準備やミーティングの大切さを痛感しました。事前の準備をどれだけきちんとやっておくかで、本番で力を出せるかが決まってくると感じました。また、私達だけのことでなくて、準備不足だと、子ども達に迷惑をかけてしまうと思いました。子ども達の日本語の上手さには、正直驚きました。「こんにちは」や「学校で日本語の勉強しているよ」と話しかけてくれた子がいて、とても嬉しかったです。

プリンサリ村に来てから4日目、私達はアスラマの子ども達の出身地の1つでもある、パニユポ村を訪問しました。着いて初めに、緑が少ないように感じました。ぶどう園が広がっていて、その中を通り、村の人が生活している家を訪問しました。そこは、私が想像していたよりも環境が悪く、衛生的にもよくないと見てわかりました。水は週に2回、3時間ずつ他の村から運ばれてくるとのことでした。そして、雨水も生活用水になるという話を聞いて、深刻な水不足だということを感じました。また、実際に自分の目で見て、貧富の差というものを感じました。目をそらしてはいけない現実、知っておかなければならない現実を目の前で見て、私には何もできない無力さを感じ、自分たちとの環境の違いに言葉を失ってしまいました。パニユポ村を訪問したことによって、水の大切さを改めて実感し、もっと水を大事にしようと思いました。訪問できて本当によかったと思います。この村で感じたこと、思ったことは絶対に忘れません。

そして次の日、交流会が行われました。私は交流班の一員として、絶対に成功させたいと思っていました。事前研修のときからずっと歌とダンスの練習をしてきました。私は、歌もダンスもあまり得意ではないので、最初は不安でした。しかし練習を重ねていくうちに、不安が少しずつ自信にかわっていきました。私達の出せる力を全部出して、子ども達に楽しんでもらえたと思います。この交流会をきっかけに子ども達との距離も縮まり、本当に良い機会になったと思います。

私は、アスラマの子ども達の生活をもっと知りたいと思ったので、子ども達との一泊お泊りを希望しました。私が泊まらせてもらった部屋の子ども達は、いつも「くるみー！」って言ってきてくれる子ども達ばかりだったので、さらに仲良くなれたと思います。実際に子ども達と生活してみたことや、学んだことがたくさんありました。子ども達はみんな、自分のことは自分でしていました。私が泊まった部屋の子ども達は、大きい子と小さい子の年の差があって、年上の子が年下の子の面倒をみたり、手伝いをしていたのが印象に残っています。また、勉強の時間になると、それまで遊んでいた子ども達も切り替えて、遊びと勉強のメリハリがついていました。私も見習わなければならないと思いました。お泊りをして、子ども達の生活をさらに知れて、本当によかったです。

時間が経つにつれて、子ども達との距離も縮まり、それと同時に別れの日も近づいてくると思うと、とても寂しい気持ちになりました。そして離村式の日の帰り際、明日で子ども達ともお別れと思うと、涙がとまらなくなりました。そんな私を見て、ある子どもが、ぎゅっと抱きしめてくれて、涙を拭ってくれました。私は、子どもの優しさを改めて感じ、その嬉しさと、お別れすることの寂しい気持ちで、涙が止まりませんでした。

アスラマの子ども達は、純粋でまっすぐで優しく、笑顔がとても印象に残っています。そんな子ども達に、いつも元気もらっていました。アスラマにいる子ども達は、さまざまな理由があっ

て両親の元を離れ、アスラマにいます。なので、両親の愛情はもらえていないということです。そんな子ども達に、私は限られた時間の中で、精一杯の愛情を注ごうと思いました。子ども達は、自分のことは自分できちんとしていて、その姿をみて、まだまだ甘えている自分が情けなくなりました。子ども達から、優しさや、まっすぐで素直さを学びました。そして、子ども達のために何ができるのか考えることや、子ども達と過ごした時間は一生忘れません。

こうしてインドネシアで充実して過ごすことができた理由の一つとしては、インドネシアの学生がいてくれたことです。日本語授業のときなど、他の場面でもずっと通訳してくれました。私の片言な英語やインドネシア語を、一生懸命理解しようとしてくれて、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。そして、嫌な顔ひとつせず、台本の訳をしてくれたり、インドネシアの学生がいないと成り立っていませんでした。本当に感謝しています。インドネシアの学生は、「これは日本語ではなんと言うの?」と聞いてきたり、とても勉強熱心だと印象に残っています。日が経つにつれて、いろんな話をして、冗談を言って笑わせてくれたりしました。私はそんなみんなが本当に大好きです。みんなに出会えて本当によかったです。また、必ず会いたいです。

インドネシアでの18日間は、本当に毎日が充実していました。たくさんの人と出会い、別れがあり、でも、出会ったこと一つひとつに必ず意味があると思います。インドネシアでは、協働を通していろんな考え方を学ぶことができました。一つひとつの行動を、誰のために、何のためにするのか、他人のことをどれだけ考えて行動することができるのか、もっと考えて行動しなければならないことばかりでした。そして、自分のことを優先してしまっていて、他人のことを考えていなかったこともあり、自分の未熟さを改めて実感しました。しかし、自分を見つめなおすことができ、自分の成長へとつながりました。インドネシアで学んだこと、感じたことは絶対に忘れません。そして、このインドネシアでの経験をここで終わるの

ではなく、次に繋げて活かしていきたいです。私はIWC27期の一員として参加できて、本当によかったと思っています。みんなと過ごした時間は絶対に忘れません。最後に、このワークキャンプに携わってくれたすべての方に、心から感謝しています。本当にありがとうございました。

## Terima kasih

Kurumi Nokami (Kurumi)

Saya merasa sangat senang bertemu kamu. Orang-orang Indonesia semua sangat hangat, ramah dan baik. Dan saya sama sekali tidak baik. Orang-orang selalu menyapa saya, saya sangat senang.

Saya belajar bahasa Indonesia di universitas st. Andrew. Tapi saya bisa berbahasa Indonesia dan berbahasa Inggris hanya sedikit sehingga merepotkan banyak orang. Saya tahu berkomunikasi dengan mereka sangat sulit. Orang-orang Indonesia berusaha untuk mengerti sekuat tenaga dengan bahasa Indonesia. Saya yang hanya sedikit ini. Saya sangat senang dengan itu.

Mahasiswa Indonesia menerjemahkan, saya merasa sangat tertolong. Saya sangat berterimakasih.

Mahasiswa Indonesia dan anak-anak sangat rajin. Jadi saya berpikir untuk belajar bahasa Indonesia lebih banyak lagi. Kalau kita bertemu lagi di lain waktu, saya ingin berbicara bahasa Indonesia dengan benar.

Sebenarnya saya mencoba untuk merasakan pengalaman yang berbeda di Indonesia, sehingga saya akan menjadi orang yang lebih baik. Berbeda dengan sentuhan budaya jepang sangat bagus.

Anak anak Indonesia ramah lugu dan selalu tersenyum. Saya mendapatkan semangat dari anak-anak. Saya sangat senang anak-anak selalu

memanggil saya kurumi ! Saya dan anak-anak bermain sepuluh ribu skala alpen dan Origami, saya sangat senang. Anak-anak menari dengan sangat pintar dan indah di acara rapat Interaksi, Pada saat Interaksi, saya bisa lebih berhubungan dengan sangat senang.

Saya ingin bisa lebih lama di Bali. Saya merasa sangat baik. Saya tersentuh dengan Budaya Indonesia. Saya ingin tahu lebih banyak tentang Indonesia. Dan Saya bisa menghabiskan besar di Indonesia 18 hari, terima kasih kepada orang-orang Indonesia. Saya sangat menghargai. Bahwa Saya bertemu semua orang Indonesia, Saya tidak akan lupa.

Saya juga benar-benar ingin pergi ke Indonesia. Terima kasih banyak.

## 充実した日々

社会学部 1 回生 堀田 涼介 (ポッター)



### <きっかけ>

僕がIWCへ参加しようと思った理由は、友人に誘われたからというのが大きな理由だ。IWCのことは入学式の時、チャペル前で配布していたプリントをもらい知り、僕も人の役に立てる事をしたいという気持ちがあり、友人と一緒にIWCに参加をした。

### <事前研修、準備>

ワークキャンプに行くまでに、週2回の事前研修や夏休みの集まりがあった。事前研修ではインドネシア語はもちろんのこと、バリの歴史や文化や習慣などを学んだ。初めはインドネシアやバリ

島について全く知らず自分には関係ないことのように感じていたのだが、回数を重ねるうちに簡単なものや、よく使う挨拶などのインドネシア語の単語を覚え、インドネシアやバリ島に関する知識が入ってきて、少しずつ自分はインドネシアのバリ島に行くのだと気持ちが高まったし、インドネシアやバリ島に関することに敏感に反応するようになっていた。

また、夏休みには合宿をはじめ、キリスト教センターでの交流会の歌やダンスの練習や、日本語授業の準備や練習をした。正直行くのが嫌な時もあったが、苦しいときにこそ頑張ることができたと思う。またこのころにはチームの仲もよくなっていき、練習に行くのが楽しくなり、毎日が充実して準備期間が減っていくのに反比例し、自分の気持ちが高まっていった。

自分個人としては、日本語班としての準備がすごく大変だった。なぜなら、インドネシアの生徒たちがどのくらい日本語を理解していて、どのくらいのレベルの授業をすればよいかや、何クラス授業するか、1クラスに何人ぐらの生徒がいるのかが分からなかったからである。僕らは、去年の報告書などからできるだけたくさんの情報を集め、いろんな状況に対応できるようにしたが、それでもたくさんの不安要素を抱えて準備が終わってしまった。

### <インドネシア、バリ島、プリンピンサリ>

僕は今まで日本以外の国に行ったことがなかった。だから、特にインドネシアで驚かされることがたくさんあった。飛行機から降りた時はインドネシアに来たという実感が湧かなかった。しかし、空港に入った途端に日本とは違う匂いを匂った時に、ここはインドネシアなのだと感じることができた。デンパサール空港からは、ホテルに向かうまでバスに乗って移動した。移動中にはそこら辺にある建物が世界遺産のように見えたり、でかい像があったり、バイクがすごく多かったり、3、4人乗りしている人が普通にいて驚かされた。

そんな中でも一番日本とインドネシアの違いで印象に残っているのがマンディである。マンディ

とは、日本でいうお風呂のことだが、日本と違い浴槽がない。それに、プリンビンサリではほとんどの家でお湯が出ず、真水でマンディするのだ。インドネシアでは、そのマンディを朝と夜の2回入る習慣がある。インドネシアは一年中夏季であるが、マンディの入る朝や夜は、日本の夏の朝や夜と比べものにならないほど冷え込むため、毎日朝晩気合を入れて、叫びながらマンディしていた。

#### <インドネシアの人々>

僕が一番最初にインドネシア人としっかり話したのは、シイクラマさんとフォルマンさんである。僕は英語もインドネシア語も分からない。しかし、知っている単語を並べて何とか伝えようとすると、嫌な顔一つせず、頑張って理解しようとしてくれた。ほかのインドネシアの人々でも、見た目が恐くて喋りかけにくい人もいたが、そういう人も向こうから話しかけてくれる方がいて、すごく優しくしていただいた。

インドネシアの学生もつたない英語で話す僕達に嫌な顔一つせず、頑張って理解しようとしてくれた。特に日本語授業の準備では、やり方が分からないものがあれば、分かるまでいろいろ質問してくれた。それに、この授業はこの学年には簡単すぎるや、盛り上がりだろろうなどの助言もしてくれた。そのおかげで、日本語の授業が上手くなったのですごく感謝している。

ホームステイ先でもパパやイブ、その家の娘さんがナシゴレンなどの朝ごはんをほとんど毎日作ってくれたり、インドネシアの伝統的なものや食べ物も教えてくれたりした。

ほかにも、自分のホストファミリーでない人の家に遊びに行った時も、そこのパパやイブが優しく歓迎してくれた。

アスラマの子ども達とたくさん接する機会が多かったが、その時は普通、言葉の壁があるのに、それがあまり感じられなかった。確かに、僕がインドネシア語や英語を話すことができたらしつとしっかりコミュニケーションをとることができたのだろう。だけれども、インドネシア語や英語を

話すことができない僕でも、一緒に体を動かして遊んだり、子ども達が積極的にボディランゲージなどを使って接しようとしてくれたりしたので、それなりにコミュニケーションをとることができた。

他にも、ホームステイからアスラマに行くまでの間や、散歩をしている時に知らない人が笑顔で挨拶してくれた。

ある時、福田先生が「アスラマの子ども達は日本人達と比べてお金の面では決して豊かではないけど、ほかの面で日本よりも豊かな面がある」と、話してくれた。僕はこの言葉を聞いた時、確かにその通りだなと思った。その理由は、それまでアスラマにいてたくさんのインドネシアの人々を見ていて、接していてなんとなくだが、そう感じていたからである。アスラマの子ども達はすごく笑っていることが多い。ただ話をして、ただサッカーをしている、ただ食事をしているだけの時に、アスラマの子ども達はすごく笑っているのだ。僕達にとってはただ話をしたり、サッカーをしたり、食事をしているという感覚なのだが、アスラマの子ども達にとってはそういう時間や出来事を大切にしているように感じた。だから、僕達にも積極的に話しかけてくれ、優しくしてくれるのかなと思った。僕達がアスラマに滞在する期間が限られていたというのもあるが、それでも僕達と関わる時間を大切にしてくれていたと僕は思う。日本では外国人が多いというのもあるが、プリンビンサリでのような対応をしていることを目にするのは滅多にない。日本ではそういう時間を大切にしていないや、優しさが無いなどという訳ではないが、プリンビンサリ村の人々、インドネシアの人々から学ぶことはたくさんあると思った。

#### <現地での作業>

僕たちはIWCの活動としてワークや日本語授業や交流会などを行った。ワークは、前回のIWCのエヴァリエーションで提案された、プリンビンサリの施設の子供マンディ場の建設のために穴掘り、土運びや畑仕事や道路の草刈りをした。予定

ではムラヤの施設でのマンディ場と洗濯物干し場の改修工事もあったのだがそこまで完璧にすることができなかった。なぜできなかったかという、プリンピンサリの穴掘りにすごく時間がかかったからである。確かに大変な作業で、期間内に全ての作業を終わらせることはおそらくできなかつたろう。しかしもっと効率の良いやり方であったり、もっと作業に早く慣れたりしていたらもう少したくさんさんの作業ができたのではないかと後悔している。ワークはすごくしんどかったけど、アスラマの子ども達が手伝ってくれたり、みんなで声を出したり、歌ったりして何とか乗り越えることができた。ワークでみんなと一緒に何かを成し遂げるすばらしさを学ぶことができた。

日本語授業では、初めて会ったにも関わらずほとんどの生徒が僕らのことを歓迎してくれた。授業に行くまではたくさん不安があったが、その不安はインドネシアの生徒のおかげですぐになくなった。それに、インドネシアの生徒は日本の学生と違ってシャイな生徒が少なくて楽しい授業をすることができた。

#### <IWCを通じて>

僕はIWCに参加してたくさんさんのことを学んだ。たくさんさんのものを見た。そしてたくさん考えた。特に、バニユポ村を見た時にはすごく思うことがあった。「日本は恵まれている」「世界では生きていくのが大変なところがある」「恵まれているのは幸せなことだ」などのことをよく親や学校の先生に言われてきた。言われた時、自分では分かっているつもりでいた。時には自分には規模が大きすぎてどうしようもなく関係ないと思った時もあった。しかし、バニユポ村という生きてくことに精一杯で想像していたのと違うところを見た時、すごい衝撃を受けた。同時にこれは世界でほんの一部にしかならず、もっと悲惨なところもあるのだろうとも思った。自分にはどうしようもないことかもしれない。でも、この現状を見て何もしないわけにはいかないと思った。自分に何ができるかは分からない。でも、自分は現状を実際目にして気持ちが変わった。だから僕は、今回見たこと

を決して忘れず、自分の友達などにこの現状を伝えようと思う。IWCとして、インドネシアでの活動は終わったが、現状を知った今どのように動くことができるかが大切だと考える。僕らがこのようにバニユポ村の人々などのことを考え、行動することによってそういう人々がよりよい生活を送れるようにしたい。そして、僕らがそういう気持ちを持っていることでそういう人々の心の支えになることを願う。

#### <最後に>

僕は本当にこのIWCに参加できてよかったと思う。参加できたのも、参加してよかったと思えるのも、自分一人では絶対になかったことだと思う。だから今回のIWCに携わった先生方、IWC27メンバーのみんな、自分の親、ホストファミリー、バリ島の方々、募金してくれた方々などたくさんの人に本当に感謝している。ありがとうございました。

## Terima kasih

Ryosuke Hotta (Potta)

Aku merasa kembali dengan selamat ke Jepang, itu baik untuk menjadi sangat senang dapat berpartisipasi dalam IWC. Saya berpikir bahwa dia sedang mengalami kehidupan yang bermakna tidak akan menghabiskan liburan musim panas malas jika Anda tidak harus berpartisipasi dalam IWC. Saya pikir yang membuat menyenangkan kenangan dan pengalaman di IWC menjadi bagus karena ia didukung oleh banyak orang, seperti masyarakat Bali dan guru dan anggota IWC dan orang tua. Jadi saya berterima kasih kepada semua orang yang hanya terlibat dalam IWC saat ini. Dan kebiasaan hidup kembali ke aslinya kembali ke Jepang, tetapi tidak melakukan apa-apa yang telah Anda alami saat di IWC.

Ada banyak hal yang telah Anda pelajari dengan berpartisipasi dalam IWC, pernah mengalami. Belum pernah memukul hambatan bahasa sampai sekarang, saya bisa juga menemukan keadaan dunia saat ini yang tidak tahu mereka sendiri. Saya telah menemukan bahwa ide saya untuk pergi ke Indonesia adalah ide yang sangat manis. Saya pikir sekarang Anda telah belajar hal-hal seperti itu, saya mencoba untuk menyampaikan kepada teman-teman dan apa yang telah mereka pelajari.

Dan Anda juga ingin pergi ke Bali juga, jika mungkin. Ada kepuasan dengan banyak hal untuk pergi ke Indonesia kali ini IWC. Tapi menyesal bahwa saya mungkin berpikir aku tidak bisa menghabiskan lebih banyak waktu bersenang-senang dengan orang-orang homestay anak? Dan Asurama Jika saya telah mampu berbicara bahasa Inggris dan Indonesia lagi. Jadi, Saya Berharap saya bisa berbicara banyak hal dan berbagai hal kepada orang-orang dengan meningkatkan kosakata mereka sendiri jika Anda memiliki kesempatan untuk pergi juga di kemudian hari.

## 色々な思いや目標を持ちながら参加した今年のIWC27

国際教養学部 1回生 青山 丹 (あきら)



### <初めに>

色々な思いや目標を持ちながら参加した今年のIWC27 (International Work Camp) はとても良い機会と体験だったと感じております。まず初め

にご協力とご理解を頂いた方々にお礼を申し上げます。

私の父はインドネシア人で母は日本人で私自身両国のダブルで、この度の訪問先が私の生まれたバリ島であったことに感謝しています。私の知っているバリ島は、観光地のバリ島であって、生まれもバリ島の中心部であったため、この度の本当の姿のバリ島は知りませんでした。それも含め私は参加し、IWCの方々や多くの人々と熱くお話をしたり、一緒にインドネシアの学生と協働していく中で色々と私の心の中が変わったと感じています。

### <事前研修>

インドネシアへ旅立つ前の事前研修の中で、多くの先生方による授業で、インドネシアの文化・習慣・言語などあらゆる話に触れ、研修に活かしました。事前研修による授業は私たちのやる気に火をつけました。事前研修の中で募金を一か月皆でやり、ありがたいことに去年の二倍集まりました。私はインドネシアに行く前の段階として、しおりの作成 (記録班)・Tシャツのデザイン作成をしました。なかなか最初は集まらなかった仲間でしたが、話し合いを重ねたり、去年のIWCの参加者の話を聞いたり、去年の資料などを見て夜遅くまで作り上げ、良い出来の物ができました。

### <交流と理解>

さて、事前研修を終え出発の日が来ました。初日は長いフライトを終え、プリサロンホテルでインドネシアの学生と対面しました。その中の一人 (Bagus) は既にFaceBookでやり取りをしていたので、以前にも会ったかのように話がとても早く進み、すぐに私達は打ち解けるようになりました。そして、それからの行動も常にBagusとし、色々な話をしました。私が4歳までしかバリ島にいなかったため、インドネシア語は聞き取れる程度で喋ることはできませんでした。なので、お互い英語で夜遅くまで会話し、経済、宗教、文化、両国が抱えている問題、両国の政治など私が知らない事、彼が知らない事を共有し、お互いを尊重しな

が話し合い、絆を深めました。

#### <団体>

このIWCという団体の中において、とても情報交換が大切だと感じました。日本の学生18人、インドネシアの学生5人、引率の方7人の中で、時折変わる情報の共有はとても困難で、一人が間違えるとみんなが間違えるという大惨事になります。なので、入念に隊長、副隊長、私、インドネシアの学生とどのようにしたら情報の共有を迅速かつ的確にするかと入念に練り考えました。この団体の中で周りをよく見て、的確かつ迅速な判断をした隊長に感謝をしたいです。私一人のIWCではなくみなさんのIWCだと感じ、一つ一つの行動に気を付けました。

#### <ワークの中で気づけたこと>

そして、私の知らないバリ島のプリンビンサリはとても長閑で笑顔の絶えない人々ばかりで、彼らは知らない初見の私たちにすれ違いで必ず挨拶をしてくれて心が癒されました。孤児院での作業は主に深さ2メートルの女子用シャワー室の土台を造る作業で、ひたすら固い粘土質の土を鍬などで掘り起こしました。一見簡単そうですが、暑い中の作業は私たちの体内の水分を容赦なく汗に変えました。重機を使えば1日で終わります。しかし、私たちの労働の大切な事は現場にあり、業者さんとの会話、インドネシア学生との会話とコミュニケーション、時折考えがぶつかった先生との穴の掘り方や方向性の違い、これらの経験は将来団体で活動するとき大きな糧になったのではないかと感じました。ぶつかりながら話し合いを重ね、お互いを尊重してワークに従事しました。ここで感じたのは小さな団体という名の小さな社会です。その社会の中の人には人の数だけの考えがあり、たくさんの人生を生きてきた方がいる。私達お互い同じではない、完全に考えの一致と理解は無理だと思いました。でも、その中でどの様な役割が必要で、何をすべきで何を求められているかを考え、行動し、その後のWorkに大きな影響と改善ができました。その他のWorkにも、子供

との触れ合い、紙芝居、歯磨き指導、休憩中に周辺散策によるアスラマの改善点探しなど。時間を見つけては有効利用をして行動しました。後にアスラマ散策が最終日のエヴァリュエーションに大きなヒントとなり議題になりました。

#### <孤児院と子供たち>

孤児院の子供たちの背景には様々な問題があり、①親はいても経済困難により育てることが困難な子供②親がいない子供、驚くことに前者が多く、幸いにも何度か親が子供の顔を見に来るそうでした。しかし、後者の親のいない子ども達たちはその親のいる子の久しい再会を唇を噛んで見つめていました。そのような姿を見た私は、何故か心がポッカーリと穴が開いたような感覚に陥りました。私とチェスをした第五アスラマの孤児院の子どもは、その頃孤児院に来て間もない子で「お母さんに会いたい」と、下を向きながら寂しそうに言っていました。そのような気持ちを抱いた子は大半であると推測できますが、彼ら彼女らはそれを気にしないほど活発で、元気な子ども達が多かったです。記録班なので、カメラを向けると恥ずかしがらず「撮って！私を撮って！」と笑顔を見せてくれました。しかし、彼ら彼女らは時折、浮かない顔というより悲しい顔を見せる時がありました。私は率直に聞きました「どうなの？寂しいの？」と。返答は驚くことに「いいえ寂しくないわ。私には友達がここにいる、あなたがいるんだもの」と…私はインドネシアの子ども達の前向きな心持ちに感動をしました。もし私が逆の立場なら「寂しい」と答えるからです。しかし、その時折見せる悲しい顔は、やはり何か寂しさを感じるものがありました。

#### <インドネシア共和国と私たちの活動>

今日のインドネシアの経済は右肩上がりであり世界でも注目されている国になりました。国民の人口は世界で4位（約二億四千万人）、インドネシアの大半はイスラム教が占めており、初代大統領から今まで、すべてイスラム教の大統領である世界最大のイスラム国家です。しかし、その著しい

経済成長により多くの貧しい国民が増え、貧富の差が経済成長とともに開いているのが現状です。その著しい経済成長の犠牲であろう子ども達は、この先増えていくのだと私は考えます。その中で私たちの活動ってなんなんだろうと思いました。それは、子ども達の「未来」への小さな投資だと感じました。そして、最後のエヴァリュエーションでは私は下水道の修理を提案し、無事採択されました。子どもの敵である病気・伝染病（下水道の設備不足による蚊のマラリア）が蔓延しないか、アスラム散策の時感じ、思いました。エヴァリュエーションではアスラム関係者や神父様のいる神聖で静かな場所で英語のスピーチをし、とても緊張しましたが、一年生の私にとって大きなチャンスで良い経験だったと感じました。

#### <成長>

私は過去にフィリピンの孤児院を訪れた事があり、そこはスラム街で衛生はひどく、建物はボロボロで、孤児院の中には自らの足で歩くことのできない生後間もない赤ちゃんがいました。彼らは親はまったくいなく、捨てられた子どもが大半でした。なので、今回の孤児院の私の研修前のイメージは、フィリピンの孤児院のようなところであると推測していましたが、実際のところ毎年IWCが活動をしているので建物はとても綺麗で清潔な環境で毎年他国のボランティア団体が訪問し交流をしていて、資金面（毎年他国のボランティア援助）もしっかりしており、先述した通り大半の子どもは親がいる施設だったのです。私の中で“東南アジアの孤児院＝親のいない子ども達が大半”と、勝手に結びつけてしまっていました。私には孤児院というより寮のような施設だと感じました。調べると、インドネシアには他に本当に親のいない貧しい援助の必要としている孤児院（特にイスラムの孤児院）があり、私の次の目標として、そのような貧しい孤児院にボランティアで行きたいなと思いました。そのような多角的視点で物事を見れるようになったのも、私にとって成長した一つだと感じています。そして、その将来の活動の為の一歩として私はこのIWCに参加出来

たこと、多くの方々が協力して下さったことに感謝しています。

## Pengalaman

Akira Aoyama (Akira)

Kegiatan camp kerja ini adalah sebuah kegiatan dimana saya menjadi tenaga sukarela dalam membantu masyarakat, khususnya masyarakat blimbingsari dalam mengembangkan salah satu panti asuhan untuk membuatnya menjadi lebih baik. Camp kerja ini adalah hasil kerja sama antara universitas saya yaitu Momoyama University dengan GKPB (Gereja Kristen Protestan Bali) dimana panti asuhan yang ingin dikembangkan adalah milik GKPB, nama panti asuhan tersebut adalah Widya Asih. Kita bekerja sama dengan Widya Asih kurang lebih sudah 27 tahun dalam mengembangkan panti asuhan tersebut dan saya adalah peserta ke 27, beberapa bidang yang kita sudah kembangkan antara lain dalam segi : edukasi, pengurangan tempat-tempat yang berbahaya bagi anak-anak di asrama, hygiene dan sanitasi panti asuhan, serta social.

Kegiatan ini adalah kegiatan dimana saya melakukan beberapa kegiatan, kegiatan yang saya lakukan adalah bekerja membuat kamar mandi untuk anak-anak di panti asuhan widya asih dan meneliti beberapa hal yang harus di perbaiki oleh panti asuhan widya asih untuk membuat widya asih menjadi lebih baik. Saya mendapat banyak pengalaman mulai dari pertukaran budaya dengan mahasiswa Indonesia, home stay family dan anak-anak panti asuhan, bagaimana cara mereka makan, tidur, dan berbicara sopan dan sehari-hari dalam bahasa Indonesia

Terima kasih atas pengalaman yang diberikan

universitas Momoyama kepada saya untuk mengikuti kegiatan camp kerja ini sehingga saya bisa mengerti budaya dari Negara lain, saya berterimakasih kepada teman-teman mahasiswa Indonesia Bagus, Rai, Ayu, Ryan, Wedha yang sudah mau bekerja bersama-sama dalam membuat panti asuhan menjadi lebih baik dan mengajarkan beberapa hal tentang Indonesia, saya juga berterima kasih kepada keluarga Oki yang telah memberikan tempat tinggal yang nyaman bagi saya, membuat masakan traditional yang sangat enak dan mengajarkan saya tentang budaya Indonesia. Saya sangat senang dengan pengalaman ini, terima kasih semua.

## 成長させてくれた18日間

国際教養学部 1 回生 明智 未邑 (みゆ)



<はじめに。>

私は、入学前からパンフレットなどで国際ワークキャンプ（以下IWC）の存在を知っていた。桃山学院大学に行くからには、絶対に参加したいと思っていた。もともと海外でのボランティア活動に興味があった。しかし、入学してみるも申し込む勇気がなかった。周りの友達も興味がないなどの一点張り。ある日の授業で昨年のIWC26の先輩方の話を聞いた。「刺激が欲しい」、「もっともっと成長したい」、「世界を見たい」という心の底からの思いから、その日、意を決して申し込みに行った。

<事前研修を行って。>

実際にインドネシアに行くにあたって、事前研

修があった。まず、インドネシアに関しての知識があるはずもなく、それに加えてインドネシア語に触れたことがないので話せるわけでもなく、読めるわけでもなく。睡魔との戦いの日々で、ついて行くのにも必死だった。でも、少ない時間だったが少しでもインドネシア語がわかるようになって嬉しかった。

交流会で発表をするダンスや歌。皆、多忙なスケジュールの中でほぼ毎日昼休みに集まり練習に励んだ。出発まで日がなくなってくるにつれ、焦りが出てきたりぶつかり合いもあった。皆が皆、全く同じことを考えるわけがないので、ぶつかるのは当然だ。本気でIWCの成功のことを考えているからこそそのぶつかり合いだと思う。

<インドネシア学生>

8月18日、不安と楽しみな気持ちを抱えて関西国際空港を出発し、デンパサール空港に到着。そして、ホテルでインドネシア学生と初顔合わせとなった。皆、とても日本語がうまくて明るくてとても話しやすかった。一緒に食事を食べ、日本の知っていることなどたくさん質問した。インドネシア語がほとんどわからない私は、なんとか会話したくてついつい日本語で話してしまっていた。しかし、その意味をちゃんと理解してくれていることにとても驚かされた。日本人は英語の授業が中学校からあるのに話せる人は少ない。勉強する時間はたくさんあるはずなのに話せない。インドネシア学生は勉強熱心であった。交流会で一緒に歌う日本語の歌も本番までに歌えるように練習してくれた。私の片言の英語にもしっかりと耳を傾けて聞いてくれた。もっとしっかりとインドネシア語を勉強しておけばいろんな話を話せたのという後悔も生まれた。

<アスラマの子ども達と。>

プリンビンサリ村にある「アスラマ」という施設で2週間ほどお世話になった。子どもは約80人の大人数で暮らしている。年齢もバラバラで、小学生から高校生まで幅広くいる。バリ島内で「アスラマ」というのが7つあり、プリンビンサリ村

はそのうちの第2である。「アスラマ」とは教育費を払えなかったり、まともな生活を送れないなどのいろいろな家庭事情により子ども達が共同生活をしている。私達だけでなく、様々な国がアスラマに支援し、ボランティア活動をしている。この施設の宗教は、キリスト教である。

私たちがアスラマを訪れると、子ども達がダンスなどで歓迎してくれた。ここの子ども達はとても人懐っこくて、元気でいっぱいだった。裸足で走り回り、転けても絶対泣かない。追いかけてこをしたり、折り紙をしたり、絵を書いたりもした。たくさん遊んだ。

私は、子ども達の生活だけでなく、イブ（子ども達のお世話をする人）達の生活にも興味を持った。1日だけアスラマに泊まらせてもらい、子ども達と寝た。子どもの食事を作るイブが一体何時頃に起床し、用意し出すのか。私はイブの生活リズムを知りたくて、次の日、早朝4時前に起きた。外はまだ真っ暗で犬たちに吠えられた。少ししてからイブも起床し、すぐに調理に取り掛かっていたので、お手伝いをした。優しいイブは私にコーヒーを入れてくれたりした。お泊まり保育に参加したことで、子ども達に密着ができ、たくさん学んだ。朝起きた時、ご飯を食べる前、食べた後、寝る前。小さな子どもでも必ずお祈りをしていた。気になったことも多々あり、それはエヴァリュエーションで発表した。

#### <働いた。>

今年は、新しく女の子のマンディ場を作るために穴掘りをした。日差しが強くて、何度も土を運んだりする作業が多いために、とても体力を消耗した。水分補給は欠かさずに行った。イブ達が作ったお菓子がとても美味しかった。たまに出てくるグアバなどのジュースも美味しかった。穴掘りだけでなく、草抜きなどもした。一番楽しかったワークは、「カンクン」を植えたことだ。カエルがいそうな沼に植えた。最初は皆抵抗があったが、子ども達が食べるものなので、一生懸命頑張った。慣れて終わった頃にはとてもいい経験になった。アスラマでしか出来ない体験だと感じた。

その日の食事にカンクンが出てきて、とてもぬまで育ったものとは思えない美味しさに驚かされた。毎日暑い中の作業ではあったが、子ども達の生活をより良くするためと思えば、苦でもなんでもなかった。むしろ、終わった時の達成感はとてもあった。

#### <ホストファミリー。>

私がお世話になったパパとイブは、とても優しく笑顔が可愛い夫婦であった。残念ながら二人共英語が通じないために、コミュニケーションを取るのにかなり苦労した。インドネシア語を話さなくて、英語を試してみたが、通じない日々が続いた。インドネシア語の本を買っていたので、めちゃくちゃな文法だったが会話を試みた。パパとイブは頑張って私が話す内容を理解してくれていた。初めて家に行った時、インドネシアの名物料理でもある、ピサンゴレンを出された。ピサンゴレンとはバナナを揚げたもので、正直、私はバナナが好きではなかった。でも、そのピサンゴレンが毎朝出てくるようになりいつの間にか大好きになっていた。イブの作るピサンゴレンは本当に美味しかった。最後の日にパパとイブに手紙を渡し、苦手なものを克服できたことも書いた。

#### <まとめ。>

18日間インドネシアで活動が出来て本当に良かったと思った。日本でもたくさんのボランティアがある。しかし、海外に目を向けることで、視野や考え方が広がった。自分自身の小さ力は小さくても、仲間としてたくさんの人とすることで出来ることもあることも改めて痛感した。また、子ども達からたくさんのお話を学ぶいい機会でもあった。ずっと勉強しているはずの英語ひとつとってもそうだ。私より年下の子どもばかりなのに、英語力が負けていた。伝えたいという思いが強すぎて口がついてきてくれない場面も多々あった。子ども達やプリンピンサリ村の人々、私は日本でどれだけの贅沢な毎日を送っているかがわかった。そして、この怠けた生活を変えることを心に誓った。

まず、このワークキャンプに行くことを許してくれた両親、引率してくれた先生方、事前研修や準備など手伝ってくれた方々、募金に協力してくれた方々、そして、IWC27のメンバーの皆さん、本当にありがとうございました。このたくさんの出会いに感謝し、生涯忘れることのない最高の経験となり、自分自身への成長の第一歩として歩めた気がします。プログラムが終わったから終わりではなくて、ここからがスタートとして、また、アスラマを訪れたいと思っています。

## Terima kasih

Miyu Akechi (Miyu)

Selamat siang!!! Apa kabar? Saya baik-baik saja!!! Saya bersyukur bahwa saya sudah bertemu banyak orang. Semua orang memberi saya baik padaku Anda tidak tahu bahasa Indonesia tersebut. Kata-kata bahkan jika tidak melalui, aku merasa aku harus belajar juga memimpin jika ada pikiran yang saya ingin berbagi.

Selama 18 ini, saya bersyukur bahwa kita telah membuat hubungan dengan banyak orang. Terima kasih. Aku tidak bisa melupakan senyum anak-anak Asurama. Senyum di wajah semua orang lucu, aku mengambil banyak foto. Ibu membuat saya beras kita sehari-hari. Terima kasih sangat awal di pagi hari benar-benar. Saya cinta Bali. Saya suka Asmara. Orang Bali cerah dan energik selalu cinta Bali, perasaan itu cuaca baik setiap hari adalah baik Pembuatan bangunan tradisional itu indah juga. Pisangoreng buatan Ibu dari keluarga angkat saya, adalah ter di dunia. Aku menjadi untuk mencintai pisang.

Saya pikir saya ingin datang ke Bali juga mutlak. Pada waktu itu, saya juga mengunjungi desa Blimbingsari, saya ingin pergi ke Asurama

dan keluarga tuan rumah. Saya mempelajari bahasa Indonesia bahkan sedikit sebelumnya. Dan saya ingin berbicara banyak dengan anak-anak. Aku akan pergi ke Bali serta dari sekarang selalu.

Terima kasih. Saya tidak lupa bahwa Anda harus bertemu kalian. Aku cinta selamanya. Juga, jaga kesehatan kalian sampai kita bertemu. Bye!!!

## 考え方が変わったIWC

国際教養学部 1回生 吉田 和貴 (かずきB)



### <きっかけ>

IWCに参加しようと思ったきっかけは大学の講義でした。去年のIWCの26回生の生徒の人達が、講義の中でIWCについて説明してくれました。入学前からボランティアには興味は持っていましたが、ボランティアと言っても何をすべきかがわかりませんでした。そこで、講義中にIWCの説明を聞き参加しようと思いが強くなりました。

### <準備期間>

試験や面接に合格した人達と初めて顔合わせした時、私と同じ1回生より2回、3回生の方が多くて、打ち解けることができるか正直不安でした。初めは何をしたらいいのか、自分の本当の目標とは何か全く分からなかったです。私はインドネシア語の講義とか、インドネシア文化の講義とかをただ単に受けているだけでした。しかし、IWC27回生のリーダーや副リーダー、目標などが決まり、IWCへの自分が持っている考えが少

し変わるようになってきて、積極的に参加しようと思いました。

募金活動はIWCのメンバーで週に2日しかなかったのでなるべく募金活動に参加してもらうように周りのメンバーと協力しました。募金活動はとても大変なものではありましたが、IWCで一番多くの金額が集まり達成感のあるものでした。

次に、交流会の準備がありました。交流班を中心に交流会の出し物からIWCのメンバーでひとつずつ決めていきました。はじめは中々まとまらなかった意見もリーダー、副リーダーのもと、ひとつひとつ慎重に選んでいきました。意見がまとまった後にしなければならないことは出し物の準備です。歌やダンスはジャンルがたくさんあり、今日本で流行しているダンスや日本の伝統的な踊り、歌も邦楽や洋楽など、とても大変なものがありました。IWCのメンバーは学年も違えば学部も違います。メンバーのスケジュールが合わない中、少しの時間でも集まりこつこつと練習をしていきました。

インドネシアで行う日本語の授業の準備もありました。今まで先生という立場に立ったことのない私達は大変苦戦しました。まず、日本語の授業をする上でどのような内容の授業をするのかとか1から考えていきました。主に日本語の授業の内容を考えてくれたのは日本語班でした。交流会の練習もありながら、こつこつ日本語の授業の方針を考えていき、インドネシアに行くときには準備をしっかりと行けることができました。

私が所属している班は日本食班でした。日本食班では向こうの児童養護施設にいき、カレーライスを作る内容でした。日本食班だけですべて作ることは不可能なので、IWCのメンバーと協力し、インドネシアに行くまでに2回の調理実習をして、スムーズにできるよう努力しました。

今までやってきた準備の完成度をもっと向上するために合宿も行いました。合宿では足りない準備や、よりいいものを作り出すために念入りに頑張りました。この合宿があるおかげで周りのメンバーとも心が通うようになりました。しかし、現地に着いてからインドネシア学生との準備の打

ち合わせなどがありまだ不安がありました。日本でやるべきことは全て終えて出発できて、うれしかったです。

#### <アスラマ>

私はバリ島に行くのは初めてで、すべてのことが新鮮でした。初めてアスラマに訪れた時、お出迎えセレモニーがあり、バリ島の伝統であるバリダンスや楽器の演奏などで歓迎された時は感動しました。正直、孤児院の子どものイメージはとても暗いイメージが自分の中にありました。しかし、そのイメージとは違い、子ども達みんなの目が輝いているように見えました。子ども達は私に不信感も抱かずに近づいてくれました。私は子ども達に何かをしてあげようと思っていましたが、逆に私が子ども達からたくさんの経験や考え方を貰いました。アスラマでの一番の思い出は子ども達です。子ども達は遊ぶときは遊び、勉強するときはしっかり学び、きりかえがしっかりしていました。アスラマ内を散策したり、今のアスラマの現状を教えてもらったり、いろんなことを学ばせてもらいました。

#### <交流会>

日本で念入りに準備して、交流会のスケジュールや何をするかなどをインドネシア学生に伝えていかないといけないので、毎日のようにミーティングを繰り返しました。英語も少ししかしゃべれなくても、必死に伝えようとしたら伝わるのがこのミーティングでわかりました。ダンスや歌などをインドネシア学生と一緒に練習をしたりしました。本番では練習した成果もあり成功することができました。交流会ではお互いに出し物をしていくというスケジュールでした。向こうの出し物も、とても素晴らしく感動しました。

#### <インドネシアでも授業体験>

日本語の授業は小学校、中学校、高校で教えることになり、初めての授業は私達が準備した授業で楽しく日本語を学んでくれました。しかし、私達が準備した内容すべてを終えることができなく

て後悔しました。その反省を次に活かして、時間配分や授業の進行などとスムーズにすることができ、次の授業からは全ての内容を終えることができました。この日本語の授業を通して私が出たことは、準備を念入りにしていても本番で何が起こるかわからないので、その場ですぐに対応できるようにする対応能力を得ることでした。あと、この日本語の授業で感じたことは、インドネシアの生徒達は素直に恥ずかしがらず、日本語の発音や他の日本語のゲームに積極的に参加してくれたことです。日本の生徒だと恥ずかしがってあまり発音をしなかったり、授業に積極的に参加しなかったりする事があります。私も思い当たる点があります。インドネシアの生徒はとてもまじめで常に笑顔な印象を持ちました。

#### <日本食>

日本食では日本で念入りに準備していた事もあり、成功で終えることができました。私は日本食班に所属していることもあって、他の行事より気合が入っていました。ホームステイ先の家族や子ども達、アスラマのスタッフ達にも喜んでもらえることができとてもうれしかったです。この日本食でも反省点はカレーを時間内に作り終えることに必死で、あまりまわりを見るができなかったことです。しかし、最後には食べてくださったみなさんの笑顔を見ることができよかったです。

#### <ホームステイ先で>

私はホームステイを経験するのは初めてでした。私が初めてホームステイ先に訪れた時、家族全員が笑顔で迎えてくれてとてもうれしかったです。家族とのコミュニケーションの方法は英語でした。家族全員が英語を話せることができました。だから、普段の日常会話は英語でとっていました。毎日少しだけ覚えたインドネシア語も使い、家族にはインドネシア語を教えてもらいました。ホストファミリーの家族みんなともコミュニケーションがとれて、とてもいい家族に巡り合えてうれしかったです。ホームステイ先では毎朝コ

ーヒーとピサンゴレンを出してもらい、毎日のワークを頑張ることができました。一度だけホームステイ先でご飯を食べる機会があり、ミーゴレンとチキンを出してもらいとてもおいしかったです。ホームステイ生活で一番つらかったことはマンディでした。マンディは真水のお風呂で初めはとても嫌いになっていましたが、生活に慣れていくと案外大丈夫でした。一つ後悔があると言えば、インドネシア語でのコミュニケーションがなかったことです。

#### <最後に>

私はこのIWCに参加することができ、胸を張ってこのIWCは成功し、よかったものになったと言えます。初めはうまくいかかわからないメンバーも、今では何でも相談できる仲間になりました。私はIWCに参加することにより、今までの考え方やいろんな物の見方も変わったと思います。私はあまり英語を話せなく、桃山学院大学に來ている留学生ともコミュニケーションをとることを拒んでいました。しかし、今では桃山学院大学の留学生とも積極的に話しています。私にとって、インドネシアの経験は本当に貴重なものになりました。IWCのメンバーやインドネシアで支えてくださいました人達には感謝しております。

Hallo nama saya kazuki..

Kazuki Yoshida (Kazuki B)

Terima kasih atas pengalaman dan kesempatan yang kalian berikan selama 21 hari di bali.. Saya benar-benar senang bisa pergi ke bali dan bertemu dengan kalian semua.. Saya mungkin tidak lancar dan sangat sulit berbahasa Indonesia, tapi saya berterima kasih dengan teman-teman Mahasiswa Indonesia dan anak” panti juga host family yang telah mau bersabar dan mengajari saya berbahasa Indonesia. Terima kasih atas kesempatannya, untuk tinggal bersama

home family di bali, ibu dan bapak sangat baik dan ramah kepada saya, dan juga ibu yang selalu menyediakan teh hangat dan pisang goreng di pagi hari sebelum saya berangkat ke asrama, saya jadi suka pisang goreng, pisang goreng enak sekali. Saya juga berterima kasih untuk mahasiswa Indonesia yang telah mau bekerja bersama-sama dan memberi saya pengalaman baru juga budaya tentang Indonesia, sekali lagi saya berterima kasih kepada keluarga tuan rumah, mahasiswa Indonesia, staff Indonesia dan juga orang asrama, terlebih lagi dengan teman-teman IWC27 juga guru dari momoyama yang telah memberi saya kesempatan dan juga yang telah bekerja bersama-sama sehingga IWC27 dapat terselesaikan dengan baik. Saya sangat ingin untuk pergi ke bali dan bertemu kalian lagi. Terima kasih semuanya.

### 《参加学生のレポート》

Bagus Prakasa



Hello...!! Watashiwa Bagus desu, I was one of representative from Dhyana Pura University for 27<sup>th</sup> IWC. I'm so glad I got a chance to join the 27<sup>th</sup> IWC. I would like to say thank you to Momoyama Gakuin University Japan who held this workcamp and gave me the opportunity to join. I would also like to say thank you to GKPB who invited me to join this workcamp. The 27th IWC was the most interesting camp I've ever been on. I really enjoyed every activities during this workcamp.

Experiences that I've encountered help me to gained my knowledge. I also made so many new friends from different country in this workcamp.

The first day I met with students from Japan, I was so shy. I thought that my English was not good enough and I didn't know how to start the conversation with them. Thankfully, all of students from Japan were so friendly and helpful so I could talk with them although my English is not good. In Belimbingsari I stayed at Mrs. Oki's house and I had my friend Akira as my roommate. Akira is a nice person, I was so lucky that Akira could speak English very well. We talked so much about everything. I loved to stay with Mrs. Oki's family, they were all so nice. Mrs. Oki always made us fried bananas and hot tea before we went to work. The most enjoyable thing was the dinner time, Mrs. Oki cooked balinesse dishes for us and it was so delicious. Akira ate a lot... well me too actually. Hahaha!!

The other friends were also nice to me. I learned so much about Japanesse culture from them. I learned about how they usually eat, how they usually talk with older people, and many more. In this workcamp, I experienced being a teacher for a day. I gave short courses at high schools in Melaya with friends from Japan. We taught Japanesse language. I realized I didn't really know much about Japanesse back then, but with help from all Japanesse friends we finally worked it out. I also met childrens from Widya Asih in Belimbingsari. They were so nice and friendly. Me and my friends told a story about 'How to Save Our Earth' to the childrens there. They listened to our story with anthusias. Belimbingsari is a small village where my grandmother came

from. I just knew that I have a lot of family live in Belimbingsari, that's all because I joined this workcamp.

I would also like to say thank you to all staff from Japan who taught me about many things and gave me a lot of advice. I'm so happy I could learn Japanese dancing and songs. Although at first it might be difficult for me but with patient my Japanese friends helped me to learn. We finally could perform something great together.

I can't say anything but thank you for everything. Thank you to all my friends from Japan, Professor Miyake, Pastor Isao, Fukuda Sensei, Kuruda Sensei, Rei Asahi Sensei, Pak Suikrama, Bli Forman, Ryan, Rai, Ayu and Wedha. Thank you for the good and bad times we've been through together, thank you for the lessons and the experiences. I will not forget you guys and this workcamp. God Bless You all. Mata ne. Baiku dikini "bum-bum".

Ni Nyoman Rai Puspayanti



Hi my name is Ni Nyoman Rai Puspayanti, but you can call me Aii. I'm from Dhyana Pura University. I was one of the students that invited from GKPB to join International Work Camp 25<sup>th</sup>. Thanks to the God because of His mercy and blessing so I could follow this event

until the end. I would like to thank to St. Andrew University and Widya Asih Foundation too for giving me and all my friends from Indonesia to have an opportunity to join this work camp.

That was my first time to join this work camp event. First time when I met with all Japanese students in Puri Saron Hotel, I felt so happy because deep inside my heart I said "Yes, finally I will have Japanese friends!!!". But my heart was divide into 2 parts between happy and afraid... I was afraid of my relationship with Japanese students because I could not speak Japanese well. I felt like "Can I communicate and be their friend???". I was so nervous... But still, I want to be their friend so I tried to speak with them in Japanese language although I always made mistakes in my sentences... But they were not laugh at me. If I made a mistakes in my sentences, they tried to recorrect my words so I could improve my Japanese language little by little. I was so happy, they are really really so kind to me. Between 5 of the Indonesia students, they believed that I was the one who can speak Japanese. But to be the truth, my Japanese language was nothing... Sometimes when Professor Miyake and Isao Chaplain did a speech in the morning in Japanese language and Swikrama-sensei was not in the place to translate it to us, the Indonesia students asked me what Professor Miyake and Isao Chaplain said. But I could not translate it to my friends. I said sorry and felt useless. I want to be usefull to my friends so sometimes when I went back to my Homestay in Blimbingsari, I studied Japanese language before I went to sleep. Thanks to Ayana Ishii (Nappe) and Miki Nakamoto (Mikity), they helped me when I studied to find the meaning of some word in Japanese language. I believe

that they could be a good teacher someday  
^\_^.

When working time in Blimbingsari, I was so shock until I did a SHOCKING CELEBRATION in my mind because that was my first time to do something like plant the vegetable in the mud. Hahaha some of the girls screamed because they did not ready for this. Yeah, I also did not believe it. But what we gonna do is for the childrens so we did it well and was very happy to see the final result of our work. I am very happy to did it for the childrens... And I hope that what we did can be usefull for the childrens in the future.

My Homestay Family is Pak Putra Imanuel and Ibu Sunami. I stayed there with Nappe and Mikity. My Homestay Family is so kind. They asked us to dinner together and Ibu Sunami bought us the Balinese shirt. Every morning, they prepared Pisang Goreng and Warm Tea for us. When I had free time, I talked with them and shared my life story to them. We were like Father, Mother and Daughter. They heard my story and gave me suggestion to keep me stand for my life. I am very happy and I will come again to Blimbingsari to spend my other days with them.

I have gotten many great experiences and I will never forget it forever. Thank you to Mika, Akira, Tomo, Kazuki A, Kazuki-kun, Mie-chan, Mikity, Nappe, Orime, Ryusuke, Tsuyoshi, Paseri, Miyu, Mizuki, Eri, Kurumi, Yuto, Asahi, Bagus, Ayu, Weda, Rian, Asrama's childrens, Pak Swikrama, Kak Forman, Professor Miyake, Isao Chaplain, Fukuda-sensei, Rei Asai-sensei, Kuroda-sensei, Yosuke Maeda and Miwa-san. I am very happy to meet and had be together with you all. I will miss you so much. I hope

this program always continue on the next year.  
God bless you all

Putu Rian Aristianto



I would like to introduce myself. My name is Putu Rian. I am 21 years old. I would like to tell about my experience when was in IWC 27 in Blimbingsari. I am glad and very happy to join the IWC 27. I got many experiences, many friends, and also I could learnt Japanese culture. It was so interesting because I met with all children in Widhya Asih orphanage.

The first time I met with Japanese friends, I was nervous but happy. They were really kind and funny. When was on blimbingsari, I tried to do communicate with them. I was confuse what had suppose to talk with them. I just could introduce myself in Japanese. That was it. Sometimes, I talked with them half Japanese and half English. Beside that, I also learnt about their culture. For example before we had breakfast, or lunch, or dinner, we have to say "Itadakimasu". There are more, zlike "gocisosamadesuta", "okaerinazai", "Otsukaresamadesuta", "Ganbatte", and each others. When I stayed in Blimbingsari, I and Ryosuke Hotta stayed at Mrs. Lilik family's home. They are very kind family. Their home is not so far from Widhya Asih. It is about 15 minutes on foot. Every morning, Mrs. Lilik prepared us some breakfast like nasi goreng,

mie goreng, and tea. We were so happy. Sometimes, we told about our school, Japanese culture, and our friends.

I was happy and glad because I could meet with all children in Widhya Asih. They are so cute, funny, and kind. They always played with us all days. Although we felt tired, but we were happy. I interested when we could visit senior high school. We could teach how to read and wrote Hiragana and also played some interesting games like Dengon game, Karuta, Kokuhaku, Fruit Basket, and each other.

One of great experiences was when I came to Widhya Asih 5 Melaya, where I lived 9 years ago. I felt I come back home. Never I think that I would back again to visit this orphanage. It was like dream become true. Many memories I could remember again. One word I would like to say to IWC 27 is thank you very much to bring me visit my second home (Widhya Asih 5 Melaya). I always remember this experiences.

That was all about my experiences in International Work Camp 27. I have many great experiences, nice friends, nice 'senzei', amazing holiday for me. I will never forget that. I hope IWC will always present every years with the great teams, great activities, and nice experiences. Thank you very much IWC 27.



My name is Ayu, Iam one of Indonesian Student that have a good chance to join the 27th International Work Camp with Japanese Student in Blimbingsari (Negara, Bali). This Camp Started at 18th August 2013, at the first time I felt unconfident and worried about how to made a good communication with all Japanese student because I could not speak Japanese. Fortunately I met some japanese student that could speak English, they helped me so much to made communication to the other student. At the first and the second day of this camp, I was so confused, I was in C group but no one in that group could speak english clearly. I could not understand what are they trying to told me. But day by day the condition getting better, my group mates were very patient to taught me until we could understand each other.

In Blimbing sari, I stayed in Mr. Stevanus and Mrs. Stevanus house. Misaki Katsu is my room mates. Mr. Stevanus was really nice father for both of me and Misaki. Mr and Mrs Stevanus always gave us meals on the morning before we went to Asrama. They were very kind. I felt very happy to stayed in their house with Misaki. She was very active and cute girl. I learned how to be always on time and spirit of the day from her.

I felt just like found a new family in this village. The children in orphanage were very friendly. They all just like my younger sisters and brothers. We did a lot of things in Asrama.

like plant the “Kangkung” and “Singkong”. We also visited some schools to taught Japanese to the student in those schools. Those were very fun activity. I got chance to sleep in Asrama at 26th August, It was very fun because I could do a lot things with children and watched them do their daily activity.

The most unforgettable day was on welcome party’s night. We sang japanese song and did dance together with all children. Everyone looked so happy. I found a new spirit of friendship. Even the members came from different country, different language and different culture but we really could united our heart as one. The Japanese students were so kind. I got a lot of good friends and learned many things from them.

I just felt very sad when this camp over, I saw some children crying on the farewell party in Blimbingsari. It felt so hard to leaved this village. At the last day the childrens picked me and misaki up to Mr. Stevanus house, I felt so moved..., but finnaly I leaved Blimbingsari.

I hope this program will not over, because the children needs us to help them and support them to make a better future.I hope this program can be held every years. The members can studying a lot experience from this program, because studying is not just inside the room but also outside the room.

That’s all about my experience in 27<sup>th</sup> International Work Camp with Japanese students. I think this is my greatest and sweetest experience ever. I just want to say abundant thank’s for all members of 27<sup>th</sup> I.W.C.for all staffs from Indonesia and Japan, and all the children. We still can make a good relation and be a family even this camp already over.



I had got good feeling because home stay family in blimbingsari were so friendly. Everyone in there was kind people also, and asrama’s staff should be more concern to children and higiens more over asrama had animal inside. In making good childrens, good evironment is very important. I also saw many childrens were so clever, they had good passion in studying so everyone in asrama have to keep the environment clean for supporting children’s development. Belimbing sari village was so clean and managed well. It can be good sample for other village in bali, that was also a good thing because if blimbingsari village became a tourism village that would give good advantage, more over many people from various country come to blimbingsari every time. And at last i hope every one who came to blimbingsari can take advantage from that place such as how they keep whole village clean. How to manage our self and live independently. How to be care to the other. How to appreciate the bless of god. How lucky we are who still have parents

第27回 国際ワークキャンプ(インドネシア) 学生預り金精算書

単位:円

収入の部		支出の部			
<b>参加徴収金</b>		<b>¥3,240,000</b>	<b>旅費</b> (ガルーダ・オリエントホリデーズ・ジャパン支払分)	<b>@109,950 × 18</b>	<b>¥1,979,100</b>
(内 訳)			(内訳) 航空運賃84,960	内訳' @78,000 × 18	
学生負担	@ ¥ 150,000 × 18		開空施設使用料2,650円・航空保険 600円・燃料サーチャージ 26,000円	内訳' @31,950 × 18	
	□2,700,000		<b>インドネシア入国審査(機内)料金を円貨支払</b>	<b>@2,460 × 18</b>	<b>¥44,280</b>
			<b>インドネシア出国時空港使用料</b>	<b>@1,449 × 18</b>	<b>¥26,082</b>
(内 訳)			<b>現地での宿泊、食費、交通費その他</b> (YAYASAN WIDHYA ASHIIH支払 学生負担分)		
参加補助金	@ ¥ 30,000 × 18		<b>プリンピンサリ村支出分</b>	<b>約12,371 × 18</b>	<b>¥222,678</b>
対学生補助54万円のうち20万円は社会貢献基金(IWC)、34万円は課外活動等補助費	□540,000		食事代・テントレンタル料(8/19~8/31) 交通費(8/22、27、9/1)、食料等買出し・その他(8/18:パケツ6 8/19:ワーク用麦藁帽子30個、交流会用黄色ビニールテープ、ベンジョール飾り2個、ティッシュ5個、歓迎用垂れ幕3枚 8/20:バケツ(大)5個、殺虫剤1本、除菌スプレー3本、 8/31:石油、軽油、灯油、ベンジン、発電機用ベンジン(離村式の際に使用)		
			<b>デンパサール支出分</b>	<b>約9,568 × 18</b>	<b>¥172,224</b>
			空港駐車場代(8/18)、昼食代(8/21、9/1.9/2)、日本食パーティー用調理器具等(8/21)、日本語授業料備品等、ワーク用軍手、清涼飲料水等(8/22)、パロンダンス鑑賞(9/3)、バス・トラックレンタル代(8/18~9/3)		
			<b>ディアナブラ・ホテル支出分</b>	<b>約22,685 × 18</b>	<b>¥408,330</b>
			(2泊宿泊費、夕食2、昼食1、AGAPE FESTIVAL)		
			(消耗品)ユニフォーム(ネーム入り)	<b>@2,756 × 18</b>	<b>¥49,608</b>
			(消耗品)速乾Tシャツ(オリジナルプリント入り)	<b>@1,400 × 18</b>	<b>¥25,200</b>
			(損害保険料)特別プログラム(飯盒炊爨)時の保険(6/1・8/6学生負担)	<b>@54 × 18 × 2回</b>	<b>¥1,944</b>
			<b>剰余金(返却予定)</b>		<b>¥310,554</b>
<b>合 計</b>		<b>¥3,240,000</b>	<b>合 計</b>		<b>¥3,240,000</b>

# 第28回国際ワークキャンプ (インドネシア)参加のお勧め

第28回国際ワークキャンプ(インドネシア)の参加者を募集する予定です。

## 【このキャンプの特色】

国際ワークキャンプは、桃山学院創立100周年・大学開学25周年記念事業の一環として1987年以來実施している「アジアの人々の協働から学ぶ」プログラムです。

このプログラムの意義は、本学学生と現地学生で編成するキャンプ隊を、関係者の支援を基に、これまでの実践を継承しながら、学生たちが主体的に運営し、バリ・プロテスタント・キリスト教会設立の児童養護施設の建設・設備整備・運営に参加することにあります。

それは、事前の学習・訓練・準備によって始まります。現地の子どもたち、現地学生、施設・教会関係者、村の人々、ホームステイ先の方々との労働・交流などの様々な活動、そして事後の報告書作成・報告会の開催を通してなされる「協働」についての総合的な体験学習です。同時に、日本とインドネシアの関係についての学習、バリの歴史・文化に直接触れる実生活の中でのインドネシア語学習の機会となっています。

## 【期間】2014年8月18日～9月4日の18日間(予定)

※国際情勢等の変化によっては中止・延期・期間の変更・期間の短縮もあり得ることを踏まえておいてください。

【キャンプ地】インドネシア・バリ州ジュンブラナ県ムラヤ郡プリンビンサリ村、第2ウディア・アシ(児童養護施設)

【ワーク内容】プリンビンサリ村の児童養護施設整備工事

【主催】桃山学院大学、バリ・プロテスタント・キリスト教会

【共催】ディアナ・プラ大学

【注意事項】月・木の5限インドネシア語クラス10回・インドネシア文化クラス10回必修となります。

【単位認定】4単位認定されます。(共通自由科目「海外研修-国際ワークキャンプ」)

## 【参加自己負担金】【約140,000円～150,000円の予定】

〈大学並びに教育後援会の援助により、標記の金額が自己負担分となります。〉

なお、為替レート、燃油サーチャージの変動等により参加自己負担金額が変更される場合があります。〉

※パスポート取得、予防接種等に関する費用、海外旅行保険代金は自己負担です。

キリスト教センター集会室で行われる事前説明会にお越し下さい(4月中旬頃を予定しています)。

ご質問等は……キリスト教センター内 チャペル事務室まで

## 編集後記

ワークキャンプでIWC27のメンバーは各自様々な事を手に入れた。日本では経験出来ない事、文化の違いを間近で目の当りにし、私達自身に変化や自身の視野の幅を広げる事ができた。

この報告書はワークキャンプで学んだこと、感じたことを沢山の人々に伝えたという思いを詰め込んだ報告書になっている。各メンバーの思い、現地で体験した出来事、子ども達からもらった笑顔、インドネシア・バリ島の文化、その他様々な事をこの報告書を通して知ってもらえたら嬉しい。

事前研修からバリへ、そして日本に戻りバリで学んだ事を伝える。そのすべてが国際ワークキャンプでありまだまだ28・29と続いていく。IWCの先輩達が受け継いだ意思を次の世代へ受け継いでいくであろう。

国際ワークキャンプ報告編集委員

編集委員長 岸田美香

勝 美咲

吉田和貴

丸野朝陽

第27回 国際ワークキャンプ(インドネシア)報告書

発行日：2013年12月

発行：桃山学院大学 キリスト教センター

編集：国際ワークキャンプ実行委員会

〒594-1198

大阪府和泉市まなび野1番1号

TEL. 0725-54-3131 (代)

印刷：和泉出版印刷株式会社

〒594-0083

大阪府和泉市池上町四丁目2番21号

TEL. 0725-45-2360 (代)

# 第28回国際ワークキャンプ (インドネシア)参加のお勧め

第28回国際ワークキャンプ(インドネシア)の参加者を募集する予定です。

## 【このキャンプの特色】

国際ワークキャンプは、桃山学院創立100周年・大学開学25周年記念事業の一環として1987年以來実施している「アジアの人々の協働から学ぶ」プログラムです。

このプログラムの意義は、本学学生と現地学生で編成するキャンプ隊を、関係者の支援を基に、これまでの実践を継承しながら、学生たちが主体的に運営し、バリ・プロテスタント・キリスト教会設立の児童養護施設の建設・設備整備・運営に参加することにあります。

それは、事前の学習・訓練・準備によって始まります。現地の子どもたち、現地学生、施設・教会関係者、村の人々、ホームステイ先の方々との労働・交流などの様々な活動、そして事後の報告書作成・報告会の開催を通してなされる「協働」についての総合的な体験学習です。同時に、日本とインドネシアの関係についての学習、バリの歴史・文化に直接触れる実生活の中でのインドネシア語学習の機会となっています。

## 【期間】2014年8月18日～9月4日の18日間(予定)

※国際情勢等の変化によっては中止・延期・期間の変更・期間の短縮もあり得ることを踏まえておいてください。

【キャンプ地】インドネシア・バリ州ジュンブラナ県ムラヤ郡プリンビンサリ村、第2ウディア・アシ(児童養護施設)

【ワーク内容】プリンビンサリ村の児童養護施設整備工事

【主催】桃山学院大学、バリ・プロテスタント・キリスト教会

【共催】ディアナ・プラ大学

【注意事項】月・木の5限インドネシア語クラス10回・インドネシア文化クラス10回必修となります。

【単位認定】4単位認定されます。(共通自由科目「海外研修-国際ワークキャンプ」)

## 【参加自己負担金】【約140,000円～150,000円の予定】

〈大学並びに教育後援会の援助により、標記の金額が自己負担分となります。〉

なお、為替レート、燃油サーチャージの変動等により参加自己負担金額が変更される場合があります。〉

※パスポート取得、予防接種等に関する費用、海外旅行保険代金は自己負担です。

キリスト教センター集会室で行われる事前説明会にお越し下さい(4月中旬頃を予定しています)。

ご質問等は……キリスト教センター内 チャペル事務室まで

## 編集後記

ワークキャンプでIWC27のメンバーは各自様々な事を手に入れた。日本では経験出来ない事、文化の違いを間近で目の当りにし、私達自身に変化や自身の視野の幅を広げる事ができた。

この報告書はワークキャンプで学んだこと、感じたことを沢山の人々に伝えたという思いを詰め込んだ報告書になっている。各メンバーの思い、現地で体験した出来事、子ども達からもらった笑顔、インドネシア・バリ島の文化、その他様々な事をこの報告書を通して知ってもらえたら嬉しい。

事前研修からバリへ、そして日本に戻りバリで学んだ事を伝える。そのすべてが国際ワークキャンプでありまだまだ28・29と続いていく。IWCの先輩達が受け継いだ意思を次の世代へ受け継いでいくであろう。

国際ワークキャンプ報告編集委員

編集委員長 岸田美香

勝 美咲

吉田和貴

丸野朝陽

第27回 国際ワークキャンプ(インドネシア) 報告書

発行日：2013年12月

発行：桃山学院大学 キリスト教センター

編集：国際ワークキャンプ実行委員会

〒594-1198

大阪府和泉市まなび野1番1号

TEL. 0725-54-3131 (代)

印刷：和泉出版印刷株式会社

〒594-0083

大阪府和泉市池上町四丁目2番21号

TEL. 0725-45-2360 (代)





桃山学院大学  
St. Andrew's University